
おとこのおんなのこ

平山ひろてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おとこのおんなのこ

【Nコード】

N8870Y

【作者名】

平山ひろてる

【あらすじ】

『サイズに余裕があるはずの、お気に入りのパジャマは、どこか窮屈で。

身体が違和感の塊になってしまったような、おかしい感覚がする

――』

ある日、百合百合な女の子が男の子になってしまった！

これからどうしよう！ わからないわ！

ドタバタあり、シリアスあり。

何とも言えないすれ違い系、性転換百合っ娘(?)モノです！

プロローグ 『おんなのこ、おとこのこ』 (前書き)

ガンガンと批評よろしくお願いします。

よろしければよろしければ。

ガールズラブなのか？ どうなのか？

これは、どうカテゴライズされるんでしょうね。

プロローグ 『おんなのい、おとこのい』

こんな想いをしたことは、ないだろうか。

あなたが男の子なら、女の子になってみたい。女の子になって、自分の胸を揉んだり、色んな可愛い服を着たり、きゃっきやうふふと、女の子仲間と、楽しい会話を繰り広げてみたい、と思ったことはないだろうか。

あなたが女の子なら、男の子になってみたい。男の子になって、色んな遊びをしてみたい、自分のゴツゴツした、男らしい身体に触れてみたい、無茶なイタズラをしてみたい、女の子同士の世知辛い人間関係から離れ、さぼった男社会に触れてみたい、そう思ったことはないだろうか。

実際にそうになったら、どうなるのかなあ。

そんな喜劇の物語。そして、叶わない恋に胸を焦がす、少女たちの物語。

「ふあー……」

五月。そろそろ新しい環境にも慣れ、人々の気が緩み始めるステキな季節。

ここは、ちゅんちゅんと小鳥がさえずり、カーテンの隙間から、温かな陽光差し込むあたしの部屋。

ふんわりとした羽毛ベッドの上で、十五歳の高校生であるあたしこと、青木朱音はむくりと身体を起こす。

——昨日は、夜遅くまでテレビを見てた。

『女の子同士の恋愛なんて、ぜーったいにありえない、きもちわるーい、キャハハ』とさっぱり言い切った女子高生に、悲しみを覚えながら、枕を涙で濡らしながら眠ったものだ。

『男の子になりたい』。

女の子に生まれたら、きっと一度は思うことだろう。むしろ、一度も思ったことがない子が存在するのか。少なくとも、あたしの周りには一人もいなかった。

でも、彼らとは体格も違い、バカそうに無邪気そうに、男同士で楽しげに笑う、彼らの残酷な姿を、少女は傍で見つめることになる。男の子と触れあいながら子供ながら、『男の子になる』という、その考えが達成できないことを知り、やがて、少女として生きてゆくことを決断する。

まあ、そんな小難しいことはどうでもいい。

あたしは、いわゆる『百合系女子』だ。注目すべきは、百合女子ではないことだ。

女の子が好き好き。であるけれど、まあ男の子も嫌いじゃない。どっちでもいけるが、どっちかというと女の子が好きなだけだ。男の子の友達も多いし、告白だって何回もされたことはある。

でも、愛してしまったのは、男の子じゃなかった。

まあ、そんなこともどうでもいいのだ。

叶わない夢を見続ける中で、やがて現実を見つめねばならない。ぼうつとする頭の中で、小難しいことを考えたからか。

どうも、おかしい夢をまだ見てしまっているようだ。

あたしの髪の毛は、ふわりとした肩まで伸びた地毛の茶髪、身体は絹のようにすべすべで、胸も人並み以上にあるはずだし、街を歩けばそれなりの人間が振り向き、厄介な人間に声をかけられる。そんな程度の女の子。

であるはずなのだが。

サイズに余裕があるはずの、お気に入りのパジャマは、どこか窮屈で。

身体が違和感の塊になってしまったような、おかしい感覚がする。「へええ……？」

ふと、自分の胸を見ると、割れた風船のようにしぼんでいた。ふっくらとした胸は小さくなり、まるで男の子のようになっていく。

小さくなった、なんて簡単に表現できるものではない。ぺったんこすぎる。

こんなの、悪い夢だ。

どうして一夜にして、あたしが貧乳にならなくてはならないのか。こんなものは悪い夢に決まっている。まだ、悪い夢を見ているのだ。

だからこそ、あたしは頬を軽くつねってみる。

——痛い。夢じゃなかった。

この貧乳化事件は現実で、あたしの胸は実際にしぼんだのだ。

「どうして……？」

いや、胸だけじゃない。

声も、何となく自分のものではないような、そんな感覚がする。どちらかというと、ソプラノ寄りの声色だったはず。しかし耳に入ってくるあたしの声は、オクターブ下がりのアルトボイス。

ぺったんこになっただけでなく、喉までやられてしまったのか。しかし、なぜ、どうして。様々な疑問が、起き抜けの頭に浮かんでくる。

そこであたしは、一つの嫌な予感を頭に浮かべた。

もしかしたら、男の子になってしまったのでは？

アニメや小説、ゲームではよくあることだ。

朝起きたら、少女が少年になっていた。

逆も、しかり。

でも、それは創作物の中での話だ。

現実には決してありえない。

だからこそ性転換は、嗜好ジャンルの一つとして成立するのだ。

「ええー……」

まさか、まさかね。

恐る恐る、あたしは自らの下腹部に、おそろおそろ手を移動させる。

何もないはずのそこには、男の子である揺るがぬ証拠。

……そのものが、存在していた。

今までそこにはなかったもの、少女が持つはずがないもの。

それがあった。

え？

まじで？

ありえない？

わけがわからない。

わけがわからないが、とりあえず叫んでおく。

というか、口が勝手に動いた。

「ええええええええええ！」

この日から、物語は動き出した。

男の子になってしまった、何の変哲もない、百合系女子の日々が変わったのだ。

第一話 『おんなのおとこの』

「ちよちよちよつと父さん！ 母さん！」

ばん、と勢いよくリビングの扉を開く。
すると。

「あらあら？」

「どちらさまだい？」

リビングのテーブルに向かい合って、楽しそうに何かを話していた男女が、あたしの顔をじいと思つめた。

中性的な顔立ちで、もう三十後半のおっさんのクセに、未だに会社の同僚に男女問わずモテるという、父さん。ちなみに彼は英国人を父に持っている。

もう一人の女性は、元モデルで今もたまにテレビに出ており、わが親ながら美しい母さん。あたしの容姿は、きっと彼女から受け継いだものだろう。

「それどころじゃないの！ 男の子になっちゃったの！」

思いつきり叫ぶが、二人はくすくすと笑って、こちらを見つめている。

「おはよう、朱音」

「なんでそんなに冷静なのよおお！」

あまりにも父さんは冷静すぎて。

「その声で叫ぶと、変な人に思われるわよ？」

あまりにも母さんは平常運転すぎる。

「で、でもお……」

何だ、この二人。

あたしが男の子になったというのに、何の反応もないのか。

「とにかく、落ち着きなさい。朱音」

「うん……」

「見た目は、そこまで変わってないわ」

「ほんとに？」

僅かな希望が見えてきた。

容姿が少女そのものなら、『男の娘』として生きること出来る。

「うん。父さんそっくりよ」

「えええ……」

ちよつとシヨック。

父さんそっくりってことは、普通に男寄りじゃないか。

娘じゃない。男の子だ。うわん。

「そんな嫌な顔しないで欲しいなあ。僕に似るのはそんなに嫌かい？」

「嫌じゃないけどお……」

父さんは中性的な顔をしてるし、かつこ悪くはない。

どちらかと言えば、モテるほうだろうけど。

「別にいいじゃない。朱音、あなたは男の子になりたがってたでしょ？」

「そうだけとお……」

確かにそうだ。

あたしは、男の子になりたかった。

男の子になれば好きな人に告白して、付き合って、結婚できるかもしれない。

女の子同士だと、それさえ叶わない。

同性婚しようにも、好きになった相手が百合少女じゃなければ、想いは成立しないし。

百合少女が悲恋の結果を迎える。

そんなドラマや小説の風潮が、あたしは大っ嫌いだった。

だからこそ、この変化（変身？）は喜ばしいことではある。

あるのだけれど。

何か割り切れないなあ。

そんなことを考えるあたしを尻目に。

「じゃあ市役所行かないとね、母さん」

「そうね。今日はお仕事休めるの？」

「はは。大事なことからね、有給を取るよ」

「そう。じゃあ市役所行きましょう」

「そうだね、行こう。帰りに久しぶりに遊ぼうか」

父さんと母さんは、二人で何やら話を進めていた。

市役所？ 休む？ 一体どういうことなのだろう。

「ど、どうしたの？ 父さん、母さん」

「性別が変わりましたよーって、言いに行かないといけないじゃない？」

「このままだと、朱音は女の子のままだからね」

「ちよっと待って、そんなのでいいの？」

性転換する人も、このご時世多い。

多いけれどもあたしのこれは、性転換と言えるのだろうか。

手術とか、そういう話の前の問題ですけど。ねえねえ。

「はは。お役所仕事だから」

「何とかなるわよ、何とかね」

「ええー……そうなのー？」

父さんと母さんが言うのであれば、そうなのだろう。

きっと大丈夫なのだ。たぶん。

「で、でも、父さん母さん」

「ん？」

「どうしたんだい？」

「あたし、これからどうしたらいいの？」

女の子が、ある日男の子になった。

そんな非現実、経験したこともないし、聞いたこともない。

「男の子になるしかないわね」

「そうだね」

母さんと父さんは、顔を見合わせて頷き合っている。

「どうやって？」

「朱音はもともと、男の子みたいなものだし、今まで通りでいいんじゃないかな」

「そうね。化粧品もいらないだろうし、お洋服代も浮くわ」

確かにそうだけど。化粧品とか高いし。朝の忙しい時間にファンデとか乳液とか化粧水とか、色々準備するのもだるいし。それがなくなるだけでも、かなり楽にはなるだろうけど。

「う、うん。でも、学校は？」

こればかりは、どうしようもない。

いきなり、男が女であるはずの『青木朱音です』と主張して、校内に入っても、不審がられて通報されるのがオチだ。

「そうねえ……」

「お友達に聞いたらどうだい？ えーっと、汐里ちゃんに」

「しおりんに……？」

頭の中に、友人であるお嬢様の姿が思い浮かぶ。

高飛車で、どこかいけすかないが、何故か親友ポジションに落ち着いていた少女。

「理事長の娘さんだし、きっと何とかしてくれるわよ」

「何とかなるかなあ……」

うーん。

『あら、あなた誰？ 近寄らないでくださいな』とか言われるような、そんなオチが見えているが。

「そうよ。電話してみなさい」

「はい。じゃあ、今日は学校休まないといけないうってことなんだ」

「そうなるわね。まあ、汐里ちゃんと話さないな」

「はい……」

あー、ゆーうつ。

男の子になれたのは嬉しいけど、女の子友達にどうやって説明すればいいのか。

よくよく考えれば、今まで苦勞して維持してきた、女の子同士の

コミュニティにも参加できないんだよね。

これからの学校生活、一体どうなってしまうんだろーなあ。

さて。父さんと母さんは出かけていった。

市役所に、あたしの性別が変わったと告げに行くと言う。

笑い飛ばされるのが関の山だと思うのだけど、彼らは根拠のない自信のようなものを持っていた。

根拠がさっぱりわからない。

でもまあ、とりあえずだ。

「早く来てねお願い、泣き顔……っと。送信」

電話をしたら、声で男だとバレ、警戒されてしまう。

そんな心配をしたあたしは、メールで家に呼びつけることにした。家に呼びつけたこと自体は、今まで何度もあったことで、おかしいことじゃない。

ただ、あたしが男の子になっている、というおかしいことを除けば、おかしいことでもなんでもない。

「返信はやつ！」

『すぐ行きます』

メールを送ったら、簡単な返事がすぐに来た。数秒後に来た。

さすがあのツンデレお嬢様は非常時には優しい。ツンデレなだけある。来てくれると言うので、とりあえず自らの容姿を、洗面所にある鏡の前に立ってチェックしておく。

「……男じゃん」

顔立ちは本当に、父さんに似ている。

女なのか、男なのか。

顔だけを見ればあまり見分けのつかない、中性的なものになっており。すべすべした絹のような肌は変わらず、肩までかかる、茶色の短髪も変わっていない。

でも、身体の骨格と筋肉が、そこはかとなく変化してる。

それにちょうどいい具合に、ぷにぷにだった身体は、筋肉でかち

かちになつてゐる。細い腕に、しっかりとついた筋肉。

力を入れなければぶにぶにしているけど、入れると鉄のように固い。

全力でぶん殴れば、壁に穴が空くのではないだろうか。そんな錯覚すらある。

身長もちよつと伸びてゐるし、色々と無茶苦茶だ。

小さかったお尻は、少し大きく男の子っぽいものに変化して、もはやはいっていたパンツなんて、ぴちぴちになって、ゴムが緩んでいた。

「これじゃ絶対にしおりん、わかってくれないなあ」
どうしたものかなあ。

今の自らを写真に残し、過去の自分に見せたならば、絶対にその写真があたし自身だとは信じないだろう。何となく似ているかも、とは思うだろうがほとんど別人だ。

「とりあえず、着替えるかな……」

このまま待っていても仕方ない。

こんな無茶苦茶なパジャマ姿でいても仕方ない。

幸いなことに今のあたしは、父さんとあまり背が変わらなくなつてゐるし、父さんの服を借りよう。うん。そうしよう。

そう決めて、あたしは父さんの部屋へと向かうのだけれども。

その時、ぴんぽーん、とインターホンが鳴った。

「あれ？」

さすがに、しおりんが来る時間ではない。

先ほどメールを送ったばかりだし、彼女は学校に行く準備をしていたはずだから、絶対にここに来るはずがない。

宅配便とかその辺りだろう。

「あー、もう。めんどくさいなあ」

母さんがいるときに来て欲しかった。

今は非常事態だ。あたしはとても困っているのだ。

そんな時に、来訪者の応対なんてする余裕があるわけない。

「居留守使おう」

それしかない。

普段なら出ていくが、今はそれどころではないのだ。

申し訳ないと思いながら、あたしは父さんの部屋へと再び向かう。その間インターホンは何度も、ピンポンピンポンと連続して鳴らされていたが、居留守を使うと決めたのだからと、気にせず歩いていく。

でもうるさい。

あまりにもうるさい。

さすがのあたしでも、気になってしまう。

先ほどから鳴らされたインターホンの数は、軽く十回以上。

いい加減にしろというものだ。

「仕方ないなあ」

とりあえず、顔だけ出しておこう。

これだけインターホンを鳴らすのだ。きっと重要なことに違いはない。

それなら、早く出てあげなければ。女モノのパジャマ着たままだけど。まあそういう家庭もあると思ってくれるだろう。それより、緊急の用事があるのだろうし、きっとそんなことは気にしないだろう。

「はい、今行きます！」

アルトボイスであたしは叫ぶ。

そして、とてととと玄関へ走る。

「はい」

ドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。

やがて開かれてゆく扉。

その先にいたのは。

「朱音さん！　すぐ来いって話だったのに、どうして出ないので…
…す？」

「あれ、しおりん？」

一人の少女の姿。

夜の闇のように黒い髪を、可愛らしい白のリボンでまとめてツインテールにしている。その顔立ちは端正で、造形美に満ちており、ぱっちりとした開いた吊り目、ぷっくりとルビーのように赤い唇を持っている、あたしに負けない程度の美少女。

黒崎汐里。

通称、しおりん。

あたしと同じ学校学年で、十五歳の高校一年生だ。

中高一貫校である我が校全体をまとめる、生徒総会の副生徒総長でもある。

「きゃああああ！」

その彼女が、顔を真珠のように白くして、甲高い声で叫んだ。

「しおりん可愛い声出すね」
可愛らしい。

こんな声を聴いたのは、結構久しぶりのことだ。

「ど、どうして、どうしてわたくしの名前をっ！」

「やだなあ、そりゃ知ってるよ。何でも知ってるよ。しおりん、右のおっぱいの下あたりにホクロあるよね。ちっちゃいの」

「へ、変態っ！」

「変態って何さ……」

失礼しちゃうわ。

あたしは百合少女だけど、変態じゃない。ノーマルだ。

「女物のパジャマ着てるくせに、どこが変態じゃないのです！」

「だって着替える途中だったし」

「き、着替え？」

「うん」

ゆっくりと説明しないと。

あたしが男の子になった。そう相談しないといけないのだけど。しおりんは、そろりそろりと背を向け、あたしの前から去っていった。

「そ、そうです。じゃあ失礼しますわね……」

「待って、ちょっと待ってしおりん」

その肩に手を掛け、軽い力で抑えたつもりだったが。

「いたっ！」

「あ、ご、ごめん」

意外に力が入ってしまっていたようだ。

本当に軽く、力を入れたつもりなだけ。

「まだ何か御用ですのわたくしは早く電話しなければいけないところがあるのです」

「どこに電話するの？」

振り返り、むすっとした顔であたしを見つめるしおりんに、尋ねてみると。

「そ、それは教えられせんわ」

「あたしとしおりんの仲じゃん」

「あたし？」

「うん」

どうしたのだろう。

しおりんは、顔を青ざめさせているけれど。

「やっぱり変態ですわああ！ 早く警察に電話しないと！」
失礼な。

やっぱり何も変態じゃないのに。

って、それどころじゃない。電話するって警察にか。

そんなことされたら、あたしの人生設計が狂ってしまう。

何としても理解してもらわないと。

「ち、違うんだってばしおりん。あたしは朱音、朱音なんだよ」

「男じゃないですか！」

すかさず入る突っ込み。

「お、男の子になっちゃった」

「意味がわかりませんわ……」

「うん……だからね、ちよつと説明させて欲しいんだけど」

「よく見ると、朱音さんのお父様にそっくりですけれど……」

「でしょ？」

「でも、それはあなたが朱音さんだという、証明にはなりませんわ」

「そうだなあ……えーと、右のおっぱい横にあるホクロ」

「殴りますわよ？ そんなの、わたくしを盗撮すれば、すぐにわかるじゃないですか変態」

ひゃあ、盗撮犯だと勘違いされている。

決定的な証拠だと思ったんだけどなあ。

「そ、そうだよね。ごめん。えーと……」
うーん。

あたししか知らないことで、あたしがあたしだって証明できる証拠。

何があるだろう。父さんと母さんがいてくれれば、簡単に証明できただけだなあ。

「出来ませんか？」

「ちよつと待って、今考えてるから」

「……はあ」

やれやれ、といった感じでいつものように、ため息をつくしおりん。

いざ、自分が何者かを説明しろ、と言われると結構困る。それなりに困る。どうやって自分を証明すればいいのか。

特に、あたしは女の子から男の子になってしまった。

自らの身分を証明するものなんて、存在を認めてくれた親以外に誰もいないし。

「この前、遊園地行ったよね、一緒に。アイス食べたじゃん」

「そんなの、朱音さんを追いかければわかるでしょう」

即断。

あら、今度はストーカー疑惑。

しおりんの盗撮犯かつ、あたし自身のストーカー疑惑。

困った。非常に困った。ダブルスコアだ。

「うーんじゃあ、この前、数学のノート見せてあげたよね」

「見たのは、朱音さんのほうですわ。ノート真っ白だったじゃありませんか」

「そうだったけ？」

「はい」

即断。困ったなあ。あたしとしおりんしか知らないこと。

それでいて、誰も知りえるはずがないこと。それを探すのって案外難しい。

「んー……」

アニメとかゲームなら、すぐに納得してくれるはずなんだけど。

あんまり都合よくいかないなあ。

「じゃあ、どうやったら信じてくれる？」

「小学校二年のわたくしの誕生日のとき、わたくしにくれたものは何ですか」

「頭にチョップ」

即答。

簡単なことだ。小学校のときの話。

クラスメイトであった、いけないお嬢様の誕生日パーティーに乗り込み、頭にチョップをかましてやった。そこから、何やかんやとあって、その娘とは友人になり、現在まで関係が続いているのだ。

「それを知ってるということは……」

「信じてくれた？」

「はい」

良かった。警戒を解き、笑顔で頷くしおりん。

これで、話を次の段階に持ってゆける。

「それは良かった」

「でも、どうして朱音さんが男の子に？」

「ちよっと詳しく話したいから、中においでよ」

「はあ……」

「詳しく話すほど、あたしも自分の現状に詳しくないんだけどね」

「じゃあダメじゃありませんの」

その通りだ。

女の子に戻れるのか、それとも男の子のままなのか。

原因は何か、どうしてこうなったのか、そんな問題を解決することはできない。

しかし。

「でも、しおりんにしか頼めないこともあるし」

「そ、それなら仕方ありませんわね」

頬を赤らめて俯くしおりん。

可愛いじゃないか、お嬢様。

ずっとそんな感じで、しおらしくしててください。

「うん。じゃあいこ！」

「その前に！」

「うん？」

何で止められたんだろう。

「服、……着替えたほうがいいですわ」

「あ、そ、そっか！」

ぴちぴちの女物パジャマ、明らかに違和感がある。

冷静なしおりんの突っ込みに、自らの異常を再認識した。

「……はい」

「じゃあ、先にリビング行ってね！」

うーん、どうなるんだろう。

期待半分、不安半分。先が全く見えない。

そして、リビング。父さんのものであるジーンズとシャツを着て、

とりあえずはこれで済ませる。これであたしは、見間違えることなき、男の子だ。

あたしとしおりんは、何とも言えない気まずい沈黙の中、テーブルの椅子に座って向かい合う。

何を話せばいいのか、頭の中に話題は浮かぶのだけど、声が出ない。

「朱音さん」

「は、はい」

「声、上ずってますわよ」

「そ、そう？」

「はい」

しおりん、冷静だなあ。

「緊張してるんだよね……。しおりんは、驚かないの？」

尋ねると、顔色一つ変えずに彼女は答えた。

「正直、わたくしは動揺しています」

「そうなの？」

「今すぐに来い、というから、必死に走ってきたのですが」

「そうなんだ……」

ありがたいお嬢様だ。

本当に、こういうところは優しい。ツンデレだし。

それにしても早かったよね。すぐに来てくれたよね。

「そしたら、朱音さんが、男の子になっているのですから」

「あはは……」

「どうして、そうなったのですか？」

不思議そうにしおりんは尋ねるが。

「わかんない。朝起きたら、男の子になってた」

あたしにも、原因や理由はさっぱりわからない。

「よくわからないですわ」

「あたしにもわかりませんわ」

「……本当に、困っているのですか？」

目を細めて、やや非難するようにしおりんは語る。

「困ってるよ！　すげー困ってるよ！」

「そうは見えないのですけど」

「困ってるって！　だって、いきなり男の子になったんだよ？」

「常日頃から、『あー、男の子になりたい』って言ってたじゃありませんか」

痛いところを突かれた。

「そ、そうなんだけど。って、それ母さんにも言われたし！」

「なら、いいじゃありませんの」

「うん……そうなんだけど……」

「なら、わたくしは帰りますわね」

席を立ち、リビングから去ってゆこうとするしおりん。

「えー、ちょっとまってちょっとまって」

あたしも続いて立ち上がり、彼女の肩をがっしりと掴む。

するとしおりんは振り返り、あたしの顔を見つめてゆっくりと語る。

「わたくし、少し気持ちを落ちつきたいんですの」

「そんなに動揺してる？」

「ええ、かなり」

「ふうん……」

そうは見えないけどなあ。

彼女の姿は、いつも通りの冷静沈着な姿そのものだ。

「まさか、朱音さんが男になるなんて……」

「やっぱりダメ？」

「ダメというわけではありませんが……、戸惑いがありますわ」
やや言葉に詰まりながら、しおりんは言う。

「そっか……」

「一番戸惑っているのは、あなたでしょうけど」

「そうなのかなあ、戸惑っているのは間違いないんだけど」

「とりあえず話はわかりましたわ。でも、少し時間をくださいな」

「う、うん」

透き通った目が、あたしを射抜く。

いつにもなく優しく丁寧で、しおりんは語り続ける。

「落ち着いたら、また電話をかけますわ」

「でも、そんなに戸惑ってる？」

「ドキドキです」

「ふうん……」

イタズラ心がふと心に芽生える。

その気配を察知したのか、あたしを警戒する彼女。

「ど、どうしましたの？ その眼は」

「いやあ、あたしが戸惑いをほぐしてあげようかなって」

軽いスキンシップのつもりだ。

いつもやってることだし、別におかしなことではない。

「え？」

しかし、まさかあたしが今、そんな行動に出るとは思わなかったのか。

「えいっ！」

「きゃあっ！」

突然あたしに胸を触られたしおりんは、物凄く可愛い声をあげた。
何この子、女の子ってやっぱり可愛い。

「ふわふわだなあ、やっぱり」

「や、やめっ」

頬を朱に染めながら、しおりんはあたしを振りほどこうと、必死に身体をよじらせたりしているけど、今のあたしの力は以前よりも強い。なかなか振りほどけずにいた。

「やめないよーやめないよー」

「やめろって言うてるでしょうっ！」

すると、思い切り脳髓に、強いチョップを食らわされた。

「あー！」

痛い。結構痛い。

本気で攻撃したな。

「わかっていきますの、あなたは男。男なんですから、そういうことをするのは、もうやめてくださいまし。もし、誰かに見られでもしたら……」

「でも、中身は女の子だもん」

「調子が狂いますわね……」

はあ、とため息をつくしおりん。

「元気出た？」

とりあえず、何だかいつもの調子に戻ってきたように思う。

先ほどまでのしおりんは緊張というか、戸惑いというか、驚愕というか、様々な負の感情が入りまじっているような、そんな雰囲気漂浮させていたけど。

「ええ。どこかのバカが、考える気を吹き飛ばしてくれましたわ」

「ひどいっ！ バカを強調するなんてっ！」

「とりあえず、出かけましょう」

頭の中に不平を浮かべていると、しおりんがあたしの手を引いて、玄関まで歩いてゆこうとする。リビングの扉を開き、玄関へと至る廊下を歩く。

柔らかな手の感覚が伝わる。雪のように解けてしまいそうなほど、柔らかな手に引かれながらも、あたしは尋ねてみる。

「どこに？」

「美容院に行って髪を切って、それから、お洋服を買いましょう」

「お洋服はとにかく、えー、髪の毛切るのー？」

「残念ですけど、似合っていませんわ」

ふう、とため息交じりに背中を見せながら、しおりんは語った。その背中に向かって、あたしは問いかける。

「本当に？」

「本当に」

「絶対に？」

「絶対に」

「シヨックだなあ……」

結構お気に入りだったんだけどなあ、この髪の毛。

性別が変わると同時に、さよならしなければいけないのか。

「そんな奇妙な出で立ちだと、紗希ねえもびっくりしますわ」

「そ、そう？」

思わぬ名前が出て、あたしは驚かされた。

彼女の姉、『紗希ねえ』はあたしたちの学年の一つ上で、先輩にあたる。

「はい。気持ち悪い、と言うと思いますわ」

「そこまでかなあ……」

紗希センパイは、とても優しい人だ。

幻想的で目を離せば消え入りそうなくらい、ぼんやりとした人だが、強い包容力を持っている。本当に優しく温かい人なのだ。

「人には、人に合った出で立ちがあります。朱音さんのそれは、合ってますんわ」

「わかった。紗希センパイが嫌がりそうなら、そうする」

「……そう、ですか」

「ん？ どうしたの？」

「何でもありませんわ」

「うん、それならいいんだけどね」

何やら、微妙な反応だ。

しおりんと、彼女の姉である紗希センパイは、昔からあまり仲が良くない。というか、しおりんが一方的に嫌っているようにも思う。だって、そう見えるんだもん。

何か理由があるのだろうけど、しおりんにそれを尋ねると、毎度はぐらかされるので、聞くのを諦めた。

でも、いい機会だから聞いてみよう、そう思った矢先のこと。

「それから、学校にも行かなければいけないでしょう」

「学校に？」

やがて、廊下を経て玄関に到着。タイミングを失ってしまった。そうこうしている間に、しおりんはがちゃりと玄関の扉を開き、あたしと彼女は家の外に出た。

玄関の外、道路には、黒塗りの高級車が停められていた。

車のドア近くには、年老いた運転手さん。見知った顔のおじさんだ。あれに乗って、ここまでやってきたのだろう。

しおりんの姿を確認した運転手さんが、優美な動作でドアを開く。しおりんとあたしは彼に軽く会釈を交わし、車の中へと乗り込んでゆく。

座席ふかふかだなあ。くそう、ブルジョワジーだなあ。

そんなことを考えていると。

「青木朱音（女）は転校したことにして、青木朱音（男）を編入させなければならぬでしょう」

隣に座ったしおりんが、あたしの顔を見つめて語りかける。

でも、かっこおんな、とか、かっこおとこ、って。何だか、不思議な気持ちだなあ。

「できるの？」

何はともあれ、今のままでは、あたしはただの不審者。

しかし、編入という体裁を取れば、正当なる生徒として扱われる。そこを何とかしてもらうつもりで、最高権力者である、理事長の娘しおりんに、緊急連絡をしたのだ。願ったりかなったりなんだけど。

「あの学校は、わたくし達、黒崎家のものです」

「そうだけど……うーん」

何だか、この期に及んで割り切れなくなってきた。

そんな中、車はゆっくりと走り出す。

「朱音さん！」

あたしの戸惑いと悩みを乗せて進む車中、しおりんがあたしの目を見つめ、語りかけてくる。

「はいっ！」

思わず、元気よく返事をしてしまった。

「あなたはこれから、男として、生きていかなければなりません」

「は、はい」

「元に戻る保証は、一切ありませんわ」

しおりんの小さくも、しっかりとした声があたしの心の中に浸透してくる。

その通りだ。

一生、このままかもしれないし、明日には戻っているかもしれない。

「ない……ね」

「もしかしたら、戻るかもしれません。その時は、その時ですわ。あなたがそれを望むのかどうかは知りませんが、今は、男として生きる決意をしてくださいな」

少なくとも、今は。

男の子として、生きなくてはならない。

「不安、なんだ」

しおりんの優しい口調に、思わずあたしは心の内を吐露してしまった。

嬉しさと、辛さの入りまじった微妙な感覚。

誰に伝えようにも、伝えることのできない胸の痛みと切なさ、そして楽しさと感動。

それが、不安を引き起こしていた。

「不安ですか？」

「うん。男の子になれたのは嬉しいんだよ？ でも、何だかこれからどうなるのかって、全然わかんないし、もやもやしたままだし」

これなら、あたしが好きな人にも告白できる。

うまくいけば、あたしはその人と付き合える。恋人になれる。でも、とあたしは思った。

「嬉しいなら、よいではありませんか」

「そうなんだけど……」

「細かい事は、後で考えればよいのですわ」

さっぱりと、しおりんは言い切った。

「かなあ」

「面倒なことは、わたくしが処理してさしあげます。あなたは、わたくしの大事なお方ですから」

「そ、そう？」

そう言ってくれるのなら、とても心強い。

さすが親友だ。

「……とにかく、わたくしに任せてくれますわね？　わかったら、

一人称を変えてくださいな。俺か、僕で」

「うん、ありがとう。しおりん。お、俺も頑張るよ」

「お気になさらず。朱音くん」

ぱあっと、明るい笑顔を見せてくれるしおりん。太陽のような明るいこの笑みは、あたしの不安を吹き飛ばしてくれるような気がして、とても心強かった。

そして、あたしの呼び名は、朱音さんから、朱音くんになった。微かに希望が芽生えた、あたしたちを乗せた車は、道路を進んでゆき、あたしたちの運命をゆっくりと、変えようとしていた――。

その後、美容院で髪の毛を整え茶髪はそのまま、ショートカットにした。

ちょっと後ろ髪を引かれる思いはあったが、しおりんが良いと言ったので、そのまま任せた。男物の服も、しおりんと一緒に選んできた。

代金は、今度黒崎家の大豪邸で住み込みの手伝い、らしい。

何度かしたことはあるが、あれは手伝いという名の、遊びなのだ。さすがに、ここまで気を遣ってもらっては悪い。でも、しおりん

は譲らなかった。

ありがたいなあ。本当に。困っているときに助けてくれるのが、本当の友達だって言うけど、しおりんは間違いなく本当の友達だなあ。

――そして、学校に到着。

ここは、私立北宮学院高等学校。

共学の中高一貫校である、北宮学院の高等学校で、あたしはその一年生であった。

しおりんは中高の生徒合わせて総勢二千四百人から成る、『生徒総会』の副生徒総長であり、それなりに大変な雑用の日々を過ごしている。

生徒総会規約の前文には、こうある。

『北宮学院は黒崎の私有財産を運用して運営される学究施設であり、生徒の自主性を尊重し、生徒活動を主体的に行わせるため、生徒総会を置く。生徒総会は北宮学院理事会理事長の意思決定を補助する機関として置かれ、生徒総会の決定は、理事長の承認を経て、北宮学院の公式な決定事項として扱われるものとする』。

小難しいことが書いてあるが、内容は簡単だ。

簡単に言い換えれば、生徒総会の力は強大であり、学内における理事長一家、黒崎家の力は、相当に強いということだ。あたしを何とかするくらい、何ということはないのだ。

――時刻はもう放課後で夕方。

生徒の数はまばらで、茜色の夕焼けが校舎を包んでいた。

しおりんは、というと学校に到着して早々、面倒くさい書類の提出に、理事長室へと向かっていった。理事長といっても、自分の親なのだから慣れたものだろう。

あたしは、というと、部室にいた。

『英語研究会』。

構成員は総勢三人。あたしは諸事情から、正式な部員ではないのだが、暇を見つけては、こっそりと顔を出していた。

あたし、しおりん、そして、もう一人先輩がいる。

構成員はたったそれだけの、ちっぽけな部活であり、英語研究会という名前なのに、英語を全く研究していないという、あまりにも愉快で、学校からクラブ活動費をせしめるためだけに、存在している部活であった。

それでも、楽しい日々を送っていたし、あたしは満足していた。

「はあ……」

たった一人の先輩で、英語研究会会長。

英語研究会会長であり、しおりんの姉、紗希センパイ。

今はこの部室に居ないから大丈夫だろうけど、何の説明もしなければ、部室に居座る怪しい男相手に、口から泡を吹いて倒れてしまいかもしれない。

紗希センパイは、極端に人見知りをする人なのだ。

「どうなるかなあ……」

人見知りをするセンパイ、彼女は特徴ゆえに周囲から浮き、虐げられていた。

彼女の妹であるしおりんには言うな、と本人から固く口出しを禁じられていたので、そのことを話すことは一切なかった。

それでも、あたしに優しく接してくれたので、あたしも出来る限り、彼女のためなら何でもしよう、と思い動いていた。

それでもいじめは決して止まず、問題は更にエスカレートした。その度にあたしは沈静化に走っていたけど、結果はよろしくなく、暴力沙汰もよく起こし、退学騒動に発展したこともある。

そのとき、紗希センパイは『朱音ちゃんがいてくれたら、それだけでいい。関係がないのに、迷惑はかけられない』と語り、最高の

笑みを浮かべた。

どうしようもない。

この人を守ってあげたいけど、あたしじゃ無理だ。

彼女でもなく、家族でもない。肉親でもなければ、親族でもない。

あたしと、紗希センパイの間には、何の繋がりもなかったのだ。

その時になって初めて、あたしは男の子になりたいと思った。

男の子になって、紗希センパイと付き合えば。関係と繋がりを持つてば。

この人を助けてあげられる。そう、本気で思い始めたのだ。

前々から口だけでは言っていたが、本格的に考え始めたのは一年前の、その事件があったからだ。

切ない。

切ない話である。

「はあ……」

ため息をつくあたし。

これからどうしよう。

紗希センパイは、本当に人見知りをする。

しかも、いじめられているからか、人を信用しない。信じられないのだ。

このまま、編入して、英語研究会に再び顔を出したとしても、紗希センパイと付き合えるのかどうか、それは最後までわからない。

好きな人いるのかなあ、わからないけど、いるなら難しいだろうなあ。

あたし、根本は女の子だし。本職に勝てるのかなあ。

ハードルたけえ。純粹に、あたしはそう思った。

しかし、さおりん遅いなあ。

そろそろ来てくれても、いい時間だと思うんだけどなあ。

そんなことを、思い始めたときだった。

がちやりと、英語研究会のドアが開かれた。
過疎化しているこの部室にやってくるのは、あたしを除けば二人だけ。

一人はもう学校にいないであろうと考えれば、残るのはしおりんのみ。

「しおりん、遅かったねえ」

あたしは扉の方を見ずに、机にだらーっと、上半身を投げ出しながら言う。

ん？

「……」

あれ？

いつもなら、冷静な突っ込みが入るはずなんだけどな。

「どうしたの？ しおりん」

もしかして、呆れてしまったとか。

そういう感じなのだろうか。

心配になりながら、あたしは開け放たれた扉を見つめる。

そこにいたのは。

「あ……」

思っていた、しおりんではなかった。

そこに立っていたのは、どこか怯えた様子を見せる一人の少女の姿。

秋の稲穂のごとき金色が微かにかかった、セミロングの艶やかな銀髪を、しおりんと同じリボンで、ポニーテールにまとめていて、彼女の透き通った眼は、赤ワインのようにワインレッドに染まっている。それに、可愛らしいメガネを装着しており、落ち着いた調子を演出している。

きめ細やかで色素の薄い肌の色は、穢れを知らない新雪の白を纏っ

ており、水晶のごとく薄く、幻想的で、今すぐにも消え入りそうほ
どだ。

この人こそがもう一人の、英語研究会会員であり、会長。
あたしが、紗希センパイと呼ぶ人間であり。
二年生の黒崎紗希、十六歳。
そして、あたしの想い人だ。

でもでも、どうしてここにいいのか。
時間は放課後、紗希センパイはきつと、もう帰っているものだと
思っていた。

「紗希センパイ……どうして……？」

「だ、誰……？」

小さく可愛らしい声で、怯えを表現する紗希センパイ。
やっべえ。

本当にまずい。

まさか、ここで彼女に会ってしまうとは。
全く考えていなかった。

「あああ、あた、あたしは」
動揺。

心臓がバクバクと激しい音を立て、リズムを刻み始める。
どうすればいいのか。どうしようか。

混乱で思わず、あたしと言ってしまった。

余計に滑稽だ。余計に奇妙だ。このままでは、あたしはただの変
態男じゃないか。

「……」

小さな身体を更に縮まらせながら、紗希センパイはあたしのこと
を見つめている。

彼女にとっては、あたしは今までの『青木朱音』ではなく、『見
知らぬ男』なのだ。怯えるのも無理はない。

「ま、待ってください！ 逃げないで！」

「こ、こないで！ 警察呼びますよ！」

だから説明しようと、紗希センパイに近づこうとするのだが。

彼女は、ぶるぶる震える身体を収めるためか、両手で、ぎゅうつと胸の前に握り拳を作り、必死に怪しい男に抵抗しようと画策していた。

「警察なんて必要ないですから！ 全然必要ないですから！」

「っ……」

「えーと、その、えーと」

どうにかして、紗希センパイを信頼させないと。安心させないと。その手段として、何とかひねり出したのは、しおりんの名前だった。

「そうだ、生徒副総長が来ますから！ 待ってください！」

「あの子の……知り合いですか？」

疑いの眼差しを向ける紗希センパイ。

うわあ、心に来るなあ。

せっかく、経験値を積み重ねてきたRPGゲームのデータが、一夜にして吹き飛んでしまったような。

そんな切ない感覚がする。

「……はい、そうです」

でも、頷いておかないと。

今はまだ、自分が『青木朱音』であると、カミングアウトすることとはできないし、カミングアウトしても、疑い深い紗希センパイのことだ。

信じてくれないだろう。

「……本当にですか？」

「はい。しおりんの、えーと、友達です」

やはり疑う紗希センパイのもとに、あたしはゆっくりと歩みを進めてゆく。

さすがにちょっとは信じてくれたのか、身体の震えは収まってい

た。

といっても、まだルビーのように赤い目には、怯えの色が滲んではいたけど。

「そ、そう、なんですか」

必死に声を振り絞る彼女を見て、あたしは内心複雑な気持ちになる。

見知らぬ男と話すのは嫌だが、自分の妹であるしおりんの友達だから、無視するわけにはいかない。

そんな葛藤が滲みだしているのが、明白に見えていた。

「えーと」

この気まずい空気。

一体、どうしたらいいんだろう。

戸惑う中、あたしは、ゆっくりと紗希センパイのもとに、歩みを進める。

紗希センパイは小柄で、女の子であった時からそうだったけど、見下ろす形になる。

「な、何ですか？」

あたしを見上げながら、困惑の表情を浮かべる彼女。

「今度、この学校に編入してくるようになった、一年生の青木朱音って言います。それでえーと、この部に入部させてもらいたいなって、思うんですけど」

「あおきあかね……？」

疑問の表情を浮かべる紗希センパイ。

その顔はどこか疑わしげでありながら、何だか嬉しさを表現しているように思えた。

「はい。青い木に、朱色の朱に音です。あおきあかね」

一瞬、驚いたように目を見開いて、

「そう……なんですか。あなたと同じ名前の子が、この部活にいます。……その子は、女の子なんですけど、ね」

楽しげに、紗希センパイはどこか遠い目を浮かべながら、あたし

に語る。どうしてだろうか、女の子、の部分が強調されていたが、まあ関係のないことだろう。

ごめんなさい、それ、あたしです。

それに、もういません。

「……何となく、あなたに似てるような気がしますけど。もしかして、ご親戚とか？」

不思議そうに尋ねてくる紗希センパイ。

敬語だが、これはいつもの紗希センパイだ。

彼女は自分の妹に対しても敬語だし。

あたし相手にも、常に敬語だった。

「えー、あー、関係ないと思います。俺、知りませんし」

「……そうですか」

「はい」

出来る限り、ボロを出さないように語る。

そりゃそうだよな。

紗希センパイが信じてくれるかどうかでなると、怪しいところになるし。

後々、タイミングを探して説明していけばいいや。

その時。

開け放たれたままの扉から、声が聞こえた。

「何をしてるんですの？」

「あ、しおりん」

「朱音くん、ちょっとこちらに」

入ってくるやいなや、しおりんはあたしの手を掴み、部室の外に出てゆこうとする。

そんな、こんな中途半端なままは嫌だ。

「で、でも紗希セ……」

「こっちに来いと、言っているのです」

しかし、強く引かれる手の力に、

「ハイ」

あたしは、ただ従うことしかできなかった。

「では紗希ねえ、また後ほど。早くお家にお帰りになってくださいまし」

「……はい」

本当に姉か。紗希センパイは、目も合わせずにこくりと頷いて、部室内の椅子へと腰かけた。そしてあたしたちは、彼女に背を向けて部室を出てゆく。

「行きますわよ」

黒崎家という、金持ち一家に生まれた姉妹二人。

もう少し、仲良く生きられないものなんだろうかなあ。

廊下を歩くあたしとしおりん。

どうして、しおりんはあんなに姉に冷たいのだろう。

「ねえ、しおりん」

「何です？」

「どうして、紗希センパイにそんな辛く当たるの？」

「女言葉、やめたほうがいいですわよ」

「う……どうして当たるんだ？」

「紗希ねえが、そう望むからですわ。それ以外の理由は、ありませんの。わたくしはシスコンですから。決して、仲は悪くありませんの。仲は」

「……」

いつもこうだ。

この姉妹はこうやって、いつもあたしをはぐらかす。はぐらかして、答えを見えなくさせる。何か大事なことがあるなら、言ってくればいいのに。

あたしたち、親友じゃなかったっけ？

第二話 『混沌とした学園生活の幕開け』

翌日。

あたしは、男の子になる前と同じクラスに、編入することになっていた。

男物のブレザーや、新しい学生証は即座に用意され、必要なものは全て揃った。

さすが副生徒総長。さすが黒崎家。バックアップ体制は、完全というわけだ。

「兵庫県の桜花学園高校から、編入してきました。青木朱音って言います。よろしくお願いします」

ぺこ、と黒板にチョークで名前を書き、お辞儀をする。学校名はでっちあげた。あたしたちの通う北宮学院は関東にあるし、バレるわけがない。

「あー、仲良くしてやってくれ。席はそうだな……」

「わたくしの隣に」

「わかった。黒崎の隣に行け、おいそこの列の奴らは、少しずつ前にずれろ」

頭を上げて、周囲の人間を見ると、奇異と好奇の視線を送っていた。

くそう、見世物じゃないんだぞ。

その中、不安そうにあたしを見つめる、しおりんの姿が何とも言えず、頼もしく、心強かった。

父さんや母さん以外にも、あたしが実は女の子なんだ、という事実を知っている人がいる、あたしは、結構恵まれているのかもしれない。

そして、あたしの男の子としての生活が本格的に始まった。

のだけれども。

ホームルームが終わり、ちょっとトイレに行こうと思った矢先のこと。

さすがに、これはしおりんに、ついて来てもらうわけにいかないしね。

「なあなあ」

「んあ？」

「よう、よろしくな。俺は山岡だ」

早速、男に絡まれてしまった。

悪いことではないのだが、面倒くさい。

追いかけてきやがった。

「はあ……よろしく、山岡くん」

こいつの名前は、山岡雄太。

確か十五歳。

あたしたちの組の男子のリーダーのようなもので、ちょくちょくあたしに絡んできていた人間だ。

嫌いじゃないが、うざい、という問題がある。

ちなみに、しおりんの友人ではある。

「呼び捨てでいいよ。なあ、お前、もしかして青木の親戚か何か？」

「青木？」

あたしのことだろう。

あたしのことだろうが、知らないふりをする。

「ああ、知らないならいいんだけどな」

「誰？」

「青木朱音って、お前と全く同じ名前の女がいたんだよ。何か、入れ替わりで転校していったけどな。残念だ」

「ふうん。そいつが転校して行って、寂しいとか？」

「ああ、寂しいな」

「へ、へえ」

まさか、あたしのことが好きだったとか。

そういう言葉が聞いたら面白そうだと、興味で聞いてみたのだが、意外に真面目な顔をして話すものだから、少しギャップで胸が躍った。

「あいつとなら、本気で殴り合いができた。楽しかった」

しかし、次の瞬間には胸の鼓動は消沈。

あたしは、山岡とよくガチの喧嘩をしていた。

「へえ？」

「まあ終わった話だな。何かの縁だろ、よろしくな。青木」

あー、きゅんとして損した。きゅん損。

やっぱり山岡は山岡だ。頭の中まで筋肉まみれの、バカだ。

「ああ」

「でもさあ、その青木は、俺のことをうぜえうぜえって、殴ってきたんだぜ。うざくねえよな、俺」

初対面の人間に、そんなことを話す人間は、ウザくないのか。そんなことを思いながら。

「まあ、そんなこともあるんじゃないの」

「そうかねえ」

「ああ」

軽く流してやる。

満足して去っていくかな、と思ったらしっかりと横を歩いていた。まさか、ついてくるつもりか。

「なんでついてくるんだよ」

とあたしが言うと。

「え？ いや、連れション行こうと思って」

けろっとした口調で、山岡は語るが。

「っ！」

頬が熱くなるのを感じ、あたしは思わず、山岡の横腹を思いっきり殴ってしまった。

「いでえっ！　なんで殴るんだよ！」

「ご、ごめん」

「力つえーなあ、青木。一瞬気が遠くなったぞ」

「ああ……」

やっぱり、しおりんの時もそうだったが。

あたしの力は、かなり強くなっているようだ。

山岡は身体を鍛えているし、よっぽどのことがなければ痛がらない。

「なんか、武術やってんの？」

そう彼が疑うのも、当然のことだ。

「いや、何もやってない」

気をつけないとなあ。

下手すると、周りの人間をケガさせてしまう。

「へえー。すげえな」

そんなことを話している間に。

男子トイレまでやってきた。

正直ドキドキだ。ドキドキだけど、一応、昨日予習しておいた。

大丈夫なはず。うまくできるはず。そう信じたい。

トイレの前に立ち、山岡に向かって語りかけるが。

「……一人で行きたいんだけど」

「そんなこと言うなよ。行こうぜ、青木」

「ちよっ」

彼は、あたしの肩を抱いてトイレの中へと進入してゆく。

言っているとおかしな話だけど、現実には男同士なんだから、おかしいことはない。

あー、別におかしなことじゃないんだろうけど、あー、何だかもやもやするなあ！

そして――。

「どうです？　男として暮らすというのは」

――クラスメイトの質問攻めも終わり、授業も午前中のものは全て終え。

今は、昼休み。

屋上のベンチに座り、あたしとしおりんは、弁当を食べながら二人で話す。

山岡は振り払った。しおりんの名前を出したら、簡単に引いた。何故か知らないけど、あいつは妙にしおりんに優しいんだよね。「疲れたー」

「初日に体育というのは、それはそれで大変でしたわね」

「そう！　それも大変すぎるんだって！　スプレー、スプレー使いすぎ！」

「体育終わったあとの教室、凄くスプレーの匂いしますものね」

「しなかったらしなかったで、すっげー汗くさいんだけどねえ……」
なかなか辛いものがある。

動きまくるもんなあ。そりゃ汗も出るよ、匂いもするさ。

「匂いフェチに目覚めたのですか？」

そんなあたしを、じいとお見つめるしおりん。

弁当を食べる手が止まってるよ。早く食べて、そんな話題する前に。

「そんなわけないだろー」

「そうなのですか」

「女の子の匂いなら歓迎だよ」

女の子の匂いは香水だの、コロンだの、何だと批判されることも多いが。

あの匂いだって人それぞれだ。いい匂いをさせている子は、いい匂いなんだ。

「おっさんくさいですわ」

「すみません……」

ぺし、っと頭を叩かれた。

しおりん、もうちょっと乗ってくれてもいいのに。

「そうだ、こんな話はどう？」

「どんな話です？」

「山岡と、連れション行った話」

箸をぱたり、と弁当箱の上に置き。

「謝るなら、今のうちですわよ」

素晴らしい笑顔を浮かべながら、しおりんはあたしに言い放つ。

「はい。すみませんでした」

恐ろしい。

笑っているのに、目が全く笑っていない。

「ゴハン食べてるときに、何て汚い話をするんですか。信じられませんわ」

「すみませんでした」

「全く……」

「そういえば、女子の間で何か話題あった？」

「朱音さんが転校していったことを、残念がる話も出てましたわ」

「へえ……」

何だろう。

嬉しいなあ、何か、ほっこりする。

そう思った矢先のこと。

「その後すぐに、昨夜にあったお笑い番組の話に、シフトしましたけど」

「え？ 何？ 俺の人气って、お笑い番組以下だったわけ？」

「それはともかく、朱音くんのほう、人気ありましたわよ女子の間で」

何だか、しおりんはあえてスルーしたような。

ちよっと、あたしの人氣がどうなのか、教えて欲しかったけどね。
「マジでっ！」

元気が胸の底から沸き起こってくる。

女子相手に人気がある、それは嬉しいお知らせだ。

「目の色を変えないでくださいまし」

「はい……」

「カッコカワイイ、だそうです」

「えー、どっちなの？　かっこいいのか、可愛いのか」

中途半端だなあ。

どっちかにしてほしい。

「どっちつかずなんでしよう」

「ひどいっ！」

「まあ、悪評が立つよりはマシでしょう」

「悪評は何かあった？」

「『可愛い子ぶってて、ちょっとうざくない？』という評価が、ク
ラスの某女子から」

「俺は男だっつーの！」

正確には女の子だけど！

もう男の子だから！　その評価はおかしい！

「グループに属していない子の話ですから、気にしないほうがいい
かと。基本的には、高評価ですわ」

「それでもなあ……」

「まだ動作に女性的な部分がありますから。そこは直したほうが良
いでしょう」

「うー……」

直せるかなあ。

動作は、染み付いちやってるものだしなあ。

「これから、何とかかりますわ」

「そうかなー……」

十五年間、女の子として生きてきたのだ。

女の子であるときは、動作が乱暴で男っぽいと言われたこともあ
るが、男の子の基準で見ると、やはり女の子っぽいのか。

難しいなあ。染み付いたものだし。

「そういえば、英研に入るのですか」

「うん。入ろうかなあって。でも、前と同じ感じかなあ」
前と同じ感じ。

正式なメンバーではある。

あるのだが、英研のメンバーであることは、他の皆には秘密になっていた。

そうしろと、紗希センパイに言われたから、そのようなふわふわな状態だった。

「なるほど」

「うっ、うん……」

「なら、前と同じように振る舞ってくださいな」

「わかってるよ」

あー、結局あたしは何もできないのかなあ。

しおりんの声を聞きながら、そんなことを思うのだった。

――そして、放課後。

副生徒総長であるしおりんは生徒総会に出ていて、今は一緒にいない。

こっそりこっそりと、昨日と同じ部室棟の一室にある、英語研究会の部室へと足を向けるあたし。

今日は昨日よりも時間が早く、人の数もそれなりに多い。

誰か他の生徒に見られてしまっただけは困るため、辺りをきょろきょろと警戒しながら、誰もいないタイミングを見計らって、ドアを開いて中に進入する。

「誰もいないーか」

昨日と変わらぬ部室。

ここに、あの人がいた。

「紗希センパイ……」

何というか、あの人に惚れたのは単純すぎる理由だった。

あの人は可愛いのもあるし、触れたら壊れてしまいそうな、硝子細工のような儚さを持っているし、性格も良く、一緒にいて心の安らぐ人。

でも、理由はそれだけではなかった。

それは……。

「入部希望ですか？」

「ひゃあっ！」

突然の背後からの声に、あたしは思わずその場で飛び上がってしまった。

そして、焦りながら振り向くと、紗希センパイがいた。

「あ、昨日の……」

「こ、こんにちは！」

「……どうぞ、座ってください」

さすがに二回目なので慣れてくれたのか、引きつった笑みを浮かべながら紗希センパイは、手を差し伸べて、椅子に座ることを勧めてくれた。

「は、はいい」

「あの子のお友達ですか？」

「は、はあ」

萎縮してしまう。

昨日はあんな騒ぎがあったから、まともに顔を見ていないし。

怯えが滲んだ笑みだったが、それでも他の女子の数倍可愛い。

「そうなんですか」

「はい……」

「えーっと。この部活、英語は研究してないです。もしも、英語がやりたいって言うのなら……」

「知ってます！」

「? どうして？」

不思議そうに首を傾げる紗希センパイ。

英語研究会なのに、英語を研究していない。

なぜなら、この部活は、紗希センパイが中学生のときに作り、妹と二人でいるためにこしらえた空間だから。

「あ、え、えーと、しおりんから聞きました」

でも、正直に答えるわけにはいかない。

その事実を知ったのも、紗希センパイと打ち解けてからなのだ。

「ふふ。そうなんですか」

「……」

「また、入部届書いてくださいね。えっと、改めて、自己紹介します。知ってるかもしれないけど、黒崎紗希。二年生で、ここの会長やってます」

知っている。

他の誰よりも、あなたのことは知ってます。

それでも、そのことを言い出すことが出来ない辛さに、あたしは胸の痛みを覚えた。

「……」

「どうしたんですか？」

そんな事情を知らない紗希センパイは、ただ首を傾げるばかりだった。

「い、いえ。あた……俺の名前は青木朱音って言います。一年生で、昨日転校してきました」

「朱音くん、綺麗な茶髪ですね」

「はうっ！」

健気に笑いながら世間話をしようとする紗希センパイに、思わずきゅんとした。

何だこの可愛い生き物、彼女にしたい。

「あ、なれなれしかった……ですか」

「そんなことないです！ なれなれしいのはウェルカムです！」

「そうですか」

「まさか、髪の毛を褒められるとは思いませんでした」
いつものやり取りだ。

あの、楽しかった英研でのやり取りだ。

「髪の毛以外にも、いい所がありますよ」

「どこですか？」

「えーっと……」

真剣に悩みながら考える紗希センパイに、

「ないなら言わないでください」

あたしは思わず、いつもの調子で返してしまった。

「ご、ごめんなさい。何だか、本当になれなれしくしてしまって」

「あ、ああ、そんなつもりで言ったんじゃない」

取り乱すあたしたち。

何だかぎくしゃくしているが、何だか楽しくて。

「……ぷっ」

「笑ってないで、いい所探してくださいよー」

「そうだね……。目とか？」

これから先、うまくやっていけるような、そんな気がした。

「目なんて褒められてもなあ……」

「あの、朱音くん」

「はい？」

「わたしを見ても、何とも思わないんですか？」

そんな中、ざわりと不穏な空気が流れた気がした。

「可愛いですよね」

「そ、そうじゃなくてですね……」

「他に、何を思えばいいんですか？」

紗希センパイは戸惑っていたが、あたしには理由がわかっていた。彼女の肌は色素が薄く、髪の毛も微かに金色がかった白だ。

瞳は赤ワインのような色をしている。紗希センパイはカラーコンタクトを目に入れているわけでも、髪の毛を脱色しているわけでもなく、外人であるわけでもない。

「それは……」

言葉に詰まる彼女。

「可愛いとしか、思わないです。俺は」

紗希センパイは、いじめられている。

正確には、存在しない人間と扱われている。

ほとんどの生徒からは、暴力を受けているわけではなく、腫れ物に触る扱いを受けている。いないように扱われ、友達もおらず、ひたすらに避け続けられてきた。

「……朱音くん」

女子のみならず、男子までもが紗希センパイを無視していた。

そんな中で、物言わぬ紗希センパイを、面白がって物理的にいじめる女子も、男子も存在していた。

「まだ……会ったばかりですけど」

ゆえに、彼女は孤立していた。

「朱音くんは、気持ち悪いって思わないんですか？」

「思わないです」

この人が、悪いわけじゃない。

この人に、原因があるわけではない。

「そう、ですか」

「はい」

あたしは即答し続ける。

彼女の存在を肯定するように、あたしの存在を認めてくれた彼女に縋るように。

「……ごめんなさい。変なことを聞いて」

「いえいえ」

「わたし、アルビノなんです。そこまで深刻じゃなくて、軽いものなんですけど」

「へえー」

アルビノ、生まれつき身体の色素がない、もしくは薄い人間をそう呼ぶ。全世界どこでも生まれるもので、黒人にもアルビノはいるし、日本人も例外ではない。

「ただ、肌と髪の色も白いですし、目も赤いでしょう？」

「ワインが飲みたくなりますね」

「あはは。面白いことを言いますね」

その容姿ゆえに、紗希センパイの存在は学内でも有名だ。

その名前は中高に知れ渡っている。

有名だが、ほとんど会話に上がることはない。

下手に会話に出して、この学校を取り仕切る理事長を刺激して、自分に不利益が降りかかることを、皆が嫌がるのだ。

しおりんの場合は、乱暴だが積極的に他人に関わろうとする。

だから、理事長一家の娘で、権力者であっても、友達の数は多い。でも、紗希センパイは他人に関わろうとしない。

だから、状況が変わらない。変えようとしていない。

全てを諦めて、ただ流れる時間のままに身を任せている。早く、理事長にチクればいいのに。無理なら、しおりんに言えばいいのに。

それはともかく。

だから、英研には部員がない。

ここは紗希センパイのための、言うなれば聖域なのだ。そうなってしまう。

「何だか、朱音くん。何年も一緒にいたような、そんな感覚がします」

「え？」

「あ、いや、何だか、安心できるような気がするんです」

「俺ですよ」

「汐里の友達だからでしょうか」

「かもしれないです」

それ以上に、あたしとあなたは数年も仲良くしてきたんです。泣いた顔も、笑った顔も、苦しんだ顔も、喜んだ顔も、まるで恋人のように見てきました。

「これから、仲良くなれるでしょうか」

今まで培ったものを、全て放棄して。

「なります」

ここから、また全てを始めなくてはならない。

実はあたしが朱音なんだ、とカミングアウトするのは容易だ。

「ぷっ。なります、ですか」

しかし、無邪気に笑う紗希センパイの心は脆く、壊れやすい。

そんなことを言ってしまったら、何か全てが崩れてしまうような。あたしは、そんな気がしたのだ。

だから、そつと心の奥底に言いたいという気持ちを隠して、笑った。

「はい」

「でも、朱音くん」

「はい？」

「この部室の外では、一切関わらないでください。部員であることも、隠してください」

「……」

予想通り。

紗希センパイも、しおりんと同じで。

「わたしはもう、誰かを巻き添えにしたくないんです」

「紗希センパイ、俺は」

「何も聞かないでください」

いつも、あたしの投げつける疑問をはぐらかす。

昔からそうだ。

ずっとそうだ。ずっとはぐらかされ続けてきた。

「……紗希センパイ」

「わたしに関わって、いいことなんて何もないですから」

「そんなことないです。どういうことなんですか」

「すぐにわかりますよ、理由なんて」

どうせ、理由なんて自分が爪はじきにされているから、関わったあたしが迷惑を被ることになる、とかそんなものだろう。

「……」

でも、直接それを彼女の口から聞くことはまだ、できない。

この時点のあたしは、そのことを知るはずがないのだから。

「簡単なことです。すぐに、わかります」

「そんなっ……」

「お願いします。わたしに希望を持たせないでください」

「希望……？」

何の話だ。

希望とは何か。

「わたしは、大切な人を失いました」

そう語る彼女のワインレッドの瞳は、どこか遠くを見つめているように。
よう。

もはや届かない思いを、心の底へと必死に沈めているように見えた。

「え？」

「多分、その人は、わたしが関わりすぎようとしたから、いなくなっ
ってしまったんです」

小さく、淡々と、諦めの混じった声で紗希センパイは語る。

誰の話をしているのだろう。

彼女の前から姿を消した、大切な人。

「誰のことですか？」

紗希センパイに、大切とまで言わせる存在。

あたしは思わず、嫉妬で胸の中が支配されてゆくのを、感じてい

た。

「昔のことです。ちょっぴり、昔の話です」

「……」

でも、それを聞くことはまだできない。

男の子になったあたしは、まだ紗希センパイと出会ったばかり。

そんなすぐに、深い話を聞くことはできない。

じれったいけれども我慢しておかなければ、今後の交友関係すら潰しかねない。

やがて、紗希センパイは口元をゆるめて、安心したように笑う。

「じゃあ、それでお願ひします。汐里とは、仲良くしてあげてください」

「はい」

「でも、本当に朱音くんは、朱音ちゃんに似てます」

「え？」

「あ、えっと、朱音くんと入れ替わりに、転校してしまった女の子なんですけどね」

「ああ……」

紛らわしいなあ。

紗希センパイが語るのは、女の子のあたし。

彼女と今話しているあたしは、女の子のあたしではなく、別人だ。実際は別人じゃないのだけれど、それを知っているのは、両親とあたし、そしてしおりんだだけだ。

「本当に、どこに転校してしまったのでしょうか……」

「メルアドとか、携帯知らないんですか？」

まあ、答えはわかりきってるんだけど。

メルアドも携帯番号も、紗希センパイは教えてくれなかった。

「……わたしが馬鹿なばかりに、聞くことも、教えることも出来なかったんです」

小さな声で呟く紗希センパイ。

しかしあたしは、一つ大事なことを考え付いた。

「でも、紗希センパイは黒崎家の人間ですよ。そこを何とかして、教えてもらえないんですか？」

「もしも、紗希センパイがその辺りの情報を知ることが出来るのなら。」

「いずれ、あたしという存在の、ちぐはぐさに気が付いてしまうだろう。」

「転校先のはずの学校には、あたしは存在しておらず、同名の生徒が、あたしの転校と同時にこの学校に編入してきている。」

「そうなれば紗希センパイの不信は増大し、やがて信頼の崩壊につながる。」

「これから先の、紗希センパイを彼女にするための計画には、その辺りを詰めておく必要があった。」

「わたしは、学校運営には関わってないですよ。転校先を聞こうにも、汐里は教えてくれませんし」

「へえー初耳です」

「心の中でガッツポーズを作る。」

「残酷なようであったが、あたしにとっては幸運でもあった。」

「そうでしょう。出会ったばかりですからね」

「あ、は、そうですね！」

「それはそうと、朱音くんは、どうしてこの時期に転校を？」

「えーとですね……」

「さて。」

「バレないように、これからの生活、立ち回らなければ。」

「バレないように立ち回りながらも、しっかりと紗希センパイの好感度を上げる。」

「これは、かなり難易度の高いことだぞ。」

「でも、せっかく男の子になれたのだ。チャンスは生かさなければ。そんなことを考えながら、紗希センパイとやり取りを交わし、そ

して時間が経ってゆくのだった。

——翌日。お昼時。

あたしは、色々と面倒くさいことがあって、しおりんとの昼食に遅れた。

「ふう……よいしょ」

「お疲れですわね」

「ちょっと面倒くさいことがあってね」

「面倒くさいこと？」

きょとんと首を傾げるしおりん。そんな彼女を尻目に、あたしは彼女の隣にちょこんと座り、手に持っていた弁当箱を開く。

「ヤンキーに絡まれたんだ」

女の子であった時も絡まれた。この学校はなかなか治安が悪いというか、出る杭をとことん打とうとしてくる。

理事長の娘と共に行動する、茶髪であり、屈強な男。狙われないほうがいいのかもしれない。

「それは大変ですわ」

「簡単に返り討ちにできたけど。ワンパンチワンキック」

上級生で、それなりに強いはずだ。

強いはずだけれども、あたしは簡単に倒すことができた。

「それは大変なことですわね」

「やっぱり、力が強くなってるなあ」

「前よりも、ですの？」

「うん。ちょっと殴っただけで吹っ飛ばし」

あまりにもあっさりすぎた。

ちよっと、軽く小突いてやろうと思ったら、思いつきり吹っ飛ばすんだもの。

もしも本気で殴ったら、空を飛べるんじゃないだろうか。もちろん、相手がね。

「元々、暴力系でしたものね」

「おしとやかな女子でいたかったんだけどね」

「仕方ありませんわ。山岡くんと殴り合いをしているのですもの」

「だなあ」

「鬼女神の青木、中学のころから有名でしたもの」

「あのバカのせいでねえ」

事あるごとに、あたしたち二人にからかい、絡んでくるバカ、山岡。

あまりにも鬱陶しくて、顔面にパンチを叩き込んでやったのは、中学一年の授業開始、一週間のことだった。

「力が強いことはいいことですわ。まあ、周りには引かれますけれど」

「友達多かったよ？」

過去を振り返りながら、あたしの周りにいた人間を頭に思い浮かべる。

二ケタ、いや、三ケタはいただろうか。結構な数の友達が、全学校にいた。

「あれは友達じゃありません」

「はずなんだけどなー？」

「えー」

「舍弟ですわ」

「そうかなあ……」

そんなはずはないんだけどなあ。

「ナイフを持った屈強な男を、血まみれになりながら殴り倒した女。舎弟の数人や数十人でできるに決まっています」

「でも、毎朝パンくれたし、ジュースもくれたよ？」

「上納品じゃないですの」

「いじめられてたら、助けてあげたし」

「みかじめ料ですわね」

はあ、とため息をつきながらしおりんは語る。

あたし自身は要求したこともないし、自分自身がやりたいから、

助けたただけだ。

もっと言えば、評判を上げて、紗希センパイにいい顔をしただけだった。それなのに相手の子たちはあたしを、用心棒のような存在だと、認識していたのだろうか。

「えー。違うよー、友達だよー」

何だかショック。

「そういうことにおきましよう」

「しおりんは友達だよね？」

おずおずと尋ねると、

「さあ、どうでしょう」

彼女はくすりと笑い、自分の弁当箱の中から、可愛らしいたこさんウィンナーを箸でつまみあげ、口に中へと放り込んだ。

「そこは即答してほしかったなあ」

「悪友みたいなものですわね」

「そっかー」

何だか安心。

あたしって、単純だなあ。

「そういえば……、昨日は部活行きましたの？」

「うん。行ったよ。紗希センパイ可愛いよねえ」

単純だよな、あたし。

「のろけ話は結構です」

「のろけじゃないよっ！」

「はいはい」

さらりと流されてしまった。くそう。

「のろけたいんだけどなあ」

「紗希ねえは、攻略難易度が最高ですわよ」

「そうだよね……。応援してよ、しおりん」

「前にも言ったでしょう。わたくしたち姉妹は、基本的に相互不干渉。彼女がそう望むのですから、わたくしは妹として、関わるわけにはいかないですよ」

何だかよくわかんないけど、しおりんは自らをシスコンだと呼ぶ。シスコンだからこそ、姉の命令は絶対で、決して逆らわないのだという。本当に、紗希センパイはそれを望んでいるのだろうか。

「うーん……わかんないなあ……」

聞いたところで、きつと彼女は答えてくれない。

そんな状態を、何年も繰り返していたのだから。

「まあ、難しい姉妹なのですわ」

「難しすぎだよなあ」

「まあ……」

いつも通りのやり取り。

そんなものを交わしていると。

「オラア！ 青木！」

屋上の扉が勢いよく開け放たれ、包帯を巻いた金髪のヤンキーが、あたしを思いっきり睨み付けていた。その後ろからは、四人五人の同じような量産型ヤンキー。

「あー、さっきの先輩方」

「あー、じゃねえよ。よくもやってくれたな！」
めんどくさいなあ。

「朱音くん、これは……？」

「さっき倒したヤンキーさん。……後ろにいて、絶対に前に出ないで」

「は、はい……」

立ち上がるとうとするしおりんを制止しながら、あたしはゆっくりと弁当箱を、怯えている彼女に手渡し、すつくと立ち上がる。

「転校早々女連れなんて、良い身分じゃねえかよ」

「一人じゃ勝てないからって、群れを組んでボコりにきたんですか」
ヤンキーは、仲間を呼んだ！

「うるせえ、転校生の分際でおお！」

しかし、全員雑魚だった！

「早く来いよ、雑魚ども」

どうせ、そんなオチが見えてる。

あたしがイヤラシイ笑みを浮かべて挑発すると、ヤンキー先輩方は憤怒に満ちた表情を浮かべて、一斉に殴りかかってくる。

「っ……！」

「おらあっ！」

まず一人、動作が大振りだ。

するりと身体を避け、一発腹に重いものをぶち込む。

「当たってないですよ」

「かはっ……」

その場に崩れ落ちる、量産型ヤンキー先輩一号。

まず一人、ノックアウト。いとも簡単に潰れてくれた。

その様子を、最初に喧嘩を売ってきたヤンキー先輩が、包帯まみれの身体を震わせながら、睨み付けていた。

「青木っ……！」

「ほんと、群れても雑魚ですね」

何ということはない。

今のあたしは、この学校で最強と言っても過言ではない。

それは言い過ぎかもしれないけれど、この場では最強だった。

「あれ？ もう来ないんですか？」

いとも容易く一人目をのしてしまったことで、他のヤンキーたちは萎縮していた。

なあんだ、面白くもなんともない。挑発しても、乗ってこないのかなあ。

そう、たかをくくっている。

勇敢な包帯ヤンキー先輩が、猪のように猛進してくる。

「青木いっ！」

「そう来ない……なっ！」

単純だなあ。

簡単すぎるなあ。

大振りな動きをはっきりと見切って、あたしは軸足をしっかりと地面につけて、蹴りを先輩の脇腹に入れる。

「がっ……！」

瞬間。

崩れ落ちる身体。

骨のきしむような音。

自分でも、恐ろしくなった。

男の子になっただけで、ここまで威力が変わるとは。

気絶して、地面で伸びている包帯ヤンキー先輩を見つめながら、

あたしはそんなことを思った。

「まだやるんですか？」

しかし、感情を隠しながら、抑揚のない声で言葉を紡ぐ。

「お、覚えてろよっ！」

すると。

ヤンキー先輩方は、あたしに敗れた二人を回収し。

捨て台詞を吐き捨てつつ、そそくさと退場してゆく。

なんだ、他の人たちはびびってしまったのか。

面白くないなあ。

「大丈夫か、しおりん」

「え、ええ……」

「何かされたら、すぐに言ってくれよ。ぶっ殺しに行くからさ」

「わたくしを誰だと思ってるのです。生徒総会を実質的に取り仕切る、生徒副総長で、黒崎の娘ですわよ」

この学校において、生徒総会の権限が強い人には、理由がある。黒崎家の人間を、次の経営者として育成するために、副生徒総長として配置しているのだ。全ての議論は、副生徒総長の承認を経なければ、成立しない。

責任は全て副生徒総長のものとなり、損害が発生すれば、いくら

黒崎家の人間といえ、損害賠償を請求される。その中で順調に運営を行っているのが、このしおりんだ。

副生徒総長の資格には、黒崎家の人間であり、中高の生徒であることが求められる。紗希センパイにも資格があったらしいけれど、そこら辺の事情は話してくれない。

「はは。それもそうか」

いつかは話してくれるのだろうか。

でもやっぱり無理かなあ。

「でも、本当に男の子になってしまったのですわね……」

「ん？ そうだなあ」

他のことをぼうっと考えていると、しおりんもぼうっとした表情を浮かべていた。

「何だか、実感してしまいました」

「嫌なところで実感しちゃうんだ……。やっぱり嫌？」

「いいえ、そんなことはありませんわ」

「かっこいい？」

「そ、そんなことはありませんわね」

何だか、頬を微かに染めてぷい、と逸らすしおりん。

「ちえっ」

まったりとした時間が流れている。

歴史を流れる時のように、ゆっくりと、変わらない関係は少しずつ変わり始める。

あたしの行動、彼女の行動、誰かの行動が、ほんのちょっぴりすれ違い始めて、大きな転換の訪れを待ちわびていた。

――放課後。

しおりんはいつも通りに、副生徒総長の仕事に出ている。お疲れなことだ。

だから、今日もあたしは、紗希センパイと二人でゆっくりと話し

ている。

「朱音くん、喧嘩したんですか？」

「げっ、何で知ってるんですか」

思わず、げえっとか言ってしまった。

まさか、紗希センパイがもう知ってるなんて。

もしかして、案外広まっている話なのかも。いやだなあ。

「風の噂、です」

「ああ……えっと……まあ」

「喧嘩はよくないですよ」

「はあ。でも、売られた喧嘩だったんで」

いきなり、絡まれたのだ。絡まれたから、倒した。

あたしがやったのは、たったそれだけのことだ。

「停学、させられますよ？」

「大丈夫ですよ。副生徒総長が味方なんで」

「あの子は、優しく見えて厳しいですよ」

「そうですかねえ」

確かに、厳しいところもあるが。

基本的に甘々だ。口調と行動が一致していない。

厳しいことを言っておきながら、宿題を見せてくれるような子だ。

甘い。

「はい。ですから、もう喧嘩はやめてくださいね」

「ういーっす。紗希センパイが言うなら、もうやめます」

自分から絡みにいくことはないし。

今度絡まれたら、絶対言わないように口止めしておこう。

すると、自分の主張が受け入れられたことに満足したのか、紗希センパイは口元を微かに緩ませて、こちらに微笑みかけてくる。

「いいこ、です」

今の表情、やばかった。

天使のような顔。

いや、女神以上の顔だ。

首をわずかに傾げて、ふわりとした髪を揺らし、満足感を周囲に振りまいた紗希センパイの笑顔が、あたしの胸の内を可愛さの矢で射ぬく。

思わず、コクってしまいそうになる。

のを、必死に抑えて、言葉を紡ぐ。

「そ、そうだ、紗希センパイ」

「はい？」

「今日、ゲーセン寄ってきませんか？」

「一緒にいるのを見られるのは、ちょっと」

案の定渋った。

でも、あたしは強引に誘いを続ける。

「大丈夫ですって。現地集合って感じで」

「……それなら」

以前も、このやり方なら通用した。

北宮学院の生徒は、いわゆる不良層しかゲーセンに行かない。

真面目っ子の多い学校であり、ゲーセンの中に入ってしまったえば、

二人でいることを、噂のタネにしそうな一般生徒はいない。

不良層の生徒は、あたしを含めて、そんなくだらないことに興味なかった。

「決まりー。じゃあ、駅前のゲーセンで」

「はい。でも、あそこは怖いですよ？」

「大丈夫ですよ、ぶん殴ります」

「ぶん殴る……？」

「パンチングマシンをね、パンチングマシンを」

「なるほど……？　でも、あったっけ……」

「あたし、先に行って、お金集めてますね」

ゲーセンには、他校の不良や、調子に乗った一般人もいる。

殴られてカネを盗られそうになっている人間を助け、用心棒代として、僅かな資金をいただく。これがあたしのプレイスタイルだった。

「え？」

しかし、これは女の子の青木朱音がやっていたことで。

今のあたしは、遙か西の兵庫県から来たばかりの、異邦人だ。

「あ、い、いや、何でもないです」

「何か、悪いことをしようとしてませんか？」

目を細めて、疑いの視線をあたしに向ける紗希センパイ。

紗希センパイにも、危ないからやめろと言われていたことだが。

目の前で困っている人間がいるのに、無視するようなことはあたしにはできない。

お金だって、無理にもらったわけじゃないし、相手がくれる、というからもらったただけだ。悪いことは何にもしていない。

「やだなあ、そんなわけないですよ」

「……そうですか？」

「は、はい。じゃあ、先に行ってます」

とにかく、ここに留まりすぎるのはまずい。

何だか、色々とボロを出してしまいそうだし。

鞆を持ち、さっさと出立の準備を進める。

しかし。

「わかりました。すぐに行きます」

紗希センパイも、何か決意じみた表情を浮かべて立ち上がる。

え？ まさか？

「ゆっくりしててもいいですよ」

「いえ、放っておくと、とんでもないことになりそうなので。やっぱり一緒にいきます」

今まで、こんなことは一度もなかった。

「えー」

そうは言いながらも、あたしは嬉しかった。

この部室の外では、会話も交わさないし目を合わせることもない。それなのに今は一緒に、共に、歩んでいくことができる。

どういう心境の変化か、紗希センパイは彼女が守ってきた大原則

を、『とんでもないことになりそうだから』という理由で、破った。

「……えー？」

「な、なんでもないです！」

「よろしい」

「ちえー……」

まあいつか。

嬉しいし。

——そして、あたしと紗希センパイはゲーセンに到着した。外見からは退廃的な雰囲気は漂っておらず、中も普通のゲーセンと変わらない。

ただ違うのは、一定の時間になると、かつあげチンピラが出現するということだけだ。その時間が近づいている。

もしも、紗希センパイに手を出したらぶっ殺す。割と本気でやる。

「あ、紗希センパイ」

「はい？」

とりあえず、紗希センパイを楽しませてあげよう。

「UFOキャッチャーでもやりませんか？」

「やりましょう！」

「計画通り」

彼女は、UFOキャッチャーが得意で、ゲーセンで一番好きなゲームだと語っていた。

そうやって気配りして、ちよつとずつポイント上げていかなければね。

「はい？」

「何でもないです。やりましょう早くやりましょうさあやりましょう」

「どうしたんですか？」

「何でもないですよお」

まあ、そんな事実を今のあたしが知るわけではない。

転校していったはずの、青木朱音（女）だけが知ることなのだ。

「……何だか気になります、まあいいでしょう」

「はい。奢りますよ」

「いえ、悪いです」

「いいからいいから」

「あ……」

「頑張って、取ってください。えーっと、ほら、あの黄色いくまさんのぬいぐるみとかどうですか？」

「あれ、取ろうと思ってました。凄いですね、朱音くん」

「いやあそれほどでも」

趣味嗜好、どんなものが好きで、どんなものが苦手なのか。あたしには彼女の方向性が手に取るようにわかる。だから、どんなことを考えているのかも、ある程度のことならばわかる。だって、好きなんだから。

「じゃあ、頑張ります」

小さくガッツポーズを作り、にっこりとほほ笑む紗希センパイ。

ほわあっとする。ほわあっと。

「頑張ってください」

「はい！」

さて。

紗希センパイは目の色を変えて、全力で、真剣そのものの表情で、UFOキャッチャーに向かった。これからしばらくは、黄色いくまさんのぬいぐるみを獲得するために、全神経を集中させるだろう。

その間は、あたしにフリータイムが出来る。

こっそりと、ばれないようにそろりそろり、と足を動かし。

ゆっくりと、歩き始める。

しっかりと、紗希センパイの動向は監視している。

しているが、それよりもまず、面倒なチンピラの掃除が大切だ。

「さーてと……」

最近、あたしが掃除していたせいで、なかなか安全な場所になつていたし、もしかするともういなくなつてしまい、別の場所にターゲットを求めに行ったのかもしれない。

それなら、それでいい。見つけ次第、そこでも掃除するだけだ。

あたしの人気上がるなら、紗希センパイの耳に入るのなら、どんな危険だって冒す覚悟はあった。

「おotto」

いないかなあ、と辺りを見渡していると。

——いた。トイレの入り口の影、多くの場所からは死角になつているところに、金髪のいかにもなヤンキー二人組がおり、にやにやと気弱そうな男の子に話しかけている。

話しかけている、というよりも、脅しかけている。という表現のほうが正しいか。

さて。

とりあえず、振り向いて、紗希センパイがこちらを見ていないか確認。

大丈夫だ。熱心に、黄色いくまさんを取ろうとしている。周囲の様子なんて、知ったことかつて感じに。

これなら、すぐに終わらせればバレないだろう。

よし。

やるか。

そう決心し、あたしはゆっくりと彼らに近づいてゆく――。

――そして。

「ありがとうございます……ごさいます」

ぺこぺこと頭を下げる男の子。

そして、地面に転がるヤンキー二人。

しゃがみこみ、彼らのポケットから財布を抜き取り、中身を確認。わあ、結構入ってるなあ。

「いやいや、気にしないでいいから。で、いくら取られたんだ」
「一万……」

金持ちめ！

とりあえず、ヤンキー財布から一万円を取り出し、彼に渡す。その一割でもくれたらなあ。くれないかなあ。淡い期待を浮かべるけれども、まあ無理だろう。

「はい、危ないなあと思ったら逃げろよ」

「ありがとうございます！ えっと、お名前は？」

「青木朱音だよ。こっちには転校してきたばっかなんだけどな」

「朱音さま？」

「へ？」

さま？

どうしてさま呼ばわり？

「い、いえ、朱音さまという喧嘩の強い女性がいて……」

「あー、うん。知り合いでもないし、関係者でもない」

「そうですか……」

まさか、そこまで名前が知れ渡っていたとは。狙い通りといえば狙い通りなんだけど。

「違う違う」

「そうなんですか」

あ、やばい。

紗希センパイが、もうUFOキャッチャーを終えてこちらを見ている。胸元には黄色いくまさんのぬいぐるみ。そして瞳には、疑いの色を滲ませていた。

「ああ。これからは気を付けるんだぞー」

さっさと別れてしまわないと。

「はい！」

あーあ、収穫なし。

ヤンキー財布から抜き取ってもいいけど、それやってもなあ。ため息をつきながら、財布をまだ倒れているヤンキーの身体の上

に投げ出し、ちよっぴり残念な気分になりながら、紗希センパイの元へと歩いてゆくのだった。

歩いてゆくのだが。

明らかに、怒っている紗希センパイ。

怖い。真っ赤な瞳が、あたしを射抜いている。

あーあ、バレてる。絶対バレてる。やだなあ。

「朱音くん？」

「ハイ」

「何をしてたんですか？」

「ヒーローごっこです……」

「危ないでしょう」

透き通った水晶の音が、頭に浸透する。

「その通りです」

「……本当に、気を付けてください」

「ハイ」

でも、あたしは嬉しかった。

まだまだ見知らぬ関係だけど、紗希センパイがあたしを心配してくれた。

それって、結構な収穫だと思う。

「もしも、朱音くんが誰かにいじめられたら。心配してるんですよ」

「へ？」

あれ？

何だか、紗希センパイの瞳には涙が浮かんでいる。

どうして、あたしがいじめられるなんて、ファンタジックなことを言い出すのだろう。

「ああいう人を攻撃して、目をつけられたらどうするんですか。転校とか、しないといけなくなるんですよ」

「大丈夫ですってば。俺、やり返せますし」

「そうは言いますけど……」

何だか、まだまだ言いたそうだ。

しかし、今はそんな話がしたいわけじゃない。

さっと話題を切り替え、さっと紗希センパイの手を取り、

「ほら、紗希センパイ。次のゲームやりましょうよ。そんな面白い話は、やめておきましょう」

さっさと歩きだす。

せっかくの機会なんだから、遊ばないとね！

お金はないけど、ちよつとくらいはあるし！　なんとかなるさ！

――時間が経ち、夕陽はもう水平線の向こうに消え、外はもう薄暗くなっている。

「そろそろ帰りましょうか、紗希センパイ」

このまま紗希センパイを一人で帰すわけにもいかないし、彼女を家に送ってあげなければ。そう思うのだけれど、紗希センパイは自分の家の場所を、あたしに教えてくれるだろうか。

「はい。帰りましょう」

「送っていきますよ」

「あ……えっと……」

まあ、予想通り。

彼女はばつが悪そうに、辺りをきょろきょろと見渡している。

「どうしたんですか？」

「送ってもらうのは悪いので……」

他人に干渉したがらない。させたがらない。

そんな紗希センパイだから、きつとそう言うと思っていた。

「気にしないでください。危ないでしょう、もう夜も遅いし」

「えっと」

「嫌ならいいんですけどね、嫌なら、悪いですし」

しかし、頑固ではあるが、突破口はある。

申し訳ないという気持ちもあるが、彼女の罪悪感を利用するのだ。

「そんなことはないです。お気持ちはありがたいのですけれど……」

「じゃあ行きましょう」

「強引ですね、朱音くん」

「よく言われます」

予想通り。

こうすれば、紗希センパイの心にゆっくりと近づいてゆける。

そして、あたし達二人は、ゆっくりと帰路につく。紗希センパイ、黒崎家の家は街の外れにある大豪邸だ。数回かお邪魔したことはあるが、とても窮屈で、とても重苦しい雰囲気漂っていた。

歩いていると、紗希センパイがあたしの横顔を見つめながら、語りかけてきた。

「ほんとに、そっくりです」

「その……転校していったって人に、ですか？」

「はい。よく喧嘩してて、それこそ、不良さんたちと戦ってました」

「はは……」

自分のことだもんなあ。

何だかむずむずするなあ。

「でも、格好良かったですよ。髪も染めていて、周りの人たちには不良女だとか、言われてましたけど、わたしは好きでした」

「へえー」

不良女！

あたし自身は、おしとやかなレディーのつもりだったのに！

ありえませんか、としおりんが突っ込む声がどこかで聞こえた気がする。気がするけれど、あくまで気のせいだ。

てか、染めてないよ！ 地毛だよ紗希センパイ！

「そういえば、朱音くんは、汐里の彼氏さんなんですか？」

「ぶっ！」

「あ、凶星でしたか」

「違います違います。えっと、友達です。友達。親友」

「朱音くんは、どちらの出身でしたか」

「えーっと、生まれはこっちなんですけど、育ちは兵庫です」

「それは遠いところから」

「ええ……まあ」

何だか、バレてるような気がする。

いや、バレてたら怒ってるか。バレてないよなあ。

「どうして、汐里と仲良く？」

「う、うーん……チャットです、チャット」

「なるほど。チャットなんですか。イマドキですね」

「はい、そうですそうです」

「なら、知ってるかもしれませんね」

夜の闇の中、紗希センパイはゆっくりと口を開く。一体、何を語るつもりなのだろう。

「何がです？」

「汐里、副生徒総長なんですよ」

「ああ、はい。聞きました」

とっくの昔に知っている情報だった。

「副生徒総長って、選挙で選ばれないって知ってましたか」

こちらにも、昔から知っている。

でも『黒崎の人間が、副生徒総長となる』以外は、一般生徒が理由を知ることはない。聞こうと思ったこともなかったし。

「それも……聞きました。でも、理由がよくわからなくて」

「黒崎の人間が、本家筋分家筋関係なく、副生徒総長に就任するんです。それで、将来の経営の勉強をさせるんですよ。生徒総会の権力が強い理由は、そこなんです」

「ああ……なるほど」

そんなカラクリだったのか。

うちの学校は、本当に生徒総会の力が強い。その理由は、経営勉強のためか。

黒崎家は分家が日本中にあって数が多いらしいし、次から次へと子供が生まれるから、副生徒総長の欠員が出ることもないんだろう。

「久しぶりの本家筋の副生徒総長、それが汐里です」

「大変ですよねえ」

分家に負けられない、それが本家としての意地だろう。しおりんのことだし。

「ええ。プレッシャーでしょうね。もしも、上手に運営できなければ、黒崎の当主に選ばれませんから」

でも、だ。

本家筋の人間は、しおりん以外にもいる。

「でも、それなら紗希センパイにも資格があつたんじゃない？」

そう、紗希センパイも本家の人間であり、しかも長女だ。

資格ならば、紗希センパイのほうにあるのではないか。

しかし。

「わたしは、お爺様達……偉い人たちに、『白子は不要だ』と言われてましたので」

全てを諦めきった笑みを浮かべ、紗希センパイは語った。

白子、アルビノというだけで、存在が否定される。

「そんな……」

あんまりだ。

そんなの、どうかしてる。

「わたしは、あの子に迷惑をかけたくない。ただ、学校の運営だけに全力を使わせてあげたい。ただ、それが出来れば満足なんですよ」

「そんなのってあんまりじゃないですか。紗希センパイが悪いとか、そもそも、外見がどうかなんて、運営するのに何の関係もないじゃないですか」

思わず熱っぽく演説をふるうも。

「でも、それがルールですから」

たった一言で、切り捨てられてしまった。

「……あんまりですよ」

この問題が、姉妹の仲をややこしいものとしている。

その事実を、知ることができた。

あたしは、この思わぬ収穫に、何だか得体のしれない期待感と。

「優しいんですね、朱音くんは。すみません、何だか面白い話

をしてしまいました。さあ、帰りましょう」
どうしようもない、絶望の壁のようなものを感じるのだった。

第三話 『もしかして、一緒だったの?』

リビングで、ゆったりと朝の時間を過ごす。

一日元気に頑張るためには、朝はしっかりとしておかねえとね。

「そういえば、母さん」

「どうしたの?」

テーブルで、あたしは母さんと一緒に食事をする。パジャマはもう男物だし、化粧もやめた。髪の毛はぱつと整えるだけで、朝の余裕がかなり生まれた。楽だなあ。

そんなことを思いながら、母さんに話しかける。

「その、性転換? の申請って終わったの?」

「終わったわよ」

「じゃあ、あたしってもう男の子?」

「そうなるわね」

「そうなんだー……」

何だか、改まって考えてみると凄い話だなあ。

「まあ、頑張りなさい」

「あっさり言うなあ。あれ、父さんは?」

「有給使ったから、溜まった仕事を片付けるってもう出ていったわ」

「そうなんだ」

父さんはそれなりに忙しい会社員だ。

「そういえば、母さん」

「ん?」

父さんの名前が出たので、ちょっと聞いてみよう。

今まで、勇気がなくて聞けなかったことだ。この機会だから、聞いてみよう。

「父さんとは、その、どうして付き合ったの?」

「どうしてそんなことを聞くの?」

どうして聞いてしまったのか。

その意図は自分でもわからなかった。

「いや、その……えっと……」

でも、気になってしまったのだ。

「女の子が好きだったのに、どうして男と付き合ったのか、って？」

「……うん」

母さんも、あたしと同じで女の子が好きだった、らしい。

だから、カミングアウトする勇氣も出たし、だから母さんは、あたしが紗希センパイとくつつけるように、応援もしてくれていた。

でも、どうしてだろうか。父さんと付き合い、そしてあたしが生まれた。

何だか、矛盾なようなものを覚える。父さんが中性的な顔つきだから、妥協して結婚したとか、そういうものなんだろうか。

「気になる？」

「気になる」

「教えてあげない」

「えー！」

ペろ、と舌を出して悪戯っぽく笑う母さんに、思わず拍子抜けしてしまった。

「いつか、教えてあげるわ」

「むう……」

ほんのちよっぴりの勇氣を出して損した。勇氣損。

テンション降下気味のあたしに、母さんは微笑みかけ。

「でもね、朱音。一つだけ覚えておきなさい」

ゆっくりと、口を開いた。

「人を好きになることに、権利なんて必要ないの。好きになる権利がないとか、好きになっちゃだめだとか、そんなことは考えちゃだめだからね」

「……どういうこと？」

母さんの言葉は、深く、意味が大きそうなもので。

自分に言い聞かせるような、そんな自戒の念を込めたような言葉だった。

「思いは伝えるもの。心の中で押し殺すものじゃないわ」

「母さんも、伝えたの？」

「ええ。伝えたわ」

伝えた。

「そしたら、どうなったの？」

「さあ、どうなったんでしょね」

でも、結果は目に見えている。

断られてしまったのだろう。想い人である少女に告白し、断られた。

「……」

それを深く掘り下げる勇氣は、あたしにはなかった。

それを望んでもいないだろう。

「後悔はしてないわ。信じてたから」

どこか、吹っ切れたような笑みを浮かべながら、母さんは語る。

やりきった人間の顔。想いを伝えきった人間の顔。

失敗したのに、朗らかな笑みを浮かべ、過去に思いを馳せている。

「そう、なんだ」

「ほら、早く食べちゃいなさい。早く洗い物したいのよ」

「……うん」

あたしも、伝えておくべきだったなあ。

あれだけ差が縮まっていたのだから、女の子であるときに、紗希センパイに告白しておくべきだったなあ。

これから取り返していかない。あたしにはまだまだチャンスがある。

がんばろう。

そして、あたしは迎えに来たしおりんと二人で、歩いて学校へと向かう。彼女は普段車で通学していない。出来る限り、他の生徒と

同じ環境で育てろというのが、黒崎家の方針らしい。

「あー、女の子になりたい」

思わず、あたしは隣のしおりんに愚痴をこぼす。

「はいはい」

「だってさあ、しおりん。聞いてよ」

「女言葉」

即座に、しおりんから修正が入る。

「聞いてくれよ」

「はい」

「紗希センパイと、あと少しで付き合えてたかもしれないんだし」

「隣の芝は青いですわね」

「うっ……そうだけど」

厳しい指摘だなあ。

もうちょつと、オブラートに包んでくれてもよかったのに。

「そんなことを考えている間に、まず環境に慣れてくださいませ」

「慣れないんだよなあ」

女の子社会でいるときとは、また違った環境がある。男の子社会は、女の子社会よりも単純で、頭を楽にさせてられるけど、まだまだわからないことも多いし。

「とは言いながらも、クラスの中心になったじゃないですか」

「まあ、そうだけど。山岡いるし」

あのバカ、山岡。

結局、あいつはあたしがしたじこ転校前と、何一つ変わらない状態に戻った。つまりは悪友ポジションだ。

「その適応力が、朱音くんの強みですわ。これから、紗希ねえとも仲良くなっていきますわよ。昨日、ゲーセンに行ったのでしょう？」

「うん。行ったけどね」

「わたくしが、副生徒総長の仕事をこなしている間に」

「ご、ごめん」

痛いところを突かれてしまった。その通りだもんなあ。

「お気になさらず。そういうこともありますわ」

「あはは……」

「紗希ねえは、笑っていましたか」

あたしの顔を覗き込み、しおりんは尋ねる。

「うーん、まだ固いなあ」

「そうですの」

「そりゃ、そんな簡単に心を開いてなんて、くれないって」

むしろ、簡単に心を開かれたら。

あたしの、女の子としての数年は何だったんだ、という話になるし。

「まだ一週間経っていませんわ」

「だよなあ」

「これから、ゆっくりと前に進めばよいのです」

「そうだなあ。でも思うんだけどさ、しおりん」

「はい？」

「また、近づきすぎたら女の子に戻るんじゃないかって。そうなら、今まで積み重ねてきたものは全部なくなるだろ？」

そういう不安が心の中にある。

あたしは、ある日突然男の子になった。

ということは、逆が起こったって、何の不思議もないのだから。

「どうして、そう思うのです？」

「何だか、そんな気がするんだよな。不安になるんだ」

「よくわからない仮説ですが。仮に、紗希ねえに近づきすぎたら、女の子に戻ってしまうとしましょう」

「うん」

「それでも、あなたが男の子であったときに積み重ねたものは、あなたの中に残ります。女の子に戻ったときには、昔に積み上げてきたものが、あなたの中で輝きますよ」

きらりと輝く笑みを浮かべたしおりんの顔は、苦しむ者を諭す神の光のごとく、燦然とあたしを照らしていた。のだが。

「うー？」

難しい。

何となく、意味はわかるのだけれど。

ああ、しおりん、ため息をつかないで。悲しいから。

「はあ。どっちにしろ、いい経験だったじゃないか。ということですわ」

「そうなのかなあ」

「戻ったら戻ったときに、考えればよいのですわ。今は、目先のことだけを考えて、集中して生きてゆけばよいのです」

そして、しおりんは笑った。

そうだなあ。その通りだ。今のあたしは、今だけを考えて生きればよい。

「そうだね、わかった」

「わかればよろしい」

前を向いて進む。

それだけでいい。

と、そんなことを考えていると。

「う……ん？」

通学路の先、大きなビルのふもと。小さくしか見えないのだけれども。

数人の男子に、一人の女子が囲まれ、路地に入っていこうとしていた。

「どうしましたの？」

あたしは目がいい。視力検査は万年最高の結果に終わる。

最近は男の子とも連れ合って悪いことをする子も多いし、平和そうであれば、干渉するつもりはなかった。そんなの、知ったこっちゃない。勝手にやればいい。

「……！」

でも。

目をこらして、その姿を見つけた瞬間。

あたしの足は、まるで爆発するかのように加速を始めようとしていた。

「あっ、朱音くん！」

「しおりん、離して」

制服の襟を、しおりんはぎゅっと掴む。

どうして止めるのか。どうして行かせてくれないのか。

しおりんの力は弱いながらも、強い意志で握られていた。

絶対に行かせない。絶対に干渉させない。そんな思いが伝わってきた。

「だめです、手を出しちゃ」

「理由は、後で聞くから」

でも、そんなことは知るか。

あたしは、あたしのやりたいようにやる。

しおりんにだって、干渉させはしない。絶対に。

「あっ……」

だから、彼女の制止を軽く振り切り。

そして、駆け出してゆく。

紗希センパイの元へと。

——人もおらず、薄暗い路地。

必死に走り、追い付いた先には、あからさまなチンピラたちと、薄暗い中でも、微かな光を受けて透き通る、可憐な少女の後ろ姿。

『外で会っても、出来る限り話しかけるな』。

そんなルールが、あたしと紗希センパイの間にはあった。

でも、このときだけは別だ。誰が何と言おうと、救い続けてきた。「……っ！」

このクソ野郎ども、紗希センパイを連れて何をするつもりだ。

あたしの頭は、血が沸騰して崩壊してしまいそうなほど、怒りに燃えていた。

「おい」

だから、あたしは彼らに怒りを投げつける。

すると、不機嫌そうに眼を細めて、彼らはこちらに振り返る。紗希センパイも同じで、諦めきった瞳を潤ませて、それでも、どうして、と疑問の色を漂わせていた。

「その人連れて、何をしようってんだよ」

「あ？ 関係ねえだろ、てめえには」

図太い声で、チンピラの一人が語る。

ああ、見覚えがある。以前も、ボコボコにしてやった奴だ。

あたしが転校していったからって、自由にのびのびと暴力活動に勤しんでるのか。

「早く答えろよ。俺は、そんなに気が長くねえんだよ」

「知らねえよ。俺らは、頼まれてやってるだけだ」

「誰にだよ」

誰だ。

こいつらを操り、紗希センパイを虐げようとするのは誰だ。

「んなもん、関係ねえだろ」

「後で、ゆっくり聞いてやるよ」

北学の人間か。

それはわからない。

でも、わかったら、ぶっ殺してやる。

それくらい、あたしの頭の中は煮えたぐり、溢れ続ける怒りは、全く留まる事を知らなかった。

「へっ、聞けるもんならな」

「……紗希センパイ、こっちに」

とりあえず、早く紗希センパイを回収しないと。

敵側にいられちゃ、こっちの攻撃も自由にできない。

「朱音くん……どうして……」

「何だよ、この白いやつ友達か何かだよ」

白いやつ。

くそ、何かすげえムカついた。

好きな人のことをバカにされるのって、やっぱり本当に腹が立つ。

「名乗る価値もねえよ。……センパイ、早く」

「……」

「おい、こいつ北学に転校してきたっていう……」

「あ？」

「ヤベエ奴らしいぞ。すげえヤベエって話を聞いた」

そんな噂が流れてるのかあ。

と思いきや。

「関係ないだろ。女みてーな顔してるじゃねえか」

「だな。まあ、一本くらい折ってやりゃ、自分の立場わかんたら」

「そうだな」

まあ、弱く見られているのならいい。

その分だけ、相手を圧倒しやすくなる。

それくらいに考えていて、全くデメリットに思わなかったのだけ
れども。

「……前、女の子に負けてたじゃないですか」

紗希センパイが、何を思ったのか。

小声で、チンピラたちに対して本当に弱い抵抗を試みていた。

「てめえっ！」

「……事実です」

どうして、そんなことを今言うのか。

どうして、紗希センパイは今、チンピラに狙われるようなことを
言うのか。

「お前、黙ってりゃ調子乗りやがって」

案の定、チンピラの一人は怒り。

腕を振り上げ。

攻撃を、紗希センパイへ降ろそうとしていた。

「紗希センパイ、何でそんな余計なことを……！」
大変だ。

彼女の身体にキズをつけるなんて、そんなこと誰であっても許さ

れない。

とりあえず、ミッシェンスタートだ。紗希センパイを守りながら、チンピラ全員をぶつ殺す。簡単なことだ。紗希センパイが、余計なことさえしなければ。

「仕方ねえっ……！」

そして、あたしは走り出す。

そして、敵を殲滅しようとする。

紗希センパイの、赤い瞳に怯えの色が滲む。

ああ、暴力的なところなんて、出来れば見せたくないのだけれども。

そんなことは、今は関係ない。そんなこと、気にしていられない。ただ、目の前の敵を倒し、情報を聞きだし、少しでも紗希センパイを取り巻く状況を改善させられたら。

頭に浮かんでいたのは、単純な思考だけだった――。

――ミッシェン、コンプリート。

あたしの足元には、チンピラたちの肢体。もとい、死体。半死体。いとも容易く、彼らを制圧することができた。

多分、山岡よりも弱かったんじゃないだろうか。余裕すぎたし。

「おい」

しゃがみこんで、地面に転がるチンピラの一人の顎を持ち上げ、尋ねる。

多分、こいつが一番強かったし、ボス格だ。完全に気絶はせずに、意識はあるし。ぼんやりとしてるけど。

「誰に、何をやれって言われた」

「……北学の、女子だよ」

「何をやれって言われたのか、早く言えよ」

「ホテルに連れ込んで、やって写真撮って送れって言われたんだよ」
理解できない。

意味がわからない。

ただのいじめにしては、あまりにも過酷じゃないか。

「……」

「えげつねえわ、マジ女ってこえーよな」

「お前ら、前からやってたのか」

「ちげえよ。今回だけだ」

今回だけ。

本当かどうかはわからないが、目が真実味を帯びている。信じてやろう。

さて、本題だ。

「その女子つっーのは、誰なんだよ」

「高二の連中だよ」

「だから、誰なんだよ」

「さあ？ オレはボス猿に頼まれたただけだ。まあ、女子全員じゃねえの。そいつ、嫌われてるみたいだしな」

紗希センパイが嫌われている。

そんなことは、知っていた事実だ。

でも、嫌われてるからといって、何をしてもいいわけじゃない。

人の大切な身体をもてあそぶような、そんな悪質で陰湿なイタズラを許していいわけじゃない。

「……朱音くん、もういいですから」

でも、紗希センパイは制止する。

どうしてなんだ。

「よくねえっすよ！」

「もういいって、言ってるのです。わたしが言ってるのですから、もういいでしょう」

「……紗希センパイ」、

「行きましょう。先に行ってますね」

でも、何も言えない。

ゆっくりと、背中を向けて歩き始める彼女を見つめ。

「……っ！」

あたしは、追いかけることができなかった。
どうしてだろうか。足が動かなかったのだ。

「おい」

「あ？」

「お前、名前は何て言うんだよ」

むくりと身体を起こしたチンピラが、あたしを見つめながら尋ねる。

「青木朱音だ」

「……青木？」

「転校したやつとは、関係ない」

どうせ、そっちと一緒にいるのだろう。

まあ、実際はあたしなのだけれども。あたしなのだけれど、今のあたしはあたしじゃない。ややこしいな。

「ああ、そうか。おい、青木」

「何だ」

「オレたちはお前に負けた。オレはもう、そのセンパイさんには手を出さねえ」

「当然だろ」

「もしも、また手を出したら。」

次は、半殺しじゃすまない。ぶっ殺す。

「だから、オレたちのボスになってくれよ。お前、強いし」

「はあ？」

何を言うのだろうかと思っていたが、バカバカしい話だ。

オレたちのボス？ それって、チンピラのボスになれてことだよね。

「もしも、センパイさんがいじめられてるのを見たり、聞いたりしたら、オレたちが助ける。その代わり、お前もオレたちを助けてくれ」

「お前たちに、何のメリットがあるんだよ」
「メリットがわからない。」

実質的には、紗希センパイの用心棒じゃないか。

「強いやつと、一緒にいたいだけだ。あとは、他のチンピラと戦う時に、助けてくれればそれだけでいい」

「……」

「お前は、北学の中でセンパイさんを助けりゃいいだろ。オレたちは、北学の外でセンパイさんを助けてやるよ。オレたちの仲間は何百人といる。悪い話じゃないだろ」

何百人？

何百人もいるチンピラの、ボスになれって？

ちよいとそれは、リスクが大きすぎるんじゃないか。躊躇するなあ。

「それは……」

「青木、もう一つ、教えてやる」

戸惑っていると、

「センパイさんは、北学女子のいいオモチャだ。このままだと、何されるかわかったもんじゃねえぞ。今回のが成功したら、それ脅しのタネにして、もっとやらせるつもりだったらしいからな」

チンピラが、再び言葉を紡ぎ始める。

「……どういうことだよ」

「あいつら遊ぶのに飽きたから、やらせようとしてんだよ。オッサン相手にな、金取って」

「んなもん、絶対に許さねえぞ」

どうかしてる。頭がおかしい。

どこからどうすれば、そんな発想が出てくるのか。恐ろしすぎる。「オレらだって、ドン引きだよ。さすがにねえだろ。それにな、青木」

「何だよ」

「あの女子連中、相当に頭おかしいわ。オレらが言うのもなんだけどな。容赦しねえよ、特にセンパイさん相手には、相当にひでこつとをやってる」

「そんなこと、一度も」

一度も、紗希センパイの口から語られたことはない。

いじめ現場を、救済したことは何度もある。それでも、いじめの内容を知ることにはなかった。一度も、何をされて、何があったのかを知ることにはなかった。

「そりゃそうだろう。後輩に迷惑かけたくねえんだろうな」

「……紗希センパイ」

「青木。男と男の約束だ。絶対に破りはしねえ。どうだ」

「わかった。これから、よろしく頼むよ」

そこまで言われたら、あたしも信じざるをえない。

男と男の間の約束は、鉄のように固いと聞いている。

握り拳を、がちつと合わせ。

そうすることで、契約が成立した。

「任せろよ。もう、指一本触れさせやしねえ。メルアド交換しようぜ」

「ああ」

「そうだ、もう一ついいことを教えてやるよ、青木」

「んあ？」

「センパイさんはまだ、誰ともやってねーし、やらされてねーよ。

安心しろ。まあ、自分から男作ってやってるなら、まあ別だけどな」

何を言われるのか。

ぼうつとしていたが、一気に頭がしゃきつとした。

そして同時に、何だか安心してしまふ自分がそこにいて、何だか恥ずかしい気分になってしまった。まさか下ネタを、こんな所で使ってくるとは。

でも、有用な情報……なのかな？ わかんないけど。

「ば、知るかよ、んなこと！」

「好きなんだろう、お前。すぐにでもわかる。任せろよ、守ってやるから」

「くそが……」

「ハハッ！」

男の笑いが、路地裏を支配した。これで、紗希センパイの外の安全は確保されたも同然だろう。これで、北学の人間は、いじめの手先としてこいつらを使えなくなったのだし。

じゃあ、後は。

あたしが、北学の中で彼女を守るだけだ。

その様子を、しおりんは黙って遠くから見つめていた。

何かを言いたそうにしているが、何も言うことはなく。

あたしは、紗希センパイがどこかへと去ったのち、しおりんと二人で学校に向かい、無言の時間を過ごして、無言の昼食を終えた。

時間はいつもより遅く流れながら、過ぎていった。

――そして、放課後。

夕陽が差し込む英語研究会の部室で、あたしは紗希センパイと二人。

何も話すことなく、何もすることなく、ただただじいっと、テール越しに向かい合っていた。

何を話していいのかわからない。

何をすればいいのかわからない。

ただ、意思だけは伝えておこうと思った。

「紗希センパイ」

「はい」

「俺、紗希センパイを守ります」

だから、意思表示をする。

「朱音くん」

のだが。

「……はい」

「本当に、ありがとう」

「じゃあ……」

「でも、結構です」

弱々しい笑みを浮かべた紗希センパイは、あたしの申し出をきっぱりと拒絶した。

「朱音くん。見られてしまったから、お話、しておこうと思います」
「……」

今から話されることは、きっとあたしがもう知っていることだ。もう数年前から知っていて、何とかしようと動き続けたことに関係することだ。

「皆さんは、わたしが嫌いみたいです。ですから、この学校じゃわたしは限りなく浮いた存在なんです」

「そんなこと……」

至高の容姿を持ち、決して抵抗しない弱さを持つ紗希センパイ。いじめのターゲットとしては、最適だ。

何をされても誰にも言わない。誰にも助けを求めず、ただじいとなぜ続ける。

そんな彼女は、不満のはけ口になっていた。

「いいんですよ、朱音くん。本当のことを、助けてくれたあなたには知って欲しいんです」

「……」

でも、このままでいいのか。

よくないだろう。

「わたしは昔、わたしを助けてくれた人が、追い込まれていくのを見ました」

「え？」

紗希センパイに、手を差し伸べた人が、あたし以外にもいた。

誰なんだろう。孤立していた彼女を救ったのは、あたしだと自認していたのに。

「その人は、わたしのせいで、ここにはいられなくなってしまいました」

「いつ、いられなくなっただんですか」

「昔の話ですよ。ちよっぴり、昔の話です。……最後には、怒った

のでしょうか。何も言わずに、目の前から去って行きました」

薄情な人間だなあ。

去って行く前には、何があっても別れは告げるべきだ。

そうしなかったから、紗希センパイはこんなに傷ついてるのに。

「事情があつたんだと思います。俺にはわかりませんが」

まあ、助けていたのなら一応擁護してやるが。

「それでも、それなら一言くらいは残してくれるでしょう。よっばど、ショックだったんだと思います」

悲しい色を帯びた瞳に、僅かな水分を満たして、紗希センパイは語る。

ああ、よっばどショックだったんだろうなあ、紗希センパイ。

「わかってくれましたか。わたしはもう、あんな辛い思いはしたくないんです」

「でも、辛い思いをしてるのは、紗希センパイじゃないですか」

「自分のことなら、耐えられます。大切な人が辛い思いをするのは、耐えられないんです。それに、朱音くんは汐里の彼氏さんでしょう？」

突然の言葉に、思わず吹き出してしまった。

あたしがしおりんの彼氏？ そんなこと。

「ち、違いますって！ 友達です、ともだち！」

「ふふ。隠さなくてもいいんですよ。汐里から、最近よく話を聞くようになりました」

「違いますってば！」

だめだ。これは紗希センパイの論点すり替えテクニクだ。

まさか、出会ったばかりのあたしに使うとは思わなかったが。

都合が悪くなると、黒崎姉妹はこうやってあたしを動揺させて、話題をすり替える。

「……じゃあ、紗希センパイにも好きな人っているんですか」

じゃあ、こっちもすり替えてやる。

どうせ、元の話題には戻れないのだ。

それなら、聞きたいことを聞いてやる。

いじめから助けるのに、紗希センパイの許可なんて不要だし。勝手に助ければいいし。

「はい、いました」

はぐらかされるかなあ、と思ったら。

「えっ、誰ですか」

まさかの返答に、あたしは思わず身を乗り出して尋ねる。

紗希センパイの好きな人。誰なんだろう。というか誰だ。探し出してやる。

「ひみつ、です」

「もしかして、俺ですか？」

どきどきする胸の鼓動を無視しながら、あたしは尋ねてみるも。

「後輩としては、好きですよ」

「ですよー……」

あまりにも早い、瞬間の即答。

「? どうして、そんなに落ち込むのですか？」

「いえいえ、何でもないです」

まあ、出会ったばかりだし。

好きになってくれるとは思ってなかったけど、やっぱりなんだかショック。

「そういえば、何となくなんですけれど」

「はい」

「汐里も、朱音くんも。何か、わたしに隠していませんか？」

「え？」

鋭い、紗希センパイの指摘。

隠し事ならある。

あたしは、女の子の青木朱音だ。

言うことで、精神的なショックを与えるかもしれなくて言えず、ここまで来ているが。

「付き合ってるのかなあ、とぴんときたのはそこなんです」

「どういうことですか？」

「何だか、秘密を共有する二人、ろまんちっくじゃないですか？」
その通りだ。

二人だけの秘密。あたしとしおりんはそれを共有している。

正確には、父さんと母さんも知っているけれど、その他の人は何も知らない。あたしたちだけの秘密だ。ロマンチックかどうかは別として。

「えーあーえー……」

「どうです？ なかなか、カンが鋭いって言われるんですよ」

「確かに、凄く鋭いです」

「でしょう」

自信満々の、紗希センパイの笑み。

太陽のように明るく、柔らかく、温かった。

あたしはこの笑みに惹かれたのだ。連日のケンカ、戦いの中で荒んでいた心を癒してくれた、この笑みに。

「でも、ハズレですよ。あたしとしおりんは、付き合ってます」
カンは鋭いが。

さすがに、あたしが元女の子という発想は、浮かばなかったよう
だ。

「なんだ。そうなんですか」

「はい。残念でしたね」

話すことで、嫌われてしまうかもしれない。

話すことで、騙っていたのかと怒られるかもしれない。

そんな恐怖が、あたしの頭の中を支配していた。ややこしい
思いだ。本当に。

——そして、紗希センパイといつも通りに部室で別れ、帰宅後。

「ただいまー。あれ？」

ドアノブを回して、リビングに至るドアを開いた瞬間。
見慣れない人間が、テーブルに座っているのが見えた。

しおりんだ。

「どうしたんだよ、しおりん」

「少し、お話があります」

「あれ、母さんは？」

辺りを見渡すが、いるはずの母さんがいない。

不用心だなあ。

「少し、席を外してもらっています」

「ああ、そうなんだ」

「朱音くん。今日のことは、少し問題ですわ」

「何が？」

何が、と言うものの心当たりはあった。

どうせ、紗希センパイとか、そこらへんの話だ。

「あのチンピラ、ここらを仕切ってるヤンキーのボスです」

心配そうに、あたしを見つけるしおりん。

そこまで心配することはない。何ということはないし。

くすりと笑って、あたしはしおりんの向かい側に座る。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、俺が今度からボスだな」

「そんな気楽な話じゃありませんわ。朱音くん、悪い事は言いません。もう、あの連中に関わるのは、どうかやめてください」

あたしは軽い気持ちだったのだけれど。

しおりんの顔は、笑っていない。本気で言っている目だ。

「危ないから、とか言うんだろ」

「そうです。危ないです」

「大丈夫だって。何とかなるから」

今まで、危ない橋なんていくらでも渡った。

今更、チンピラのボスになるくらい、何てことはない。

それに、ボスになれば、学外での紗希センパイの安全が確保できるし。

「ならなかったときは、どうするんですの」

「その時はその時だろ」

「そんな話じゃありません」

「どうして、しおりんがそんなに心配するんだよ」

「そ、それは……」

明らかに狼狽するしおりん。

どうしてそこまで狼狽えるのか、わからなかったけれども、きっとあたしに反論されてしまつて、必死に言い返す理由でも考えているんだろう。

「俺は男の子になつたんだから。そんなに心配してもらわなくてもいいつて」

さすがに過保護だ。

「でも……」

「心配してくれるのはありがたいけど、俺は大丈夫だから」

「でも、もしも、危ないことに巻き込まれたら……」

「その時は、しおりんが助けてくれるんだろ」
すると。

「え？」

しおりんは、目を丸くして、こちらを見つめる。

「言つてただろ、男の子になつた日に。面倒なことは処理してやるつて」

「……そう、でしたわね。それでも、助けるとは言つてませんわ」

「しおりんなら助けてくれるつて、信じてる」

助けるとは、確かに一言も言っていない。

でも、しおりんなら、そうしてくれると思った。

根拠は全くないけれど、助けてくれると思った。だから、男の子になつたあのとき、電話したんだし。

「どうして、そう言い切れるんですの？」

「しおりんは、ずっと助けてきてくれたし」

「たった、それだけですの？」

「それだけで、十分だろ」

「……本当に、あなたって残酷です」

「へ？」

「残酷な人ですわ、あなたは」

「どういう意味？」

わけがわからない。

あたしのどこが残酷なのだろう。

助けを求めすぎるから、残酷なんだろうか？

わからないなあ。

「それがわからないから、残酷なんですよ。……そうですわね、面倒なことは処理してや

るって、言ってしまったのですわね」

「うん。優しいもん、しおりん」

厳しいところもあるけれど、本当は優しい女の子。

それが、しおりんだ。それがしおりんの、本当の姿だ。

「でも、一っだけ約束してください」

そんな彼女が、あたしを見つめて、真剣な表情を浮かべて。

何か、言おうとしている。

「うん？」

「絶対に、危ないことはしないように。どうしても、危ないことをするときは、少しでもわたくしに相談してください。それだけ、守ってくださいまし」

本気で心配してくれている。

そんな目だ。

「わかった。出来る限り、そうする」

「出来る限りじゃなくて、絶対ですわ」

「絶対、そうする」

何度も確認をされ、思わず苦笑してしまった。

でも、これがあたしを大切に思ってくれている証だ。

「はい。お願いします」

「それで、話ってそれだけ？」

しかし、何だか拍子抜けだ。

「そうですけれども」

「紗希センパイの話をしにきたんじゃないの？」

何だか深刻な雰囲気を漂わせていたから、きっと紗希センパイに
関係することだと思ったのに、

「違いますわ」

「へえ……」

即答してしまった。

うーん。

「どうして、わたくしがここで紗希ねえの話をすると？」

「自分の姉が、いじめられてる現場、初めて見ただろ」

説明しづらけれども、率直に話す。
すると。

「いいえ」

彼女は、真顔のまま、首を横に振った。

あたしは、首を縦に振ると思っていた。

でも、彼女はそうしなかった。

「へ？」

どうしてなんだ。

どういうことなんだ。

「初めてじゃありませんわ」

「どういうことだよ」

問い返すと。

「見過ごしたのも、放置したのも、初めてじゃありませんわ」
しれっと、しおりんは言い放った。

いじめを、見過ごしたのも。

いじめを、放置したのも。

初めてじゃない。

「自分のお姉さんだろ、なんで放置するんだよ」

いじめがあるということは、知っている。

それでも、実際に現場に遭遇すれば、何かアクションを起こすはずだろう。それでも、彼女は今まで、何も起こさなかったのだ。今まで、現場に遭遇しても、スルーし続けてきたのか。

「それを、紗希ねえ自身が望むからです」

「意味がわかんねえ。んなもん、本当かどうかわかんねえだろ」
残酷すぎる。

あまりにも、悲しすぎる。

しかし、しおりんは。

「わかります。わたくしは、シスコンですから」

ただ、その一言で話を完結させてしまった。

何だろう。

「それでも助けるだろ、普通は」

割り切れない。

あたしは、そんな現実には認めたくない。

しかし。

「朱音くん」

「何だよ」

しおりんの諭すような声に、いらいらしながら返事を返すと。

「紗希ねえは、手を差し伸べられることを望んでいませんわ」

「そんなこと、しおりんが決めることじゃない」

「黒崎家の内情に一番詳しいのは、わたくしですわ。あなたじゃない。あなたは、黒崎の人間ではない」

心にずしりと、重くのしかかる言葉が投げつけられた。

そうだ。あたしは、黒崎家の内部なんて、何も知らない。

あたしはただの女の子だった男の子で、紗希センパイの家族でもない。

「……」

「紗希ねえは、副生徒総長になれる器でした。わたくしなんかよりも、優秀で知的で、頭の回転も速い。氷のように冷徹な判断を下す

かと思えば、温かみのある施しもできる。そんな方です。でも」

「でも？」

「お爺様たち。黒崎家の偉い人々は、紗希ねえを拒絶したんです」
そう語るしおりんは悔しそうに、それでも懸命に感情を堪えているように見えた。

以前、紗希センパイから聞いたことはある。聞いたことはあるが、何度聞いても胸糞が悪いものがある。

「……アルビノ、だから？」

「そうですね。その瞬間、わたくしが副生徒総長になり、黒崎家主の座を分家と争うことが決定したのです」

何が悪いのか。

見かけが、ちょっと人と違うだけだ。

それなのに、どうして黒崎家は紗希センパイを認めないのか。

「紗希ねえは、わたくしを応援してくれています。運営だって、本当のところは手伝ってくれてもいます。でも、絶対にそのことを表には出さな。絶対に、自分には関わるなど言って聞かないのです」

「紗希センパイは、どうしてそんなことを」

「優しい方、ですから。自分のことで、誰かに迷惑をかけたくないのです」

「そんなのおかしいだろ」

だから、あたしは想いをぶつける。
すると。

「ええ、おかしいです。おかしいですわよ。その通りですわ」

堰を切ったかのように、しおりんの口から呪いの言葉が紡がれる。
「でも、どうしようもないんです。紗希ねえは、他の人と何も変わりません。施術を受けて、身体の弱さは克服してます。でも、黒崎家では化け物扱いですわ」

悲痛な思いを、言葉に乗せて。

しおりんは、姉に対する思いを吐露し続ける。

「自分が慕う姉が、泣きながら懇願する姿を、あなたは想像できま

すか」

涙は流していない。それは、副生徒総長、次の当主としての意地か。

それでも、必死に放たれた言葉には、涙の色が滲み出ていた。

「出来ないでしょう。わたくしは副生徒総長です。いじめた生徒を、処分に付することだってできる。いじめた人間を、退学に追い込むことだってできる。でも、紗希ねえはそれを望まなかったんです」
変えられない現実を、しおりんは呪い続ける。

副生徒総長であるのに、権限を行使したいのに。

それでも、姉がそれを望まない。だから、どうすることもできない。

「夕暮れの教室で、『わたしのことで、汐里に迷惑はかけられない』って、いじめっ子に服をはぎ取られて下着姿のまま、泣きながらわたくしの足に縋り付いた大好きな姉の姿を、わたくしは一生忘れません。いえ、忘れられせんわ」

情景が、あたしの頭の中に即座に描写される。

そんな場面に遭遇してしまったら、もし、あたしがしおりんだったら。

あまりの悔しさに、怒り狂っていたに違いない。でも、怒り狂っても、肝心の姉は助けを求めない。

それどころか、逆に気を遣われる。それは、どれだけ悲しいことなんだろう。

「その時わたくしは、心から泣きました。自分の姉は何も悪いことはしていないのに、どうしてここまでされないといけないのか、と。でも、これは決まったことなんです。どうしようもなくて、何も変わらない闇なんです」

変わらない闇。

変えられない闇。

姉が好きなのに、好きな姉は救済を求めない。

葛藤の中で生きる、しおりんの辛さが言葉の一つ一つから伝わっ

てくる。

「しおりん……」

「だから、朱音くんが紗希ねえを助けようとするなら。紗希ねえの意思を無視して、何かコトを起こそうとしているのなら、わたくしは反発しますわ」

小さく、しかし重く紡がれる言葉には、しおりんの覚悟が滲んでいた。

彼女たちの背負った苦しみは、あたしの想像をはるかに超えている。

想像もできないところに、彼女たちの苦しみがある。

「彼女の苦しみは、彼女にだけわかること。あなたが干渉すべき領域にないのです」

何も言えず、あたしは俯くことしか出来なかった。

どうしようもない。

何も言い返せない。

だって、あたしはただの人間で、紗希センパイの後輩で。

そこまで、踏み込めていたわけでもない。何も出来てないんだ。

「今、これを言おうとは思っていませんでした。……でも、良い機会ですので、言っておきます」

心を黒く染めるあたしなんて、全く知らない、といったように。

しおりんは、処刑の言葉を次々と披露してゆく。

「あなたと付き合っても、紗希ねえは幸せになれない」

心に響く、しおりんの声。

「……っ！」

どうして、そんなことを言うのか。

顔を上げて、しおりんの表情を見つめると。

副生徒総長として、責務を全うしているときの顔。

まさしく、黒崎家次期当主としての決意を浮かべていた。

「紗希ねえには、朱音くんは眩しすぎる。あなたは、紗希ねえに夢を与えてしまう」

「夢を与えちゃ、ダメなのかよ」

「ええ、ダメです」

「……」

断固として言い切る、しおりん。

夢も与えられず、夢を求めず。

そんな生活を、紗希センパイはどうして、強いられなければいけないのか。

「絶望の淵に生きてるのです。紗希ねえは。朱音くんが希望を与えれば、紗希ねえは闇に戻れなくなる。光の世界を望んでしまう。そうなれば、傷つくのは紗希ねえなんです」

「あんまりだろ、そんな言い方。なんで、そんなことを言うんだよ。昔は応援してくれてたのに」

「女の子相手の恋愛なら、絶対に成就することはないだろうと、思っていたからですわ」

「……本当かよ」

最悪だ。

そんなことを思っていたなんて。

もし本当なら、あたしを支えてくれていたあのしおりんは、いったい何だったんだ。

「本当ですわ。……でも、今の朱音くんは男の子。もしかすると、成就してしまうかもしれない。そうなってしまえば、傷つくのは紗希ねえです」

ショックを受け、失意の底に沈むあたしに。

「はつきり言っておきます」

しおりんは、一言一言、ゆっくりと。

「あなたと付き合えば、紗希ねえは不幸になる」
あたしに理解させるように。

「わかりましたか？」

言葉を紡いでゆく。

「干渉するなど、言っているのだから、干渉しないのが一番なんです」

諭すように、諦めさせるように。

「朱音くん、わかってくれましたか」

酷く残酷で、優しく、あたしの心を絞め殺す感覚を与える。

応援してくれるとか、支えてくれるとか。

あたしの考えが、甘っちょろかったのだろうか。

そんなことはない。

あたしは、紗希センパイが好きなんだ。

「わかんねえよ、意味がわかんねえよ……」

「紗希ねえのためなんです」

「……」

だから、何を言われても。

あたしは、決して思いを捨てない。

そう、決意をしたのだけでも。

「もしも、それでも、朱音くんが紗希ねえを幸せに出来ると言うのなら」

「……？」

その空気を察したのか、しおりんが厳しい視線を浴びせながら語る。

「誓いを立ててください」

「何をすりゃいいんだよ」

「何もしなくていいですわ」

きっぱりと、言い切るしおりん。

意味がわからない。どうということなのか。

「？」

「わたくしは、姉が大切です。とても大切に思っています」

「ああ、わかってる」

シスコンだ、と繰り返し述べている。

その言葉が本当なら、しおりんは姉が大好きだ。

姉が大切だからこそ、姉の望みを聞き入れてきた。

それがどんな望みであっても、聞き入れてきたのだ。

彼女が背負った覚悟は、あたしが想像するよりも重く、深いだろう。

「もしも、理不尽な幸せを与えて、その後にそれを奪って、絶望の淵に叩き落としたとしたら、紗希ねえは悲しみ、自分を責め、やがて自決に至るでしょう」

「どうしてわかるんだよ」

「妹、ですから。姉の苦しみは、手に取るようにわかります」
根拠は薄い。

薄いが、そうなるのだろう。

「そうかい」

しおりんがそう語るなら、そうなってしまふのだろう。

紗希センパイの心は、繊細で脆い。

ぱつとある日消えてしまっても、全く違和感はない。絶対にそんなこと、ありえないと信じたいが、違和感自体はない。

「はい。それで、もしも、紗希ねえが死んでしまったら」

「たら？」

「わたくしは、朱音くんを一生許しません」

今まで見たことのないような、殺意に満ちた瞳。

かつてあたしの前では露見させたことのないような、決意に満ちた瞳。

「逆に、あなたに殺されてしまうかもしれない。それでも、わたくしは絶対に許さない」

本気だ。

しおりんは、本気で言っている。

嘘でも偽りでもなく、心からそう言葉を紡いでいる。

「あなたを殺して、それから死ぬ。それくらいの覚悟は、出来ています。朱音くんはどうですか。生半可な気持ちで、紗希ねえに手を

出そうとしているのでは、ありませんか」

生半可な気持ちで、紗希センパイと付き合おうとしているわけじゃない。

好きになったのは、そりゃ些細なことだったかもしれない。

でも、それだけじゃないし。そんなことを言われる筋合いなんてない。

言いたいけれど、言葉にできない。

させてくれない。

「女の子が好きだから、紗希ねえが好きになった。可愛くて綺麗で幻想的な紗希ねえを好きになった。それだけじゃないのですか。見かけだけで、好きになったのではありませんか」

絶対に、そうじゃない。

そう言い切れるのだろうか。

あたしは、あたしを認めてくれる、紗希センパイが好きになっただけ。

本当に、紗希センパイが好きなんだろうか。わからない。本当の心は、自分ですらもはっきりしていない。

「……」

「ほら、言い返さないでしょう。きっと、その通りですわ。わたくしを嫌ってくださるなら結構。ぜひ、嫌いになってくださいませ」

返答に詰まるあたしを尻目に。

しおりんは、帰り支度を始める。

勝利宣言か、敗者であるあたしを笑うつもりか。

いずれかはわからない。

でも、あたしは言い返せなかった。あたしの負けだ。

「……もう一度、頭を冷やして、自分でゆっくりと考えてくださいませ。わたくしの大切な、大事な方として」

でも、あまりにも言葉が過ぎる。

少し、さすがにあたしもカチン、と来た。

絶交だと、言い切ってやるのは簡単だ。

しかし。

しおりんが去ってゆく瞬間、ぽろりと瞳から一粒の涙がこぼれ出るのを見た瞬間、何も言えなくなってしまうのだった。

——そして、しおりんが去っていった後。

「はあー……」

自問自答する。

あたしが好きだったのは、紗希センパイなのか。

あたしが好きだったのは、女の子で、可愛い女の子、だったんじゃないのか。

しおりんに言われた言葉が、重くのしかかり続ける。

ため息しか出ないなあ。はあ。

「あら、汐里ちゃん帰ったの？」

「うん……」

「どうしたの、酷い顔よ？」

様子を見てリビングにやってきた母さんが、先ほどまでしおりんが座っていた椅子に座り、あたしに優しく語りかけてくる。

「酷い表情って言ってほしいなあ」

「酷い表情の顔ね」

「何も変わってないよー。はあ……」

こんな冗談にも、返す元気がない。

そんな冗談に、付き合っている余裕がない。

「どうしたの。お母さんに、言ってみなさい」

事の重大さを察知したのか、母さんが尋ねてくる。

「うー？」

「ほら、聞いてあげるわ」

「じゃあさ、お母さん」

聞いてくれるというのなら、聞いてもらおう。

あたしだけじゃ、このまま詰まってしまうそうだ。

「うん」

「こんなことがあったんだけど――」
だから、言うべきではないことは隠し。
あたしが、紗希センパイのことが本当に好きなのか。
そのことについて、尋ねてみる。

――数分後。

「――ってわけ。どうしたらいいんだろう、あたし」
何度も頷き、母さんは話を聞いてくれた。

「あたしじゃなくて、俺。しっかりなさい、朱音」

「うん……」

「朱音は、女の子に戻りたいの？」

根本的な問題だ。

あたしは、どう思ってるんだろう。

最初は、男の子になれば、紗希センパイと付き合えると、簡単に思っていた。

でも、今は違う。そんな単純な問題じゃないと、気づいてしまった。

「うーん、わかんない。どうなんだろう」

「先に言っておくわね」

「うん？」

先ほどまで、笑みを浮かべていた母さんの表情からは、笑いが消え。

しっかりと、あたしを見据えていた。

「朱音は、ずっと男の子のままよ。もう戻れないわ」

ずっと、男の子のまま。

もう戻れない。

なんで、母さんがそんなことを言うのか。

「え？ どうして、言い切れるの？」

「そりゃ、言い切れるわよ」

「なんで？」

純粹に意味がわからなかった。

だから、尋ね返した、それだけのことだ。

「だって、お父さんも女の子だったんだから」

だから、その言葉には頭をハンマーで殴られたかのような、衝撃を与えられた。

「え？」

——父さんが、女の子だった？
どうということ？

最終話前編 『それでも、あたしは』

頭が混乱している。

何てことをカミングアウトしてくれるのか。

母さんはまだ帰ってこない父さんに電話をし、

「……お父さん、中国に出張だって。帰ってくるのは明日だわ」

そして、残念そうに肩をすくめてあたしを見つめた。

肝心のあたしはと言うと。

「……」

あまりのことに、何も言えずにいた。

「お父さんの事情は、またお父さんに聞きなさい」

真実味を帯びた、母さんの言葉。

本当に、父さんは女の子だったのだろうか。

「母さん」

「なあに？」

「本当なの？」

尋ねてみる。

「朱音は、どう思う？」

「信じられない」

「でも、朱音も男の子になったでしょう？」

「そうだけど、そうなんだけど」

何もおかしいことじゃない。

おかしいことだけど、つい最近、自分の身に起きたことだ。

だから、認めざるをえない。そして、他の人にもこの現象が起こっている、おかしいことじゃない。

「理由はわからないわ。何にもわからない」

「……」

「突然、男の子になったのよ。本当に、突然ね」

「それは、いつの話？」

「そうね……高校生のころ、かしら」

「お爺ちゃんたちは、何て言ったの？」

父さんと母さんが、あたしを受け入れてくれたように。

彼と彼女の両親は、受け入れてくれたのだろうか。

「ただただ驚いてたわ」

「そうなんだ……」

そりゃそうだろうなあ。

「まあ、理解のある親で良かったわ」

「なかなかいないと思うけどね」

「そうね」

少し、あたしは気になることができた。

父さんと、母さんのれないについての話だ。

「……その、父さんと母さんは付き合ってたって言ってたけど」

「ええ。女の子同士よ。今まで隠していて、ごめんね」

「……ううん、話してくれてありがとう。でも、そうだったんだ……」

……

今まで、知らなかった。

父さんと母さんは恋愛結婚で、小学校のころからの幼馴染だとは知っていた。

けれども、まさか女の子同士だったなんて。誰も教えてくれなかったし。

だから私が、『女の子が好きだ』、と言っても反対もされずに、あっさりと受け入れてくれたのだろう。

「禁断の恋っていいよねー、きゃあー、とか言ってたら、お父さんが男の子になったんだもの。そりゃ、焦ったわ」

「そんなあっさり？」

「ええ、あっさりね」

「それから、一度も戻ってないの？」

「数日間とか、たまには戻ってたわね」

数日間。

あまりにも短すぎる。

今まで、ずっと女の子のままだと思っていたのに、あの環境はもう戻って来ない。過去の日々の中に沈んでしまった。

「本格的に元通り、にはならないんだ」

「そうね。今じゃあもう、ずっと男のままよ」

「じゃあ、戻れないんだ……」

何とも言えない感覚が胸を支配する。後悔ではない、不安だ。不安が全身を支配した。

「そうね」

「そうなんだー……」

「朱音」

気持ちを沈めるあたしに、母さんが語りかけてくる。

その声色は、優しく包容力に満ちていた。

「うん？」

「あなたは、センパイが好きなのでしょう？」

「うん」

「好きという気持ちは、変わらないのでしょうか？」

「そうなんだけど、でも」

「でも？」

気持ちは変わっていない。

変わっていないはずなのだけれど。

「あたしは本当に、紗希センパイが好きだったのかなあ、って」

しおりんの顔が、あたしの頭の中に浮かぶ。

あたしは本当に、紗希センパイが好きだったのか。見せかけの姿だけを好きになったんじゃないのか。本当は好きじゃなかったんじゃないか、と。

「どういう意味かしら？」

「よくわかんないの。わかんないけど……」

「とにかく、朱音」

「うん」

「何とも言えないわ。あたしには、何とも言えない。だから、ゆっくりと考えなさい」

「そんなー」

救済を求めていたのに、与えられた言葉は突き放すものだった。ゆっくりと考えると言われても、何をどう考えればいいのかすらわからない。どん詰まりの中にいるのに。

「あたしは、元々あの子が好きだったわ。あの子も、あたしを好きでいてくれた。誰に何と言われようと、あたしたちは思い合ってたわ」

あの子、父さんのことだろう。

正真正銘の、女の子同士のカップルだ。

周りからは、悪口や陰口を叩かれただろう。

「……」

それでも、二人は寄り添ってきたのだ。

「だから、あの子が男の子になってからも、関係は変わらなかっただって、あたしが好きになったのは、あの子だもの。女の子だろうが、男の子だろうが、あたしは構わなかった」

「でも、女の子以外に興味あったの？」

「そうね、朱音」

「うん」

どうして尋ねてみたのか。

それは、単純な疑問だった。

「全くなかったわ。男の子なんて、興味はなかった」

「だよね……。なら、父さんのことは嫌いになるんじゃないの？」

「どうして、そう思ったの？」

「ええと、何となくなんだけど」

女の子好きの女の子が、男の子を好きになる。

ありえないんじゃないか、と思ったのだ。

「人間が好きになるのは、人間でしょう。あなたは、性別を好きになるの？」

「……そうじゃない、と思うけど」

世間には、様々な人がいる。

トラウマがあつて、男の人が嫌いな人もいる。その逆もしかり。
「好きになった人間が、たまたま女の子か、男の子だった。性別なんて、後からくつついてくるものじゃないの？」

母さんの考えは、多様な考えの一つだ。

異を唱える人だっているだろう。

ありえないだろう、と叫ぶ人もいるだろう。

それは、あたしだって例外ではなかった。

「それは、どうなんだろう」

「共感してもらえとは思わないし、させるつもりはないわ。でも、少なくともあたしはあの人を愛してたし、今も愛してる」

でも、一つだけ感じ取ることが出来た。

真摯に想い人のことを語る、気恥ずかしいばかりの母さんの姿を見つめて、あたしは何だか、暗い気分には微かな光が差し込んだように思った。

「……」

「結局、二人の気持ち次第なのよ。気持ちが通じてさえいれば、どんな相手でもうまくいくわ。異性同士でも、同性同士でも、ね」

「母さん……」

好きになったのは、性別なのか。それとも本人か。

二人の気持ち次第。

その言葉は、あたしの背中を押してくれた。

「だから、考えなさい。朱音。それで、悩みなさい。悩み続けた先に、あなたの素晴らしい未来があると思うわ」

「……うん。ありがとう、母さん」

「あなたは、あなたの道を進めばいい。一度しかない、短い人生ですもの。楽しんで、あなたがやりたいように生きればいいわ」

「ありがとう、母さん！」

女の子にはもう、戻れないかもしれない。

それでも、悔やんでばかりではいられない。
たった短い、それこそ数十年の人生なんだ。

やりたいようにやって、生きればいいじゃないか。今までそうしてきたんだ。

「本当、親子で手間のかかる子だわ。でも、そこが可愛いんだけどね」

そう語ると、母さんは唇をにいと上げ、温かい笑みを浮かべた。
でも、まだ完全には、想いが固まらない。

後一步、何かが必要だった。

――翌朝。教室でのこと。

しおりんは迎えに来てくれなかったし、目を合わせても逸らされる。いわゆる無視という状態だ。

今までずっと二人で行動していたのに、突然の決別に、クラス中は訝しむ視線をあたしに向けていた。

『ああ、ヤンキーがやらかしたのか』。とか。

そんな感じの。

「おい、ヤンキーがやらかしたのか」

茶化す、山岡の声。

こいつ、テンプレートそのままじゃないか。

「ちげーよ、バカ」

「そうなのか。何があったんだよ」

「何もねーよ」

山岡に話したところで、状況は何も変わらない。

だから、何も話すつもりはなかった。

でも。

「ウソつけ。あいつのあんな顔、久しぶりに見たぞ」

「わかるのか」

「そりゃ、友達だからな」

「……そうか。なあ、山岡」

少し、聞いてみたいことが出来た。

「ん？」

「もしも、もしもだけどな」

「おう」

「お前、女の子になったらどうする？」

「なんだよ、切り取るってことか？」

股間を指さしながら、笑い飛ばす山岡。軽く流してやろう。

ここで反応しても仕方ないし。

「いや、そういうことじゃない」

「？　　どういうことだよ」

「そのままの意味だよ。身体が女の子になったら、お前は どうする？」

「いいじゃねえか、おっぱい揉み放題だぜ」

楽しげに語る彼に、

「すぐに飽きるぞ。大したもんじゃねえよ」

あたしは、素直な感想を伝えてやる。

「マジで」

「ああ」

すると、何だかがっくりと肩を落として落ち込んでしまった。なんで落ち込んだのかはわかるが、なんであたしに言われて落ち込んだのかは不思議でならない。

「まあいいや。何だか気が晴れたわ」

とにかく、しょうもない話を交わしただけだけれど。

それは、気晴らしになった。やっぱり、息抜きて大事だ。

「おう。それなら良かった。何だかお前、顔白いからな」

「寝てないんだよ。考え事してて」

「そうか。チンピラのボスはちげーなあ」

「その話もう広まってんの？」

流れで、引き受けてしまったボスの話。

まさか、本当にやることになるとは思わなかった。

「おう。かなり広まってるぞ」

「マジかー」

「なるようになるだろ。頑張れよ」

「ああ……」

まあ、その通りだ。

なるようになるだろうし。でも危険はある。危険はあるから、助けを求めておかないといけない人がいる。

安全を確保するためにはまず、しおりんと仲直りしないとなあ。

――そして、放課後。

いつも通りに、こっそりと英語研究会の部室に入る。何だか視線を感じた気がするけれども、しおりんのものだろうか。

「あれ？ 来てないんだ」

中を見てみると、紗希センパイはいない。

しおりんがいないのは、多分副生徒総長の仕事があるからだろうし。

「……ふう」

椅子を引き、とりあえず着席。

うん。せっかくだし、考え事をしていよう。

「……朱音くん？」

と思ったら、来客だ。

望んでいた人が、やってきた。

「こんにちは、紗希センパイ」

「はい。こんにちは。……あの」

いつも通り、あたしの向かい側に座るやいなや、口を開いて語りかけてくる。

何だろう。

「どうしたんですか？」

「汐里と、喧嘩してますよね」

「へ？ 喧嘩？」

「えと、汐里と、朱音くんです。喧嘩してますよね？」

「ど、どうなんでしょう。どうしてそれを、紗希センパイが？」

「……汐里、昨日はわたしに泣きついてきたんです」
びっくりした。

しおりんが、紗希センパイに泣きつくなんて。

「そんな大げさな」

去り際、確かにしおりんは泣いていたけど。

正直、泣きたいのはあたしのほうだぜ。泣かせてくれよ。

「朱音くん」

「は、はい！」

冗談で言ってるつもりかと思ったけど、紗希センパイはマジだ。

これは本気で怒っている目だ。深い血のようなワインレッドの瞳は、静かな怒りに満ち溢れていた。

「わたしは、怒っています」

「……」

「大切な妹なんです。大切に扱ってあげてください」

やばいなあ、紗希センパイ勘違いしてる。

あたしとしおりんが喧嘩して、それでしおりんが泣かされたもの
だと思ってる。

実際は、紗希センパイのことで言い争いをして、負けたのはどっ
ちかと言えばあたしなんだけどなあ。

「……大げさ、ですよ」

「何があっただんですか」

「それは、えと、あの……その……」

「言えないんですか？」

言えるわけがない。

訝しみながら尋ねてくる紗希センパイに、罪悪感を覚えながら。

「……すみません」

とにかく、拒絶するしかない。

だって、言えないんだから。想いを伝えることは、まだできない

し。

「朱音くんは、きっと優しい人なんです。そんな優しい朱音くんが、どうして汐里を泣かせたりなんてしたんですか」

「違うんですよ、それは」

だめだ、勘違いしてる。

あたしが、しおりんを攻撃したと思っている。

そんなことはないのに、それを説明するには、相手が悪すぎた。

「何が違うんですか？」

「……やっぱり、言えません」

「汐里、泣いてました。理由を尋ねても、『わたくしが悪い』の一点張りです。何があったのですか。どうして汐里は、そんなことを言ったのですか」

怒り心頭、といった感じに紗希センパイは、机に乗せた手を震わせながら語る。

その怒りを、もう少し外に向ければいいのに。自分に向ければいいのに。そんなことを思わせるくらい、静かだけれども嵐のような憤怒の様相だった。

「しおりんは、理由を言わなかったんですか」

「ええ。何も」

「何度も、尋ねたんですか」

「ええ。そうでなければ、朱音くんを責めたりなんてしません」
喧嘩の理由は、大きく分けて二つ。

一つは、紗希センパイを救済しようとしたこと。

二つは、紗希センパイを思い続けることへの彼女の異論。

「……ありがとう、しおりん」

でも、しおりんはどちらも隠してくれた。

ただ、想いをひた隠しにしてくれた。

トラブルを回避出来たこと、そこは不幸中の幸いだった。

「はい？」

「何でもないです。えと、紗希センパイ」

「はい」

さて、どうやって説明しようかな。

「喧嘩じゃないんです」

「わかりました。では、何なんですか」

「方向性の違い、です」

「今は、そういうギャグを飛ばす場面ではありません」

ギャグじゃないんだけどなあ。

割と、本気の話なんだけどなあ。

「違うんです、本当なんです」

でも、どう説明するか。どこまで説明するか。

「……説明していただいても？」

「詳しく、説明することはできません」

訝しむ紗希センパイの前に、あたしは悩みながら考えていた。

どうしようかなあ。どのようにしようかなあ。

「なぜ」

「……」

「どうしてなんですか、朱音くん」

「……」

悩むあたしを前に、紗希センパイは厳しい視線と口調で問い詰め
てくる。大事な妹の問題だ。それは、気が気でならないだろう。

あたしはあくまでも、転校生。しおりんの友人ということにはな
っているが、紗希センパイとはそこまで親密な仲ではない。

「わたしには、聞かれたくないこと、なんですか？」

「率直に言っと、そうです」

やっぱり、素直に話すべきか。

話さないと、もっと話がこじれてしまいそうだ。

「わたしの、容姿のことですか」

「違います。でも、近いかもしれません」

「わたしの、将来についてですか」

「立派なお嫁さんになってください。違います」

少し、気を紛らわすためのジョークだったが、軽くスルーされてしまった。

紗希センパイの顔が怖い。

「……じゃあ」

やがて、ワンクッション置き。

「……いじめのこと、ですか？」

彼女は、小さな声で、小さな唇から言葉を紡ぎだす。

「そう……です」

「それで、汐里と揉めたんですね」

「それもあります」

「それも？」

「まづい。」

まだ、想いを伝えるべきじゃなかった。

誤魔化さないと。

「いえ、そうです」

「先にあの子のために言っておきますが、わたしがあの子に何もするな、と言っているのです。もしも、あの子が冷たい子だと思っているのなら……」

悲しい表情を浮かべて、紗希センパイはあたしに忠言してくる。

が、そんなことは問題じゃない。しおりんは、そんな子じゃない。よく知ってる。

「知ってます」

「どうして……」

「何もかも、知ってます」

どうして、しおりんが、紗希センパイを庇わないのか。

普通に考えれば、しおりんは紗希センパイを庇うはずだ。姉だから。

しかし、しおりんは庇わない。それは、紗希センパイの願いだからだ。

「聞いたんですか」

「はい」

「教えたんですか」

「はい」

「朱音くん、あなたは本当に……」

これは、黒崎家の病理だ。

どうしようもない、病理現象だ。

まさか、しおりんがそれを語るとは思わなかったのだろう。紗希センパイは、驚きの表情を浮かべていた。

「俺は、そんなことは間違ってると思います」

でも、そんなことはどうでもいい。

あたしは、想いを伝えるだけだ。

「……」

「紗希センパイには、幸せになる権利がある」

「ありませんよ、そんなもの」

「ありますよ」

ない人が存在するはずがない。この世界中に存在する、どんな人でも、幸せになる権利はある。幸せになる機会が、与えられないだけだ。

紗希センパイには、幸せになる機会も権利もあるのに。

「ありません。わたしは、黒崎の出来損ないですから」

「出来損ないなんかじゃないです。紗希センパイは、立派な人です。一人前の、俺の尊敬する先輩です」

「そんな価値、ありませんよ。こんなものに」

「いいえ、あります」

すると、紗希センパイは自嘲の笑みを浮かべた。

「……朱音くん、もういいでしょう」

「はい？」

「わたしのことは、もういいでしょう。汐里と早く、仲直りしてください」

どうして、この人は自分の問題をどこかへと、放り投げようとする

るのか。

苦しんでるのは自分なのに、どうして、しおりんの事ばかりを考
えるのか。

「嫌です」

だから、あたしは即答する。

「え……？」

「このまま、しおりんと仲良くするわけにはいきません。だって、
考えも一緒じゃないし、このまま妥協するなんて、俺はやです」
妥協なんてしたくない。

あたしは、あたしの信じる道を進みたい。

「そんな、だめです。わたしのせいで、そんなことは」

「偉そうなことを言わないでください。これは、あなたのせいじゃ
ない。俺が、俺の意思で選んだことですから」

「……意地悪しないでください」

屁理屈に聞こえるかもしれない。

意地悪に聞こえるかもしれない。

それでも、あたしは、この選択が正しいと信じている。

「意地悪じゃないです」

「……」

だからこそ、強気に主張し続ける。

やがて、紗希センパイは視線を机に落として、俯いてしまった。
表情は見えない。、見えないが、ひるむわけにはいかない。

「もしも、仲直りしてほしいなら、しおりんに助けを求めてくださ
い」

「……」

助けて欲しいと、言ってくれ。

お願いします。紗希センパイ。

心の中で、強く願い続けるが。

彼女は、俯いたままあたしの目を見ずに言葉を紡ぐ。

「その後に、俺に助けを求めてください。俺はあなたを全力で助け

ます。何があっても、何が起きても、絶対に助けます」

「……嘘ですよ」

「嘘じゃないです。全部、本当のことです。絶対に助けます」

あれ、何だかうまくいくような気がする。

声のトーンも、そこまで悪いわけじゃない。どこか、希望に縋ろうと悩んでいるような、そんな声だった。もう少しだと、あたしは思っていた。

でも。

「何にも、知らないくせに」

「……はい？」

「何にも、黒崎の事情を何も知らないあなたが、そんなことを気軽にのうのうと言わないでください！」

「……ですけど」

顔を上げ、あたしを見つめる紗希センパイの顔は。

今までに見たことがないくらい、世界を恨む表情に満ちていて。決して救われることがないと知っている、死刑宣告後の囚人のようだった。

「黒崎本家の人間は、優秀で優美で可憐でなくてはならないんです！ わたしみたいな出来損ないなんて、黒崎に置いてもらえるだけありがたいんです。それなのに、汐里に迷惑なんてかけられないんですよ！」

透き通った、水晶の声が英研の部屋に響く。

感情をこめて、叩きつけるように叫ぶ紗希センパイ。

瞳には、微かに水分が含まれていた。

頬を赤く染めて、力いっぱい言葉紡ぎ続ける。

「……」

「汐里は、これから当主を目指すんです。いずれ、わたしなんて遠くに捨て去って、大空に羽ばたくでしょう。それを、わたしみたいな足かせが邪魔することで、この輝かしい未来が失われてしまう。そんなこと、わたしは嫌なんですよ！」

「どうして、そんなことを思うんですか」

絶対に、しおりんはそんなことを思わない。

「姉ですから。役立たずの、姉ですから」

「……」

でも、紗希センパイはかたくなに、自分が荷物になると感じている。

こんなの、絶対に間違ってる。

「わたしのせいで、汐里が泣く。そんな姿なんて、微塵も見たくないんです」

「でも」

だから、反論しようとするのだけれども。

有無を言わせぬ態度で、彼女は迫ってくる。

「朱音くん」

「……はい」

「わたしは、尊敬されるような人じゃありません」
即座に否定したい

だって、この人は尊敬に値する人物だから。

「でも、いじめに耐えて」

自己犠牲の精神だろうが何だろうが、持った思いを貫き通すのは、簡単なことじゃない。それをやりきっているのだから、どんなことであれ尊敬に値する。

でも。

「耐えられていると、思ってるんですか？」

「え？」

「妹のことを思って、全部押し殺してるだけなんですよ」

紗希センパイは、乾いた笑みを浮かべて、あたしを嘲笑する。

今までに見たことがないような、憎しみと悲しみに満ちた笑みだ。ワインレッドの瞳から毀れ落ちかけているのは、水晶のように透き通る涙。

「筆箱を隠されて、ノートを破られて。それでも耐えていたら、今

度は服を脱がされて。身体に攻撃できないからって、心を削つてくるんですよ。それでも、押し殺すしかないんです。わたしは、それしかできないんです」

「……」

悲しみを通り越して、全てを諦める。

その姿が、ありのままだと自分に思い込ませる。

諦観の塊が、目の前の紗希センパイだった。

「あなたが助けてくれなければ、わたしは汚されていたでしょう。でも、遅かれ早かれそうなるんですよ。わたしにはわかるんです」

「……なんで……」

でも、そんなことを彼女の口から聞きたくなかった。

あたしは、言葉にならない言葉を必死に紡ごうとするが。

「わたしはもう、どうしようもない、どうしようもない人間のクズなんだって。だから、しょうがないんだって」

「なんで、そんなことを……言うんですか……」

うまい反論が頭に浮かばない。

こんな全てを諦めきった人に、あたしは何を言えいいのか。

苦しみに心を傷つけていると、紗希センパイが更なる追い打ちをかけてくる。

「あなたよりも前に、わたしを助けてくれると言った人がいました。同じ名前の、女の子です」

青木朱音。

ただのチンピラで、ただの暴力女で、ただのよわっちい、見栄っ張りの女。

まさか、どうしてここであたしの名前が出るのか。

「……」

身構える。どんな言葉が飛び出すのか。

やがて、紗希センパイは息をのんで、ゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「でも、その人はいなくなってしまった。わたしを助けたことで、

制裁を受けたのでしょうか。わたしを見捨てて、どこかへと行ってしまった」

制裁？

そんなもの、受けていない。

見捨てたんじゃない。だって、あたしはここにいる。

「責めるつもりはないんです。彼女はきっと、転校先で幸せにやっているでしょう」

転校なんてしてない。

でも、見せかけはそうだ。見かけ上は、あたしは転校した。

でも、それは紗希センパイのせいじゃないし、誰のせいでもない。

「ただ、わたしは後悔してるんです。もしも、わたしが助けてと言わなければ。彼女の差し出す手を取らなければ、あの子は転校していかなくても、良かったんじゃないかって」

「その人は、いじめられていたわけじゃないと思います」

「誰が、それを証明できるんですか」

「しおりんです」

「あの子は、朱音ちゃん……その人の親友ですから。きっと庇うでしょう」

だめだ。そう言われてしまったら、どう言い返せばいいのかわからない。実際しおりんは庇ってくれるだろうし、嘘だって取り繕ってくれるだろう。

猜疑心に満ちた、今の紗希センパイを説得することなんて出来やしない。

「……」

「だから、わたしはもう誰の手も取りません。誰の手も、決して借りたりしません」

こうなったら、あたしの言葉は届かない。

彼女は耳をふさぎ、目を閉じ、全ての救済を拒絶した。

過去のあたしが、紗希センパイを苦しめている。心が弱る思いがした。

「それが、わたしの存在理由。存在価値なんです」

「それで、いいんですか。紗希センパイは本当に、そんなのでいいんですか」

それでも、このままなんて終わりたいくない。

だから、必死に抵抗を続ける。

「いいんですよ。朱音くん。あなたが気を病むことはありません。あなたが笑っているだけで、わたしは幸せなんです。心を押し殺せるんです」

「……」

だめだ。どうして、紗希センパイはこんなに嬉しそうに笑うのか。そんな表情をされてしまったら、あたしは何も言えなくなるじゃないか。

「汐里と、仲直りしてきてください。多分、今、あの子は落ち込んでるので、屋上にいますよ」

「……はい」

あたしだけの力では、何も変えられない。何もできない。

席を立ち、英語研究会の部室を出ようとしたところで、

「どうして、あそこまで感情的になってしまったんでしょう。わたしはやっぱり……」

紗希センパイは一人、小さく言葉を呟いたが、よく聞こえなかった。

聞き返すと、

「どうしました？」

「いえ、何でもありませんよ。行ってらっしゃい」

そう語り、彼女はにっこりと消え入りそうなほど小さく、頬を緩めて笑んだ。

最終話後編 『だから、あたしは』

屋上に行けと言われたものの。

何だか、踏ん切りがつかない。自分が弱いのはわかってる。でも、足がうまく動かない。そう思ったあたしは、気が付いたら携帯で電話をしていた。

「もしもし？」

『もしもし、朱音、どうしたんだい？』

今、中国にいますという父さんに、だ。

「聞きたいことがあるんだけど」

『急ぐかい？』

廊下をゆっくりと歩きながら、屋上へと向かいながら。

遠い地にいる父さんに、手助けを願った。

電話の向こう側は、何だかガヤガヤと騒がしい。どこか、市場か駅にでもいるのだろうか。仕事なのに、何だか申し訳ない気持ちになった。

「うん」

『わかった。……すみません、息子から大事な連絡が』

「……」

取引先の人と一緒にいるのだろうか。ほんの少しの時間を経て、ガヤガヤとした騒音が消え、やがていつもの父さんの声だけが耳に響いてきた。

『うん、いいよ。何だい？』

「えっと、紗希センパイのことなんだけど」

『ああー。可愛い子だね』

とぼけた笑い声が携帯越しに聞こえる。

「母さんに言いつけるよ」

『ごめんごめん。それで?』

気持ちを和ませようとしてくれたのだろうけど、あんまり余裕がなかった。その空気を一瞬で察知したのか、父さんはすぐに話題を転換させる。

「ちよつと、言いくるめられちゃって」

『あの子は、朱音より賢そうだからね』

「それは俺がバカってことでしょうか」

『いやいや、朱音は自慢の娘だよ。息子? 息子か』

娘なのかなあ。息子なのかなあ。怪しいところだけど。
今、そんな問題はどうでもいいんだ。

「……父さん」

『はは。でも、どうしてそんなことを言うんだい?』

「父さんが女の子だったって、母さんから聞いたんだ」

『あー、言ったんだ』

「うん」

『幻滅したかい?』

「ううん」

とことごと歩きながら、首を横に振る。

『そっか』

「だって、同じだもん。幻滅なんてするわけない」

『はは。それもそうだね』

少し、衝撃を受けたけど。

自分が男の子になったときの衝動に比べたら、全然大したことはなかった。

そこで、本題を切り出す。

「それで父さん、聞きたいことがあるんだけど」

『うん』

「相手が望んでないのに、相手を助けるのって、どう思う?」

『誰かが助けを望んでないのに、無理やり朱音が助けようとしてる、って解釈でいいのかな?』

言い方がストレートだ。でも、その通りだ。反対するかなあ。

「う、ま、まあ」

『いいんじゃないかな』

でも、父さんは反対しなかった。優しい声で、あたしを肯定してくれた。

「いい、の？」

『うん。朱音がそうするべきだと思ったのなら、そうするべきだと思うよ』

「でも、望んでないんだよ？」

『望みたくても、望めない人だっているんだよ。朱音』

そう語る、父さんの声は真実味に満ちていた。

まるで、自分が経験したかのように。

『世の中全ての人が、望み通りに生きられるわけじゃない。でも、そのせいで本当は、望めば手が届くところにある人も、手が届かないって、錯覚してしまってるんだ』

「……難しいよ、父さん」

『星は手が届くようで、届かない距離にあるって言うだろ？』

「うん」

『でも本当は、届くかもしれない。届かないって、思い込んでるだけだ。だから、誰も手を伸ばさないんだ。届くって、信じてないんだ』
絶対に、ありえない。星に手が届くなんて考えられない。

それが、常識だ。それが、当たり前のことだ。でも、それは思い込みだ。

「……」

だから、思い込んでるだけじゃ、何も変わらない。

実際に行動しろ、と父さんは言いたいのか。

『だから、手を伸ばしてから考えろ。問題は、そこから考えればいいってね』

「何か、凄い名言っぽい」

『母さんの受け売りなんだけどね。そうやって告白されたんだ』

「え？」

『僕たちは、許されない関係だった。今よりも、世間の目は冷たかったしね』

「……」

そうだろう。今よりも、昔のほうが同性恋愛には冷たかった。苦勞を乗り越えて、今にたどり着いた彼女たちの言葉が、今のあたしにはとても重く深く思えた。

『でも、母さんは告白してくれたんだ。勇気を出せなかった僕と違って』

「断られたら、どうするつもりだったんだろう」

『わからないけど、母さんのことだからね。他の娘を探してたかもね』

「そうかなあ」

多分、口説き落としたと思うけど。あの調子なら。

屋上へと至る階段を、あたしはゆっくりと登り始める。

『色々あったけど、詳しい話はまた今度。今は、朱音のことが大事だ』

「……うん」

『もう、答えは出たんじゃないかな？』

「何となく、だけど」

『なら、後は頑張るだけだよ。手を伸ばさせるために、頑張るだけだ』

そうだ。

あたしの仕事は、黒崎姉妹に手を伸ばさせること。

そうすれば、あたしが手を取ればいいんだ。彼女らには、手を伸ばさせるだけでいい。

「わかった。ありがとう、父さん」

『健闘を祈るよ。朱音』

携帯をポケットに突っ込み、正面のドアを見据える。

本当に、ありがとう。

父さん。

——そして、ドアノブを回し、屋上へと至る。

夕暮れの屋上でフェンスにもたれながら、一人想いに耽っている、しおりんがいた。俯き、何かをぼうつと考えているようだ。

「しおりん」

話しかけると、しおりんはフェンスから離れ、ぱっと目を手で拭いこちらを見つめる。

「っ、何ですか」

「目、赤いよ？」

「そんなことはありません」

「はいはい」

強気だなあ。

まあ、いつものことなんだけど。

「……それで、どうしたんですか。英研に行ってるわけではありませんのん」

「紗希センパイに、しおりんと謝ってこいって言われた」

「なるほど」

「別に、喧嘩してないんだけどね」

これは、喧嘩じゃない。

単に、方向性が違ったただだ。

たった、それだけのことだ。

「そうですわね」

重圧が、場を支配する。

「……」

「……」

あたしとしおりんは、ただ黙って向かい合っていた。何を喋るわけでもなく、相手を責めるわけでもなく、ただ夕焼けの輝く屋上で立ち尽くしていた。

お互いの目を見つめながら、お互いの譲らない意思を主張しようように。

でも、口に出さなければ伝わらない。

「あのさ、しおりん」

だからあたしは、しおりんに語りかける。

「はい」

「やっぱり俺、紗希センパイを助けたい」

「……」

すると、『またか』と言わんばかりに、あからさまに落胆を表情に浮かべて、彼女は地面に視線を落とした。

「やっぱり、好きなのはやめられないし。紗希センパイが嫌だ付き合いたくない、と言うならまだしも、その前に諦めたくないんだ」

「わたくしの忠告には、聞く耳を持たないということですか？」

「ううん。そうじゃない。しおりんの忠告は、聞く。聞くけど、俺にも思いがある」

「黒崎の家は、朱音くんが思っているよりも複雑なんです」

「そうかもしれない」

ややこしい関係。

普通の家庭育ちの、あたしにはさっぱり理解できない。

「だから、触れてほしくない。特に、あなたには」

「俺は、紗希センパイを傷つけるために、助けるんじゃないんだ」
でも、その気持ちだけは本当のものだ。

傷つけるつもりがないのに、傷つけてしまうことはある。

それでも、このまま放っておいたら、取り返しのつかないことになる。

だから、あたしは助ける。手を取りたいのだ。

「でも、結果的に傷つけることになる」

「それは、そうなってみないとわからないだろ？ 紗希センパイに言われて、助けずにいて、誰も助けることがなくて、そのまま今に続いてるだけじゃないか」

「それは、そうですね」

あたしに言われて、しおりんは黙り込んでしまった。

しおりんは、紗希センパイに関わるな、放っておけと指示されていた。

そして、姉が好きなしおりんは、姉の意向を全面的に受け入れていた。

でも、それが正しかったのか？

本当に、それで良かったのか？

「皆が皆、気を遣って傷つけないようにして。俺も、男の子になる前は、それが正しいと思ってたよ。あの状況が異常だなんて、全く思わなかった」

あのまま、現状が続いていれば、あたしは変革を望まなかった。

英語研究会の部室に行くのでも、決して人に見られないように、こっそりと行動していた。それは全て、紗希センパイの意向を受けてのことだ。

いじめを救済したことはある。それでも、積極的に救済することはなかった。

あくまで、通りすがりの人間で、偶然にいじめ現場を発見していたから、助けだしていただけた。それが正しいと思ってたし、おかしいとは思わなかった。

「……」

「でも、今は違うんだ。それはおかしいって思うんだ。英研の部員であることを隠すのも、部室外では一切紗希センパイと話さないのも、おかしいんだ」

全部がおかしい。

こんな常識、間違っていた。

今まで受け入れてきた感覚は、受け入れるべきじゃないものだった。

だからこそ、あたしは主張する。

「おかしいんだよ、しおりん」

自分に向けるように。世界に向けるように。
言葉を紡ぐ。

「何が、あなたをそこまでさせるのですか」

「このままは嫌だって、そんな意識」

「ヒーロー気取りは、やめてくださいませ」

「ヒーローなんかじゃない。俺は、ただの人間だから」

「……だから、気取るなど言っているのですわ」

不機嫌そうに、しおりんは言葉を紡ぐ。

さつきから、地面ばかりを見つめて、あたしを見つめてくれない。

「しおりん」

「何、ですか」

小さく、今すぐに消え入りそうなほど小さな声で、彼女は答えた。

「俺一人じゃ、何もできない。よわっちい人間だから」

「わたくしもですわ」

「黒崎家みたいな力もない、山岡みたいに全てを笑い飛ばすこともできない」

誰かに頼らないと、何もできない。

誰かに縋らないと、決断もできやしない。

ヒーローでも、ヒロインでもない。主人公でも、全てをひっくり返すことの出来る超人でもない。

「……」

「だからさ、しおりん。お願いがあるんだ。何でも聞いてくれるんだろ」

「何ですか」

しおりんは、あたしが男の子になったとき。

面倒事は処理してやる、と語った。

なら、今がその時機じゃないのか。

「俺と一緒に、紗希センパイを助けよう」

だから、あたしは言葉を叩きつける。

しかし、しおりんの反応は薄く。

「……それを、紗希ねえは望まないのです」
未だ、俯いたままだ。

ダメか。これじゃダメなのか。

「今、紗希センパイの環境は最悪だ」

「ですわね」

「このまま続ければ、どうなるかわからない」

「……そうですわ」

紗希センパイが、自嘲気味に語っていたように。

彼女に対するいじめは、エスカレーターを続けている。いずれ、身体を汚されたり、傷つけられたり、もしかするともっととんでもないことに発展するかもしれない。

それは、しおりんもわかっているはずだ。

「じゃあ、変えてやろうぜ。どうせこれ以上悪化しないんだ。やることやってみようぜ。何でもやって、助けてみようぜ」

実際は、悪化するかもしれない。

それでも、今はしおりんを説得するしかない。

まずは、しおりんをこちらの味方に引き入れ、手を差し伸べさせねば。

「……でも、紗希ねえが」

「しおりんに聞いてるんだよ」

シスコンと自称するしおりんの意味は固い。

この期に及んでも、紗希センパイの顔が頭に浮かんでいるのだろう。紗希センパイの言葉を断固として守ることが、妹としての責務だと考えているのだろう。

「でも」

「しおりんは、紗希センパイじゃねえだろ。しおりんの気持ちを、聞かせてくれ」

でも、それじゃダメだ。

それじゃ、何も解決しない。

しおりんは、紗希センパイの言いなりになってはいけない。紗希

センプイはしおりんのためを思い、自らを犠牲にしているのだから。しばらく、重い沈黙が続く。

体育会系の部活生徒たちが、大きな掛け声をあげて、グラウンドを走っている声が聞こえてくる。しかし、屋上では依然として沈黙が続いていた。

お願いだから、首を縦に振って欲しい。

このまま、横に振らないで欲しい。

そうなってしまったら、紗希センプイを救うための、一歩が踏み出せなくなる。

やがて。

何かを決断したしおりんが、ゆっくりと顔を上げ。

「……わかりましたわ」

こくりと、頷いた。

「よし」

「でも、前に言ったことは忘れていませんよね」

姉に何かあったら、絶対に許さない。そんな趣旨のことだ。

そんなこと、わかりきっている。紗希センプイを傷つけるために、助けようとしているわけじゃないんだから。

「ああ。絶対に大丈夫だ」

「……賭けてみますわ。あなたに。朱音くん」

「ああ」

よし。

一歩前進だ。

しおりんは、あたしの手を取ってくれた。

そして、あたしたちは屋上を去り、廊下を歩き始める。向かうところは、理事長室だ。

「紗希ねえに、興味を持っている人はそれなりにいます」

「そうなのか」

歩きながら、紗希センプイに関する情報を尋ねると、さすがと言

うか、しおりんは十分に情報を集めていた。

「はい。容姿端麗才色兼備才気煥発。幻想的な姿と、知的な振る舞いに感銘を受けているのでしょ

う若干、姉を褒め称えすぎ気味だと思うけど、その通りだと思う。

あの容姿は、嫌でも目を引くし。しかも、素材がとんでもなく美しいのだ。

「だよなあ」

「でも、紗希ねえはいじめのターゲットです。誰も近寄れません」

「いじめてるのは、誰だ？」

「主に二年女子、それから男子が数人ですわ」

男子は、力でねじ伏せれば何とかなる。そういう生き物だ。

でも、女子か。面倒だなあ。

「男子は何とかなる。女子はどうすればいいかなあ」

「退学にさせますか」

「最終手段だな、それは」

退学ということも、手段の一つとしてはある。

いじめっ子全員を、退学させれば話は全て片付く。

しかし、そうなれば退学させた奴らの親が面倒くさい。将来のしおりんや紗希センパイのキャリアに傷がつくことも考えられる。

でも。

「和解なんて、甘ったるい結末は許しませんわよ」

「……しおりん」

怒りに満ちた、妹の声。

自らの思いを押し殺して過ごし、やがて解き放った彼女自身の思い。

「やると決めたら、二度と立ち上がれないようにしてやります。今まで、紗希ねえが受けた苦しみを、百倍にして返してやりますわ」

「怖いなあ」

「紗希ねえが受けた苦しみは、そんなものじゃないのですわ。……本当に、本当に苦しいものなのです」

何が起ったのかを知っており。

何故起ったのかを知っている。

紗希センパイに対するいじめを詳しく知る、しおりんだからこそ
の思いだ。

「早く、解放してやろうぜ。しおりん、お願いがある」

「はい。何ですの」

「生徒総会として、少し職権濫用してみないか」

「紗希ねえのことなら、ぜひ」

職権濫用なんて、バレたらとんでもないことになる。

「よし。じゃあ、やろう」

「何をするのです？」

「まず、俺が――」

でも、これくらいなら問題ないだろう。

あたしは、紗希センパイを救うための計画を、二人で話す。

ここは、理事長室の近く。

もう、決行の時は近づいている。

――そして再び、所は変わり、英語研究会。しおりんは今、理事長と話をしており、ここにはいない。あたしが来たのは、とある目的を果たすためだった。

ここで、あたしは紗希センパイと話をつけようと思った。

思ったのだけれど、誰もいない。

帰ってしまったのか？

いや、違う。

鞆が、まだ置かれたままだ。

どうしたというのか。何があったというのか。

トイレならまだいいが。少し嫌な予感が脳裏をよぎる。

そういえば、あの時、英語研究会に入るとき。何か、嫌な視線を感じた。

「まさかっ……!!」

予感を頭の中で整理するよりも先に、あたしは回れ右をして、英語研究会のドアを思いっきり乱暴に開き、廊下に飛び出してゆく。

廊下を思いっきり全速力で走っていると、ポケットの携帯がブルブルと震える。一体誰がかけてきたのか。見てみると、例のヤンキー元ボスだった。

「もしもしっ！」

『青木か。俺だ』

「ああ、何だ！」

このタイミングで、何の用事だろう。

いらいらしながら、用件を尋ねると、深刻そうな声色で彼は答えた。

『センパイさんが、ヤベエことになってる。そっちの学校の男子から連絡があった』

「マジかよ」

心臓が、どくんと鼓動を立てる。

そして、高速でリズムを刻み始める。

『やばいぞ、かなりやばい』

「どこにいるんだ、どこに、誰が！」

『高校校舎の屋上だ。ナイフを持った女が、何かしようとしてるらしい。殺気立ってて、近寄れねえ、とそっちの男子は言ってた』

ナイフ、殺気。

それは近寄れないな。仕方のないことだ。

屋上か。さっきまで、あそこにいたのに。すれ違ってしまったのか。

「くそっ……！」

『倒して、見せつけてやれ。お前は学内でセンパイさんを守れよ』

「ああ、ありがとな」

『ああ！ 負けんじゃねえぞ！』

こいつからも、エールを貰ってしまった。

もう、やるしかない。後には引けない。やってやるしかない。

「おう！」

面倒なことになった。

頼むから無事でいてくださいよ、紗希センパイー。

――あたしは走る。

廊下を走り。

階段を駆け上り。

教師にどなられながら。

生徒に、おかしい目で見つめられながら。

それでも、何も聞き入れず、まるで風になったかのように、自らを飛翔させ続ける。

屋上に、紗希センパイがいる。

屋上に、紗希センパイを虐げる人間がいる。

あたしは今まで、何度も彼女を救ってきた。助けてきた。

でも、それを紗希センパイが嫌がっているということも、わかっていて。

自己満足だ。

そんなものは、自分の勝手な思いに過ぎない。

「紗希センパイっ……！」

助けるということで、自己の愛を満たそうとしていた。

そんな薄っぺらい感情だから、しおりんに論破されてしまった。

救おうとしていた、紗希センパイ自身の言葉にも、揺るがされてしまった。

どうしようもなく、あたしは弱い人間だった。

「もう少しっ……！」

もうすぐ、屋上へと至るドアだ。

あの扉の先に、紗希センパイがいる。

「っ……！」

ナイフを持った女。

何が怖いのか。銃でもバズーカ砲でも、何でも持ってこい。

今のあたしには、怖いものなんて何もない。

あたしを支えてくれる、大勢の人たちがいるのだから。

「よし」

深呼吸して。

ドアノブに手をかける。

そして、ゆっくりとそれを回し。

力いっぱい、扉を開く。

「……」

まあ、いつものことだ。

目の前に展開されている光景は、今まで何度も見てきたもの。

「朱音……くん……?」

「紗希センパイ」

一人、二人、三人、四人……八人。

皆が皆、おとなしそうな、おしとやかそうな顔をしていらつしやる。

おとなしそうな顔をしているくせに、やることはえげつない。

それは、手に持った果物ナイフから感じ取れたことだった。

「何、してんだよ」

彼女たちは、紗希センパイを中心に、その周囲にぐるりと円を構成していた。

いやらしい、逃げられないようにしている。

精神的に、紗希センパイを追い詰めるためだろうか。

それなりに有名になってしまった、不良少年であるあたしの姿を見つけないじめっ子たちは、目配せをしながら、動揺の表情を浮かべたり、今度どうするかを相談しあっているように見えた。
情けない。

群れないと、何もできないのか。

「何してんだよって、聞いてるんだけど」

怒りに震えながらも、何とかトーンを押さえながら。

あたしは、奴らに尋ねる。

「何って、お前こそ何だよ」

こいつがボス猿か。

茶髪ロングの少女が、一人だけサークルから抜け出して、あたしの目の前に立つ。

身長はある。身体の作りも悪くない。あたしの女の子時代のスタイルそのまま、顔のレベルを落とした感じだ。自分で言うのもアレだけど。

「俺の先輩に、何してんだよって聞いてんだ」

「お話」

「お話かー」

お話なら、こんな不穏な空気は流れない。

騙されるバカもいないだろうが、あえてスルーしてやる。

「そうだよ。わかったら消えろよな」

「そうなんですか、紗希センパイ？」

あたしは、紗希センパイを見つめる。

怒りに震えて、笑顔がうまく作れたかわからないが。

「……」

彼女が、ふるふると首を横に振ったことだけは、確認できた。

「違うみたいです」

「てめえ」

「紗希センパイの服脱がして、何するつもりなんですか？」

どうして、あたしがここまで怒っているのか。

単に、周囲を取り囲んでいるだけなら、まだしも。

紗希センパイの上着は脱がされ下着姿にされ、真っ白で新雪のようで、幻想的な肌色が周囲に晒されていたのだ。上着はどこに行ったのか、見当もつかない。

スカートは大丈夫だ。どうも、上半身を晒させたかったらしい。

「関係ねえだろ」

「何するつもりなんだって聞いてんだよ」

手に持ったナイフを見つめながら、あたしは言葉を乱暴に叩きつ

ける。

「……お仕置きだよ」

すると、いじめっ子たちはビビっているのか、ボス猿すらも小さな声色で答えた。

「お仕置き？」

「ああ。こいつ、調子乗ってるからな」

「どこがどう、調子に乗ったんですか」

紗希センパイは、あるがままでいたただけだ。

何も、自らの容姿を鼻にかけることはしてなかったし、何もしてなかった。

それなのに、この言いぐさはなんだ。

「ちよっと外見がいいからって、チャホヤされてさあ」

「誰も、チャホヤなんかしてないでしょう」

「うっせーな」

指摘すると、ボス猿は口角を吊り上げて、嘲るように笑う。

「てかお前何？ いちいちうぜーんだけど。ほっとけよ」

「……」

「この化けもんの後輩なんて、よくやってられるな」

化けもん。

その言葉は、聞き捨てならなかった。

「あ？」

だからこそ、怒りを露わにして彼女たちを睨み付ける。

「こいつ、理事長からも嫌われてるんだろ？ そんなのと、よくつるめるよな？」

「何を根拠に、そんなことを言うんだよ」

「だって、副生徒総長も助けねえじゃん。嫌ってるからだろ？」

「それは」

事情がある。

特別な事情があるのに、こいつは。

何も知らないくせに。

「嫌ってないなら、普通は助けるっしょ。あたしら退学にして、追いつくことだってできるっしょ。それなのに、やらないってことは、嫌いなんだろう？ こいつのことが。出来損ないだから、見捨ててんだろ？」

出来損ない、と言われた瞬間。

紗希センパイが、視線を自らの靴へと落としていた。
くそが。

「ほら見ろ。何も反論できねえだろ。お前も、こんなセンパイに構ってないで、他のことやってるよ。めんどくせえだろ」

何だろう、うまく言葉にできない。

言いたいことは山ほどある。相手を罵倒するための言葉は、腐るほどある。

でも、怒りって通り越すと何も言えなくなるんだなあ。

「ほら、お前、迷惑かけてんだよ。な？」

「……」

「何とか言えよ……な！」

それを、あたしの敗北宣言と間違って受け取ったのか、いじめっ子連中は紗希センパイの頭を叩こうとしていた。

「っ……」

そして、紗希センパイが反射的に頭を庇おうとしたとき。

「その辺にしとけよ、先輩方」

やっと、頭の中で言葉の整理がついた。

何を言うべきか。何が言いたいのか。

その答えはあまりにも単純で、人が見ればあたしを非難するかもしれない。

それでも、外道相手にはこれでいいと思った。

「あ？」

「調子に乗ってっつと、ぶっ殺すぞ」

叩きつけるように、ゆっくりといじめっ子を見据えながら、あたしは言葉と紡ぐ。

「な、何だよお前」

明らかに動揺し、こちらを見つめる彼女たちに、

「センプイは、俺の女だ」

加えて、言い放つ。

「は？」

「朱音くん……？」

紗希センプイも、一緒になって動揺していた。

まさか、突然の転校生に、彼女扱いされるのだ。そりゃ動揺もするよ。

「何やるつもりかしんねーけど、何かやったらぶっ殺すぞ」

「はあ？ お前、この化け物と付き合ってるの？」

「今何だった」

「……」

茶化そうとするいじめっ子を、あたしは牽制しておく。

「今何だったんだって、聞いてんだよ。先輩さん」

「何が化け物なんだよ。少し人と違うだけじゃねえか。真っ白な肌だって、ワインみたいな目の色だって、何か問題があるのかよ。何にもねえだろ」

何にも、人と変わらないのだ。

ただ、見かけが違うだけ。

たった、それだけのことなのだ。

そんな些細な理由で、彼女を迫害する連中が許せなかった。

「……何だよ、お前」

「理解してもらえなくてもいい。でも、一つだけ覚えとけよ」

でも、それはあたしの考えだ。

絶対に、皆が皆、イエスと答えるものではない。

だからこそ、あたしはあたしの信じる道を進む。

「……」

「紗希センプイには、手を出すな。俺の女だ」

「もしも出したら、どうなるかわかってるだろうな。先輩だろうが、

女だろうが、俺は容赦しねえぞ」

「……わかった」

たとい、誰に嫌われようとも。

たとい、間違っていると言われようとも。

あたしは、ただ進み続けるだけだ。その先に、何があるのかは進まないといけない。

「なんで上から目線なんだよ」

「……わかりました」

「ああ。早く散れよ」

あー、スカっとした。

でも、あたしがスカっとするだけじゃ、ダメなんだ。

「……」

紗希センパイが、どう思ってるのか。

それだけが、ただ心配だった。

「ふうー……」

ひとまず事態が終わり、いじめっ子たちが退場してゆく後ろ姿を見送り。

とりあえず、紗希センパイの上着がどこにもなかったので、あたしは上着を脱ぎ、それをふあさっと、紗希センパイの肩にかけた。

「あの、朱音くん……」

「はい。助けにきました」

「あ、ありがとうございます」

戸惑いながらも、紗希センパイはそれを受け入れてくれた。

良かった。地面に投げつけられるんじゃないかって、ちよっと心配だったんだ。

「もう五月なのに、夕方はちよっと寒いですねえ」

まあ、上着脱いだからね。

Tシャツ着てるけど、ちよっと寒いよね。

「そう、ですね」

「大丈夫ですか。紗希センパイ」

「大丈夫……に見えますか？」

力なく笑う、紗希センパイ。

笑えるような状況じゃないだろうに、必死に笑おうとするこの人の姿勢に、あたしは思わず胸が痛くなってしまうた。

「見えません」

「です。どうなるのかなって、諦めてました」

「ナイフで、何をしようとしてたんですか」

髪の毛を切ろうとか、そんなしょうもないものだろうけど。思っていたら。

「肌を切って、血の色を見ようとしてたみたいです」

さらっと、言い放つ紗希センパイ。

えげつない。

あまりにも、人としてどうかしてる。

動揺して、うまく言葉にできない。

「……」

そんな、ありえない。

紗希センパイは人間だ。人間の血は赤いに決まってるじゃないか。緑とか黒だとか、そんなことを本気で思っているわけじゃないだろうけど、冗談にしても笑えない。笑えなさすぎる。

「言いませんからね。わたしは誰にも言えませんが」

そう語る彼女の紅い瞳には、涙が浮かんでいた。

何が原因で泣きそうになっているのか。理由はあまりにも思い浮かびすぎて、一つに特定することができない。

「紗希センパイ、辛いなら泣いてもいいんですよ」

でも、これだけは言える。

泣きたいなら、泣けばいい。

笑いたければ、笑えばいい。

「……」

そのために、あたしはいる。

その役割を担いたくて、あたしはここにいるのだ。

「胸、貸しますよ」

「ごめんなさい、朱音くん」

いつものような、余裕の色を見せず。

「いいえ」

紗希センパイは、すぐに小さな身体をあたしの胸に預けてきた。

顔は見えない。でも、身体だけは小刻みに震えていて、恐怖を感じていたのだろうと推察することは簡単だ。

「っ……怖かったよ……」

「大丈夫です。大丈夫ですから」

そんな彼女の髪の毛を、ゆっくりと撫でる。さらりとしていて、触ると瞬間にふわりとシャンプーの匂いが漂い、鼻孔をくすぐる。

「今は、思いっきり泣いてください」

やがて。

感情のダムは、小さく決壊し始める。

最初は微かだが、徐々に大きく。徐々に、幅を拡大し始める。

「……はい……」

こんな姿、初めて見た。

悲しみと、憎しみとの混ざり合った感情。

いや、それ以外にも混ざっているのかもしれないけど。

「どうして……私ばかりこんな目に……っ……」

その言葉を皮切りに、紗希センパイは嗚咽を上げて、悲しみの滴を流し続けた。

数秒ではなく、数十秒でもなく、数分間だったが、それ以上の時間にも感じられるほど、彼女の感情をむき出しにした泣き声は悲しくて、切なくて。

同情の言葉をかける？ そんな選択肢は、あたしにはなかったし、紗希センパイはそんなことを望んでいないと思う。

だからあたしはただ、抱きしめた紗希センパイの頭を子供のよう

に、撫で続けることしか出来なかった。

一生分は泣いたんじゃないか、というくらい泣きはらしたあと、あたしの胸からゆっくりと離れてゆき、そして。

笑顔を浮かべて、紗希センパイはあたしを見つめながら。

「ん。もう、大丈夫です」

と、笑った。

その気持ちに、多分嘘はないだろう。

「そういえば、しおりんと仲直りしました」

「そうですか。それは良かったです」

すると、紗希センパイはもっと笑った。

やっぱり、妹が大事なのだ。どんな時でも。

「紗希センパイ」

「はい？」

「肌、綺麗ですよね」

そういえば、紗希センパイの上半身の肌を、まともに見たのは初めてだった。

腕と同じように真っ白で、透き通るような幻想的な色をしていて、宝石みたいに綺麗だったなあ。

「触ってみますか？」

「え、いいんですか？」

ちよっと、それは、触ってみたいぞ。

すべすべしてるんだろうなあ。

腕は触ったことあるんだけど。

でも。

「うそです」

ぺろ、と小さく舌を出して、悪戯っぽく笑う。

冗談か。あーあ。

「何だ……」

「そんなこと言ってくれたの、朱音くんが二人目です」

「はは……」

二人目。多分、一人目はあたしだけだね。てへ。

「でも、朱音くん」

「はい」

「俺の女ってどういうことなんですか？ わたし、いつの間に朱音くんの彼女さんになってしまったんでしょうか」

「えーと、その、あのですね」

どう説明しようかなあ。

紗希センパイは、変な理由とか、筋の通らない話じゃ絶対に納得しないし。

正直に話すしかないか。

「はい」

「気分を害されてしまったのなら、申し訳ないんですけど」

「いいえ、害してはいませんが」

何だか安心してしまった。

でも、まだまだ安心はできない。

「こうするのが、良いんじゃないかなって、しおりんと決めたんです」

「汐里と？」

「はい。俺と付き合ってることにすれば、誰も迂闊に手が出せないです」

あたしは、この学校では何かもう有名人になってしまっている。

有名人の彼女ともなれば、早々手出しはできない。

それに、学校の外にも仲間がいる。彼らが守ってくれる限り、紗希センパイは学校の外では安全だ。

それでも、手出しをする人間がいれば、しおりんが退治する。

この三重の構えで臨むつもりだった。

疑似カップル化案は、まあ、半分以上あたしの意向。訂正、四分の三くらい。割と自己満足も入ってるけど、これくらいはいいよね。

「そう、なんですか？ でも」

「しおりんが出したアイデアです」

「あの子は、どうして」

不思議そうに、紗希センパイは首を傾げる。

今まで、従順にお願いを聞いてくれたしおりんが、突如として、紗希センパイとの約束を破り、紗希センパイを助ける側についた。それが、不思議でしようがないのだろう。

「紗希センパイのお願いを破るほうが、紗希センパイ自身のためになると、気づいたんですよ、しおりんは」

「……」

他人から見れば、笑われるかもしれない。

他人と比べて、不器用と言われるかもしれない。

それでも、しおりんは必死だった。姉の頼みを聞き入れ、自らの思いを殺し、ただただ日々を生きてきた。

「わけのわからない関係はやめましょうよ。姉妹じゃないですか。」

先輩後輩じゃないですか。もっと、頼ってください。紗希センパイ」

「でも……」

「信じられないですか」

「……すみません」

無理もないか。

彼女の身体に染み付いた不信は、言葉なんかじゃ説得して拭いきれない。やっぱり、実際にあたしたちが動いてる、というところを見せないとだめか。

でも、ちゃんと手は打ってある。

「まあ、そろそろですよ」

「……何がです？」

「楽しみにしててください」

「……？」

あたしの意味のわからない自信に、紗希センパイは首を傾げていた。

一体、こいつは何をするつもりなのか。

そんな感じの視線で、こちらを見つめていた。
その時。

『校内に残っているみなさん、こんにちは。生徒総会からの連絡事項を、取り急ぎお知らせいたします』

校内放送が、放課後の学校に流れる。生徒総会放送、つまり全体放送だ。

「生徒総会？」

「はい。しおりんが、必死に走り回ったんです」

しおりんは、あたしと別れてからずっと、理事長。つまり、彼女たちの父親と話をしていた。かなり困難な交渉になると予想していたが、この放送が流れたということは、しおりんの交渉は成功に終わったのだ。

『北宮学院生徒総会は、北宮学院理事長の承認を経て、高校二年三組、出席番号十二番、黒崎紗希を、副生徒総長として任ずることになりました』

「え……？」

生徒総会の決定を、最終的に学校としての決定に変化させるのは、理事長の仕事だ。

理事長の許可さえ下りれば、副生徒総長の発議は生徒総会をほとんどの場合通過する。

紗希センパイを、副生徒総長にすることだって可能だ。何だって可能だ。

それが、この学校における黒崎家の力なのだから。

『現副生徒総長、黒崎汐里と共に生徒総会の運営を行ってゆきますので、生徒諸君についてはこれまで通りの、手厚い支援をお願いしますと思います。以上、生徒総会からでした』

そして、放送部による生徒総会連絡は終わった。

大半の人間は、こんな放送を気にしていない。

黒崎の人間が副生徒総長になった。何もおかしいことじゃないか

らだ。

でも、当の黒崎本家の長女は、困惑の視線を浮かべて、メガネ越しに輝くワインレッドの瞳をくりくりと動かしていた。

「どういうことですか……？」

「これで、関係は対等ですね」

「どうして、わたしが副総長に？」

おずおずと尋ねる紗希センパイ。

一度は拒絶され、決して就くことはなかったであろう、副生徒総長の座。将来の黒崎家を運営するための、学びの場。そこに何故か、自分がいる。疑問に思うのも、おかしいことではない。

「こうすれば、紗希センパイは出来損ないじゃなくなりますよ。そんなこと、誰も口が裂けても言えなくなります」

「でも」

「紗希センパイは優秀なんです。生徒総会で、活躍してください」

紗希センパイは、非公式にしおりんを手伝っている。しおりんは何度も窮地に追い込まれたが、その度に紗希センパイがアイデアを提供して、困難を乗り越えてきた。

それならば、生徒総会に入っても、絶対に活躍できる。

むしろ、出来ないという理由がない。

「でも、わたしはできそこ……」

しかし、紗希センパイは視線を落として、再び自らを貶め始めた。まあ、予想していた。

でも。

「じゃあ出来損ないだって、証明してくださいよ」

アプローチを変える。

「え……」

すると、紗希センパイは、顔を上げて、あたしの瞳をじい見つめる。

よし、いけそうだ。

「いつも、自分のことを出来損ないとか言いますが、俺はあなた

が出来損ないだってところ、見たことないですよ」

「……」

これは、心からの思いだ。

女の子だったときから、ずっと思っていた。

容姿端麗、才色兼備、才気煥発。黒崎家のお爺様がどう思っているのかはどうでもいいが、この学校にいる人間で紗希センパイを知っている者の中に、彼女が出来損ない呼ばわりする者はいない。もちろん、気に食わないから貶している人間はいるが。

「だから生徒総会で、散々クソな仕事やってくれたら、紗希センパイが出来損ないだって、認めてあげますよ。ボロクソに貶してあげますよ。この出来損ないがって」

「でも、それだと黒崎の名前に泥が」

「泥を塗らないのなら、紗希センパイは優秀なんですよ。出来損ないなんかじゃない」

「……朱音くん」

正直、屁理屈のようなものだ。

論理としては、紗希センパイを無理やり動かすもので、最低の作戦だ。

それでも、これくらいはやらないと、紗希センパイの意識は変えられない。

「あなたは、出来損ないなんかじゃない。可愛くて賢い、女の子です。黒崎のお爺様がなんですか。打ち勝ってくださいよ。それができる人ですよ、あなたは」

「そんな……わたしは……」

「そんなに、自分を卑下しないでください」

紗希センパイは。

可愛くて、賢くて、頭もよくて、優しくて、人思いで、世の中を恨んでも妹のことを恨まず思って、自分のことよりも他人のことを優先する人で、あたしがずっと憧れて。恋焦がれてきた人だ。

「……そんな、優秀なんて言われる価値もないですよ……」

「どうして、そこまで言うんですか」

だからこそ、あたしは反発する。

彼女が自らを貶めようとすれば、そうじゃないと否定する。

だって、それがあたしの隠せない思いで、本当の気持ちだから。

「わたしは、大切な人を失ったんです」

大切な人。

彼女が、物憂げな表情で語る大切な人。

紗希センパイに手を差し伸べて、それゆえに去っていった少女。

「……」

「何も求めなければ、その人は失われなかったんです。朱音ちゃん
は、汐里と仲良くここで暮らせたんです」

「……そんなこと、ないですよ、多分」

だって、それはあたしだから。

でも、まだそれを明かすことはできない。

ウソを明かすことで、紗希センパイに嫌われたくない。身勝手だ
けど。

「そう……ですかね」

「その人だって、絶対に紗希センパイを嫌って、離れたわけじゃな
いですよ。だって、紗希センパイは優しいし、楽しい人ですし」

「……」

「何かあったんですよ、きっと。紗希センパイのせいじゃないです」
絶対に違う。

だって本当は、離れていないんだから。

紗希センパイが大切に思ってくれる、『朱音ちゃん』は、『朱音
くん』となって、今ここにいるのだから。

「どうして、そんなことがわかるんですか」

「その人、紗希センパイと喧嘩別れしたわけじゃないんでしょう？」

「そう、ですけど」

「なら、いつか戻ってきますよ。それで、説明してくれますよ」

本当は、戻れないかもしれない。

本当は、二度と説明できないかもしれない。
もう、女の子には戻れないのかもしれない。
それでも。

「……」

いつか、機会が来たら。

いつか、話すときが来たら。

あたしは、自分の存在を明かす。

そして、想いを直接伝えたい。

「だから、信じてあげてください」

「……そう、なんですかね」

「ええ、きつと」

きつと、直接伝えたい。

しおりんを通してじゃなくて、自分から。

やがて、紗希センパイはゆっくりと唇を動かし。

「……朱音ちゃん、待ってるから」

あたしに背を向け、夕陽の彼方を見つめて一人、透き通る声で
呟く紗希センパイ。

紡がれた言葉は、ひんやりと冷たい夕空の下でゆっくりと広がっ
てゆく。

「……」

その背中と様子を、あたしはじいと思つめ続けていた――。

――何分が経っただろうか。紗希センパイはやがて、こちらに振
り返り、そしてやんわりとはにかんだ。あたしも落ち着き、状況を
客観的に見つめられるようになった。

だからちよつと、言いたいことがあるんだけどなあ。言いつらい
んだけど。

「ありがとう、朱音くん」

「いえいえ」

「わたし、今不思議な気持ちです」

余計に言いづらくなってしまった。

真面目な話の最中だけど、やっぱり気になってしまう。

「どういうことですか？」

「こんなに、温かい気持ちになったのは、久しぶりです」

「……それは、良かったじゃないですか」

「はい。本当に」

ほんわりと笑いを携える紗希センパイ。

ああ、やっぱり言ってしまうおう。やっぱり隠せない。

「で、あのー、えっとですね」

「はい」

「えっと、ブラがですね、見えてるんです。ここからだ」と

くだらないことだと笑うかもしれない。

それでも、あたしの着ていた大きめのだぶだぶなシャツを身に纏い、はだけた衣服の前部分からちらりと見える白い肌、そして下着というのは非常に扇情的であって。

どうも、視線がさっきからちらちらと、そちらに移ってしまうのだ。

さっきは集中していたし、熱中していたから気づかなかったけど、気づいてしまった今は、どうしようもなくなってしまった。

「ふふ。可愛いですね、朱音くん」

そんな様子を、くすりと笑って紗希センパイは見つめていた。

「純粹なんです。俺」

どんな顔をすればいいんだろうなあ。

胸なんて、自分のものを見飽きていたから何とも思わないけど。紗希センパイのものとなると、話は別だ。

「胸、触ってみますか？」

ちよっとちよっと、どういうことですか。

「えっ？」

「どうせ、冗談とか言うんでしょ？ わかってますよ」
たちの悪い冗談だなあ、ハハハ。

「……いいえ？」

「えっ」

思わず、声をあげてしまった。

どういことですか？ どういことなんですか？

「助けてくれた、……お礼です」

「え、えっと、え？」

何か、少女マンガにこんな展開あったような。

とんでもないシチュエーションだなあ、ハハハと笑っていたのに、まさか自分にそのシチュエーションが降りかかってくるなんて。

いざ、そんなチャンスがやってくると、頭がパニックに陥り、どうしたらいいのかわからなくなる。えっと、本当にどうしたらいいんだろう。

「……嫌なら、いいですよ？」

「じゃあ、いただきます！」

「だーめ。時間切れ、です」

すると、くすりと紗希センパイは笑った。

「あー！ また弄ばれたー！」

そういうことか。

紗希センパイは、茶目っ気のある人だ。

最初から、からかうつもりで言ったのだ。

あー、そこを読み取れなかったのが辛い。本気にして、どきどきしてしまったのが何だか勿体ない。

「可愛いですね、朱音くん」

そう言いながら、紗希センパイはシャツのボタンを留めはじめた。彼女もあたしと同じで、話に集中していたのだ。そんなことを気にする余裕はなかった。

「……むう、面白くないですよ、そういうの」

「でも、わたしはあなたの彼女さんですから」

「へ？」

「疑似的に、付き合ってくれるのでしょうか？」

「そ、それはそうですけど。いいんですか？　好きな人、いるんじゃない？」

何か、聞いてしまった。勢いで。

紗希センパイの好きな人。一体誰なんだろうなあ。

誰であっても、絶対に紗希センパイは譲らないけど。負ける気はないけど。

「あの子は勝手にどこかに行ったんです。仕返し、です」
え？

勝手にどっかにいった？

好きな人が、勝手にどっかいった？

「その、まさかなんですけど」

「はい」

「紗希センパイが好きなのって、その転校していったっていう……」
もしかして。

え、もしかして？

「女の子、ですか？」

尋ねてみると、紗希センパイは。

「ち、ちがいますよっ！　そんなわけないじゃないですかっ！」

雪のように真っ白な耳たぶを赤くして、声を甲高く上ずらせて。
あからさまに視線を左右に動かして、動揺を表現して。

両手をぶんぶんとして左右に振り、必死に否定をして。

「で、ですよー」

「は、はい。違いますよっ！　汐里には絶対に言わないでください
ね！」

あー。

これは、あれだ。

好きなんだ。露骨すぎる。

「は、はあ……」

でも、やばい。

やばすぎるぞ。

転校していった、あたし（女の子）に。

紗希センパイは、恋してた。

考えられないなあ。どういふことなんだろうなあ。

でも、一つだけ言えることがある。

最悪だー！ 最悪すぎるー！

最終話後編 『だから、あたしは』 (後書き)

本編は、これで終わりです。

次はエピローグになります。

あと少し、どうかおつきあいくださいませ。

エピローグ 『おとこのおんなのい』

——事件も片付き、翌朝のこと。

家のリビングで、あたしは父さんと母さんに事の顛末を、言うべきじゃないところは隠し、でも言うべきところはしっかりと暴露していた。

「あっはっは！ そりゃ、困ったわね！」
すると、けらけらと笑う母さん。

「困ったじゃないよ、やばいんだよ」

「男になる前に、告白しておけば良かったのにね！」

「ホントだよ、もう……」

何と言うか、あたしは紗希センパイは女の子好きじゃないと思っていた。

でも、実際は違ったんだなあ。もっと押しておけば良かったなあ。

「まあ、ペースがあるんだよ。それぞれにね」

「父さん……」

そうか、ペースがあるよね。

あたしは、あたしのペースでいけばいいんだよね。

「朱音、お父さんは何も考えてないだけよ」

「酷いなあ、母さん」

「本当のことでしょう？」

「まあ、そうなんだけどね」

「父さん……」

それでいいのか、父さん。

「でも、一度は好きになってもらえたんだ。きっと、希望はあるさ」
「そうかなあ。好きになってもらえたのは、女の子のあたしなんだけど」

何を好きになったのかはわからない。

何だろう、あたし（女の子）の何を好きになってくれたんだろう？

「その、なんだっけ。恋人ごっこ？」

「うん」

「そこで、挽回していくしかないわね」

「なんか、不思議な感じ」

「セルフ略奪愛ね」

「無茶苦茶だー」

セルフ略奪愛。

セルフサービスみたいな表現はやめてほしい。

「でも、一步前進でしょ。頑張りなさい」

「うん……」

あたし（女の子）を好きになっている人に、あたし（男の子）を好きになってもらうように仕組む。さて、どうしたらいいんだろうな。バラせば一瞬だけど、信頼とかそこらへんがあるし。ううん。

「でも、面白いわねえ」

「面白くなーい！」

何だか、とても大変なように思う。

というか、かなり難易度高いんじゃないか？

大変だなあ。はあ。

その時。

ぴんぽーん、と家のインターホンが鳴らされる。

「行ってらっしゃい。汐里ちゃんね」

「行ってらっしゃい、朱音」

「行ってきます！」

まあ、深く考えていても仕方ない。

今は、今の生活を過ごしていくしかないのだから。

あたしは、父さんと母さんに手を振り、学校鞆をさっと掴み、ぱつとりビングを飛び出してゆく。

玄関のドアを開け、家の外に立つ。するとそこには、いつも通り

に機嫌がよさそうでも悪そうでもない、しおりんの姿があった。あ、車がある。今日は珍しく車でここまで来たんだなあ。

「おはようございます」

「おはよ、しおりん」

手を上げ、さっと挨拶を交わす。

「おはよう、朱音くん」と。

「へ？」

ん？

何か、おかしいような。

「紗希ねえ、ついてくると言っただけで聞きましたの」

「へ？　そ、そうなんだ」

きらりと輝く笑みを浮かべた紗希センパイを見つめ、あたしの心臓はバクバクとハイテンポにビートを刻み始める。てか、何でいるのこの人！　いや、朝から会えて嬉しいんだけどさあ！

「こういうの、懂れてたんです」

「そ、そうですか」

「ね、ねえ、しおりん。家の場所バレたじゃん」

「何か問題でも？」

こっそりとしおりんに耳打ちすると、平然とした顔で言われてしまった。

「大丈夫なのかな？　あの、女の子と同一人物だって知られたら……」

「大丈夫でしょう」

「そうかな……」

きっぱりと、言われてしまった。

うーん。それなら大丈夫なのかな。うん、多分大丈夫なんだろう。こっそりと、二人で話していると、

「何の話をしてるんですか？」

紗希センパイが、割り込んできた。

やばい。

「いえ、何でもないです!」

必死にごまかすが、

「? そうなんですか?」

何だか、納得がいてない感じだった。

「そうですわ。紗希ねえ」

「うーん、何か隠されてるような……」

「行きましよう。紗希ねえ。今日の生徒総会は朝会議ですわ」

「うん。わかった」

紗希センパイは、副生徒総長として、生徒総会の一員になった。責任ある立場になったことで、これから辣腕をふるうことが期待できる。本当にあたしは彼女の働きを楽しみにしている。だって、紗希センパイは凄いいんだもん。

「車で行くんだね、今日は」

「そうですわね。今日だけですわ。紗希ねえの、初参加日ですし」

「そうなんだ」

家の前に停めてある黒塗り高級車を見つめながら、あたしはこくりと頷く。

「何をすればいいのか、よくわからないんですけどね」

「紗希センパイなら、大丈夫ですよ」

「そう言ってくれると、嬉しいです」

「ああ……紗希センパイ可愛いなあ……」

思わず、呟いてしまった。

「声に出てますわ」

「はっ!」

呆れたように、しおりんの声が紡がれ。

「? どうしました?」

「何でもないです!」

きょとん、と目を丸くして尋ねる紗希センパイ。

つつい失言してしまった。思わず、想いを吐露してしまった。

「……はあ。さて、行きましょう」

ため息をつかれちゃった。

しおりん、あたしを見捨てないで、お願い。

移動の車内。

一番左はしおりん、真ん中はあたし。右は紗希センパイ。黒崎姉妹にサンドイッチにされる感じた。黒崎姉妹分を補給。これで朝から頑張っていける。

「でも、良かったですわね。丸く収まって」

「そうだねえ」

「まさか、わたしに彼氏さんが出来るとは思いませんでした」

「そ、そうですか」

「そうですわね……初めてですわ」

まあ、ニセ彼氏ですけどね。

これから、本物になりたいなあとは思っただけど。

「汐里、羨ましい？」

「ええ。とっても」

「そっかー」

「俺を巡って争わないで二人とも」

「争ってません。ヘラヘラしないでくださいまし」

「いたっ！ 太ももつねらないでくれよ！」

冗談なのにい。

本気にしないでほしいなあ。

と、まあ。

時間は過ぎ去ってゆき。

放課後。英語研究会の部室。

「今度、デート行きませんか、紗希センパイ」

「でーと？」

いつも通りの雑談だ。他愛のない会話だ。

「はい。何か今度の日曜日は、恋人同士だと映画が安いんですよ」別に、本当のカップルじゃなくともおつけーだ。

カップルに見えれば、カップル料金が適応される。便利なのだ。

「でも、いいんですか？」

「見たい映画がないなら、いいんですけど」

でも、紗希センパイと映画行きたいなあ。

首を横に振るかと思ったが、違った。

「ぜひ行きたいです」

「じゃあ、行きましょう」

良かったー。

誘って良かったー。まさか、紗希センパイと二人で映画に行ける日が来るなんて。二人で行動してたのなんて、本当にたまにゲーセんで遊んでたくらいだし。

ほわほわと、感動に浸っていると、彼女は何だか頬を赤らめて俯いていた。

何がそこまで恥ずかしいんだろう、と尋ねようとした。

その時。

「でもその……カップルの証明って、どうすればいいんですか？」

顔を上げ、あたしを見据えたその瞳。

冗談で言ってるつもりじゃない。本気だ。紗希センパイは本気でわかっていないようだった。でも無理もないか。恋人同士で映画なんて、見たことないだろうし。ないよね。うん。

「へ？ えと、まあ」

「そ、その、チケット売り場の人の前で、き、キスとかですか？」

思わず、吹き出してしまいそうになった。

どこをどう解釈すれば、見ず知らずの他人の前でキスをすることになるのか。そんなことになったら、見物料を取ってやる。逆に。

「ち、違いますって！ 言えはいいだけですよ！」

「そ、そうですか。安心しました」

「そうですよ、そうですよ」

でも本当に紗希センパイは可愛いなあ。

微かに赤らめた頬はさくらんぼのように、朱く染まっていた。

「……でも、何だか楽しいです」

ぽつりと紡がれるその言葉。

軽い言葉のようで、含まれた意味は相当に重い。

「そうですか？」

「はい。今までは、学校が苦痛でした。でも、今は色んな人が話しかけてくれますし、楽しくやれてます」

「それは良かったです」

思惑通り。

今の時代、肌の色なんて誰も気にしない。いじめっこだって、肌の色でいじめてたというよりも、紗希センパイの容姿に嫉妬していたのだろうし。

でも、そうなるとう度は、紗希センパイに悪い虫が寄ってくるなあ。

まあ、何とかするか。

「生徒総会も、うまく行ってますし」

「らしいですね。このままいけば、次の当主になれるんじゃないですか？」

ぽつりと小耳に挟んだところによると、紗希センパイは早速、学校の問題点を指摘し、改善に乗り出しているのだという。

今まで、心の中に溜めてきた思いを、一気に副生徒総長として発露したのだろう。

だから、このままいけば、紗希センパイは優秀な副生徒総長として、卒業してゆくことになる。その先の道は、黒崎家当主の座。

「いえ、わたしはいいんです。まだお爺様たちには嫌われていますし」

でも、悲しく微笑んだ紗希センパイは、その道が閉ざされていることをあたしに、暗に示唆していた。

「仕事が出来ても、やっぱりダメなんですか」

「みたいです。あの人たちから見たら、やっぱり出来損ないなんでしょうね」

「……」

どうしようもないのか。

まだ、足りないのか。

悔しさで、胸の中にもやもやが起こる。
しかし。

「でも、わたしは満足しています。あの人たちが、わたしを出来損ないだって言っても、何とも思いません」

透き通った声で、あたしをなだめるように、紗希センパイは言葉を紡ぎだした。

満足、本当に心から満たされているような声色だった。

「そう、なんですか？」

「はい。あなたや、汐里が認めてくれるから。それだけでいいです。それ以上は望みません」

「……」

きゅん、としてしまった。

「朱音くんのお蔭です。本当に、ありがとう」

「……いえいえ。俺だけのもんじゃないですよ」

「あなたはわたしに、本当に大切なものを、教えてくれました。本当に感謝してます」

そう言うと、彼女はゆっくりと口角を上げて、慈愛に満ちた天使のように。

いや、包容力に満ち溢れた女神のように。

真っ白な肌を、僅かな朱色に染めて。

やんわりと、微笑んだ。

「だから、これからよろしくです。朱音くん」

だめだ。

この笑みに、あたしはやられたんだ。

メガネ越しに移る、きらりと輝くレッドワインの瞳。微かにゴールドがかった白髪。絹のように柔らかな肌が奏でる笑みは、世界一の光を放っている。

やっぱり、あたしは紗希センパイが好きだ。

好きで好きで、どうしようもなく、好きなんだ。

高まる胸の鼓動を感じながら、あたしは彼女の目を見つめていた――。

――そして、日々は流れてゆく。

あたしはたまに、約束通りヤンキーのボスとして喧嘩に参加していた。まあ、武器を使う卑怯な男もいたが、基本的には圧勝だった。危険っぽい時は、しおりんに頼んで、裏で調整してもらっているので、危ないことはない。こういう時、黒崎家って、本当に凄いだなあと思う。

結局は、子供の遊びなのだ。子供の遊びを、大人が裏で監督する。その程度のもので、それで紗希センパイを守ってもらえるなら、悪い取引じゃない。

ただ、時間を問わずに呼び出されるのが、面倒だけだね。

で、日曜日。北宮駅改札。

待ちに待った、紗希センパイとのデートの日。

以前は、あまり出かけることもなかったし、こんなことをするのは実は初めてだったりする。紗希センパイが案外乗り気で良かった。

「ふう……緊張するなあ……」

約束の時刻は、朝九時。

現在の時刻は、朝七時半。

集合場所に指定した、この北宮駅改札にはまだ人が少ない。
まだまだ紗希センパイは来ないだろうが、ついつい先に来てしまった。

かなり先に来てしまった。

「あれ？ 朱音くん？」

と思っていたのだが。

「え？」

約束の一時間半前に。

「もう、来てたんですね」

紗希センパイも、やってきた。

「早いですね、紗希センパイ」

「えへへ。嬉しくて、つい」

「……！」

いまどきの服装に身をやつした紗希センパイは、いつも以上に輝いて見えた。

なんだこの生き物。あたしの嫁にしたい。

「可愛いですね、その服」

「朱音くんも、格好いいですよ」

「そうですか？」

「はい」

いいなあ、こんなやり取り。ふわふわするなあ。

これからのデート、楽しい時間になりそうだ。

なりそうなのだけでも。

邪魔が。

邪魔が入った！

「じゃ、じゃあ行きましようか……って、何だろ、電話です。すみません」

何だ、もう。

ポケットの中へと乱暴に手をつっ込み、携帯電話を取り出す。通話を開始する前に、紗希センパイを一瞥すると、

「どうぞ、出てください」

くすりと笑みを浮かべたので、あたしはこくりと頷いて通話を開始した。

電話主は、あいつだ。ヤンキー野郎。

「もしもし？」

『青木か？』

「ごめん、切る」

こんな時にかけてくるなよなあ。

正直、悪態をつきたい気分だったのだけれども、必死に堪えた。

『おいおい待ってくれ、話がある』

「俺、今デート中なんだけど」

『少しだけ身体貸してくれ、面倒なことになった。一発ぶん殴ってくれ』

面倒なことになった。

つまり、あたしの出番というわけだ。

こいつらには、紗希センパイを学校外で守ってもらう、という約束をしているので、それ相応の仕事を、あたしもしなきゃならない。そこは筋を通さないと。

「……すぐ終わるか？」

『ああ、終わる』

「じゃあ、行く」

すぐに終わらせて、すぐに紗希センパイの所に戻る。

それでいいこう。あたしはすかさずシミュレートを終え、返事をした。

『頼んだ。場所は西北宮高校だ』

「ああ」

通話を終え、携帯をポケットに突っ込む。

まあ、場所はそこまで遠いわけでもない。

全行程合わせて、一時間くらいでケリがつくんじゃないだろうか。

「すみません、紗希センパイ」

「はい？」

「少し、呼ばれてしまいました」

「……ケンカ、行くんですか？」

紗希センパイは、あたしがヤンキーのボスをやっていることを知っている。

でも、あたしは彼女を心配させたり、余計な思いをさせないために、『紗希センパイを守るためにヤンキーのボスをやっている』とは、一度も言っていない。

まあ、紗希センパイから見れば嫌かもしれないなあ。

ヤンキーが同じ部活にいるなんて、拒絶反応を示すかもしれない。

「すみません……すぐ終わりますから」

「じゃあ、わたしも一緒に行きます」

「え？　だめですよ、危ないです」

あんなケンカの場所に、紗希センパイを連れていくことはできない。

何があるかもわからないし、何かされるかもしれない。
でも。

「朱音くんがいるなら、大丈夫です。それに、邪魔もしません。男の子ですから、喧嘩くらいしますよ。いじめは、ダメですけどね」

「……えーつと」

そんなことを言われたら、拒絶できないじゃないか。

「それに、黒崎の監視もついていますから。大丈夫です」

ああ、安心だ。

副生徒総長に就任して以降、紗希センパイは黒崎家の庇護を受けているみたいだ。

出来損ないと言っていながら、割と黒崎家は彼女に期待してるんだなあ。

「それよりも、この初デートを楽しみたいです。一緒に歩きたい

んです。初めての、経験ですから」

もう、拒絶することはできない。

そんなことを言われたら、あたしは乗り気になるしかない。

だって、初デートを楽しみたいとか言われたら、もう彼女の言うとおりにするしかないじゃないか。うん。そうだ。その通りだ。

「そう、ですね!」

「いつか、本当の恋人が出来たときのために、予習です」

「……うう」

少し気分が盛り下がった。

でも、まあ。

「行きましょう、朱音くん!」

「は、はい!」

そんな日々も、悪くない。

手を引かれながら、あたしは二人で紗希センパイと一緒に、道を歩き始める。

――さて。

とりあえず、あたしの物語はここで終わり。あたしが見せる物語は、とりあえずここで終わりだ。あたしが女の子に戻れるのかどうかは、あたししかわからない。

もしかすると、あなたも男の子か、女の子になってしまいかもしれない。

その時に備えて、色々と考えていると便利だよ! センパイからの忠告だ!

でも、『おんなのおとこのこ』の生活も、案外悪くないよ?

(終わり)

エピローグ 『おとこのおんなのこ』 (後書き)

以上でいったん、終わります。

よろしければ、感想異論批判などお寄せください。
楽しめていただけたのなら、幸いであります。

インターミッション 『イミテーション・アイドル』（前書き）

第2部をちょこちょこやっていこうと思います。

新作ばかりを書いても仕方ないので、この作品を掘り下げていきます。

本当の自分とは何なのか。はたして、それは簡単に見つかるものなのか。それを探る人々の物語になります。

男の子になってしまった、女の子。

朱音もまた、一つの苦悩の中に叩き落とされます。

さて、どうなってしまうのでしょうか。

どうか、おつきあいください。それでは、始まります。

インターミッション 『イミテーション・アイドル』

ステージから見る光景は、夜空に浮かぶ星空のように綺麗。
自分のためだけに振られるライト、自分のためだけに挙げられる
歓声。

それでも、本当にそれが自分に向けられているのか。

「みんなー、ありがとー！」

頭に浮かぶ疑念を振り切るために可愛く声を張り上げれば、

「うおおおおおお！」

と、歓声が返ってくる。

だからアイドルはやめられない。

でも、この観客の人たちは何も知らない。

「じゃあ次の曲、いっくよー！」

本当の自分なんて、この人たちにはわからない。

アイドルは英語で、『偶像』という意味を持つ。

自分が演じているこのアイドルという姿は、まさしく偶像そのものだ。

真実を誰にも明かすことなく、秘密を抱えて毎日を生きていく。

でも、それでいいのかな。

「りんりんの曲、聞いてくださーい！」

ううん、気にしないでおこう。

今は、この仕事に集中しないと。

「うおおおおおお！」

大歓声をその身に浴びながら、笑顔を振りまき、声を張り上げる。

辛いことも、悲しいことも。

楽しいことも、嬉しいことも。
全てを忘れ隠し、今は『偶像』となろうじゃないか。
それが、自分の仕事なんだから。

プロローグ 『アイドルが好きなんですか?』

あの事件からも数日。あたしが女の子とはバレずに、再び平和な日々がやってきた。紗希センパイに対するいじめは止んだし、友達もできたみたい。良かった良かった。

といっても、あたしの恋路が進んだわけじゃないし、むしろ大きな後退だった。まさか、紗希センパイがあたしのことを好きだったなんて。

正確には、あたし（女）だけど。あたし（男）じゃないんだよね。まぎらわしいなあ、もう！

そんな中、放課後。

あたしと紗希センパイは英研の部室で、巨大なテレビを眺めながら話す。

「朱音くん」

「はい？」

画面に映っているのは、金髪を優雅に振りながら可愛らしいダンスを踊る、一人のアイドル。国民的アイドルだのなんだの言われて、今やテレビで引っ張りだこの女の子だ。

「朱音くんは、アイドルが好きなんですか？」

「アイドルですか？」

「はい。何だか、食い入るように見てた気がします」

唐突すぎるなあ。紗希センパイ。

そんなに食い入るように見てたのかなあ、あたし。可愛いなあとは思ってたけど。

「いやあ、そんな興味があるわけじゃないんですけど。可愛いですよね」

「むう。面白くないです」

「ええー！」

「……」

この子と紗希センパイ、どっちが可愛いと言われてたら、あたしは間違いないく紗希センパイを選ぶ。恋は盲目、本当のところはどうかわかんないけど、あたしは可愛いと思ってます。

「でもあれですよ、紗希センパイ。この子最近有名なんですよ」

「そうなんですか？」

「知らないんですか？」

「すみません。世相に疎いもので」

そうだろうなあ。携帯もうまく使えてないし。

「少しは流行に乗らないと。えーっと、名前は忘れちゃったけど、りんりんです」

「ベル？」

「ベルじゃないです。何とかリンで、りんりんって呼ばれてます」

「そうなんですか。中国の方ですか？」

「多分違うと思います」

安直すぎる、紗希センパイ。パンダじゃないんだから。

「そうですか……。何だか、ぼわぼわしてますね」

「はい。えーっと、天然系守ってあげたくなるアイドルらしいです」
りんりんは、何というか天然系というかキャラを作っているというか、ステージ上でも結構転んだりする。それがまた可愛いらしく、ファンを量産し続けている。

その動作にわざとらしさというか、イヤミったらしさが無いから、女性ファンも増えるんだよねえ。あたしもだけど。あたしもなのかな？

「天然系？」

「まあ、紗希センパイみたいな人ってことです」

「わたし、天然なんですか？」

「そうじゃないですかね、多分」

「そうなんですか」

紗希センパイは天然系というよりも、守ってあげたくなる系女子

だけど。あんまり深いことは気にしないでおう。

それよりも、聞きたいことがある。

「そういえば紗希センパイ、なんで部室にテレビが？」

「ふふ。暇つぶしです」

「よく部費の申請通りましたね、これ」

「副生徒総長ですから」

「悪女だなあ」

あの事件以降、紗希センパイは副生徒総長として仕事を行っている。その運営は順調であり、難しい案件の処理もしているらしい。凄いね、やっぱり。

「そんな風に見えますか？」

「はい」

「即答しないでください。冗談です」

ぷくつと頬を膨らませて、怒りを表現する紗希センパイ。可愛い。

「あ、そうなんですか」

「はい。お小遣いで買いました」

「このテレビ、結構デカいですけどね……」

お小遣いかあ。あたしのお小遣いじゃ、こんなの買えないけどなあ。

一番ちっちゃいのも無理だけどなあ。

「お金持ち、ですから」

「やだなあ紗希センパイ、金銭感覚が俺と全然違いますね」

「一生に数回の贅沢ですから」

「はは……」

そんなものなのかな。お金持ちってわかんないや。

紗希センパイと別れて、あたしは教室へと向かう。

その途中で仕事を終えたのだろうか、しおりんと出会った。そして、ゆっくりと歩きながら話す。お疲れのようだけど、何か楽しそうにしているなあ。何かあったのかな。

「そういえば、朱音くん」

「ん？」

「明日から、編入生が来ます」

この時期に編入生、珍しいなあ。と思ったけど、あたしもそういえば編入生って扱いだった。

「へー、急だなあ」

「わたくしによる副生徒総長決議で、緊急に編入が決まりましたの」

「へえ。なんて人？」

どういう人だろう、ヤンキー？ お嬢様？ それとも普通の人？

しかし、返答は予想外のもので、斜め上から思いつきボールを投げつけられた感覚がするくらい、衝撃的なものだった。

「アイドル、ですわ」

「あいどる？」

どういうこと？

あいどる？

「赤坂凜花。りんりんと呼ばれています」

「ええええええええ！」

まさか。

今日テレビで見ていた女の子、アイドルが。
学校にやってくるなんて。

これは何だか、嬉しいけど、厄介な匂いがするなあ。

第1話 『可愛いアイドル?』

お昼休み。

あたしと紗希ねえは、二人で廊下をゆつくりと歩く。
屋上で弁当を食べるためだ。でも、何だかおかしい。
最近いつも一緒だった人がいない。

「あれ、紗希センパイは?」

「紗希ねえは、生徒総会に出てますわ
なるほどなあ。」

さすが、副生徒総長。権限が強い分、責任も多いしね。

「ああ、そうなんだ。紗希センパイだけ生徒総会に出るなんて、珍しいなあ」

「あの方は有能ですから。面倒な、りんりんの処理に追われてますの。どうも前の学校で何かあったらしいのですが、それを教えてくれませんし。今は、紗希ねえが面談しながら処理を続けていますわ」

面倒な処理。

あたしを編入させるときも、大変だっただろうけど。色々な情報を集めて、色々と手続きを行わないといけないんだろうなあ。

「へえー。アイドルだから、あんまり学校に来れないから、とか? この学校なら、なんか授業に出なくても卒業させてもらえんとか?」

結構、アイドルを学校に引き入れて、それをPRに活用したりすることがある。授業にあんまり出なくても、卒業させたりする。

りんりんも、それと同じなのかなあ。

「北宮学院は、そんなに甘くないですわよ」

「そうだよなあ、進学校だもんなあ」

黒崎家が運営するこの学校、北宮学院。

中高一貫校であり、お嬢様やお坊ちゃまに高等教育を与える場所でもある。

「しかしどうしたのでしょうか。この時期に、転校とは」

「家庭の事情？」

「さあ、わかりませんわ」

「うーん……」

何だろうなあ、忙しいアイドルが通える場所でもないだろうけど。テストとか、宿題とかもそれなりに多いしなあ。なんで、北宮学院に編入しにきたんだろう。

「深いことはお気になさらず。どうせ、関係のないことですわ」

「確かに。編入は中等部三年に、だから後輩だっけ。関係ないよなあ」

「はい」

「でも可愛かったよね、えーっと、りんりん」

頭の中に、一人の少女を思い浮かべる。

ヒラヒラの衣装をまるで天女の羽衣のように身に纏い、きらきらと綺麗に輝く金髪を振りながら、可憐に踊り歌う姿。

やっぱりアイドルだよなあ。

「浮気ですか？」

じとーっとした目で、しおりんが非難めいた視線を浴びせてくるけど。

誤解もいいところだ。

「う、浮気じゃないよ！　可愛いのは正義なんだよ！」

「怪しいですわね」

「というか、まだ付き合ってますらないから！　紗希センパイ全然、俺のことを彼氏だと思ってないから！」

あたしと、紗希センパイは疑似カップルとして付き合うことになった。

疑似カップルとして付き合い、振る舞うことはあるけど、それ以上の関係に進展したわけではない。

あたしのライバルは、あたし（女）だから、まずは彼女に勝たないといと。

「確かに。前からあんな感じですが」

「はは……」

自分のことを話せばいいのでは、と思うんだけど、話せないんだよなあ。

問題を先延ばしにしてるだけ、なんだけど。うーん。

「それでも、少しは前進してるのでは」

「そうかなあ……」

「気は長く持ってくださいませ。まだまだ時間はありますわ」

「そうだなあ、そう信じたいよ」

いつかは話せたらいいなあ。

第1話第2節 『そんなことはないですよ』

屋上に到着。

ドアを開けると、爽やかな風が肌を撫でてくる。

「……ん？」

「あ」

青い空、白い雲の下。太陽に照らされた屋上。
視界の先には。

「なあなあ、しおりん。まさか俺たちって今テレビの中にいるのかな？」

「何を言ってますの。ここは現実、リアルですわ」
想像もできないような光景が、広がっていた。

今までなら、考えもつかなかったようなことに、あたしとしおりんは、ただただ驚愕の表情を浮かべるほかなかった。

「だよねあ」

「しかし、わたくしも自分の目を疑っています。おかしいことではないのですが、何だかおかしいことのような」

「だよねあ」

でも、これは現実なんだよねあ。

目の前の非現実に、あたしたちがしばらく硬直していると。

「あ、副生徒総長ー！」

紗希センパイの稲穂色の髪の毛とは違い、セミロングの、ヒマワリのような明るさを持った艶やかな金髪を携え、それをふりふりと降らしながら、宝石の輝きを笑みに浮かべながら一人の少女がこち

らに向かってやってくる。

「は、はあ……」

「どうしたんですかあ、こんなところに来てー」

この元気系の少女こそが、赤坂凜花。十四歳。

通称、『りりん』。大人気アイドルであり、山学中学校の三年生に編入してくる少女。

その振る舞いからは堂々さと、芸能界を勝ち残ったと同時に身に着く、オーラののようなものが漂っていた。

手続きの関係で、しおりんと彼女は知り合ったのだろう。そうだろう。

「い、いえ。お昼ご飯を頂こうかと思ひまして」

「これは青木朱音。ヤンキーですわ」

「そうなんですかあ、あれ、そっちの方は？」

きらりと輝く笑みを向けられた。

何だこのアイドル、可愛すぎる。

「失礼なしおりんだなあ」

「ヤンキーさんこわーい」

「あ、あはは……」

笑うことしかできない。

くそう。

「それはそうと、赤坂さん。どうしてここに？」

「えーっですすね、もう一人の副生徒総長が」

「はい」

「ヒマなら、遊んでおいでと、解放……いえ、屋上に行ってきたらと仰ってくれたので！」

「解放？」

しおりんの顔が曇る。

何だか、意味深な言い方だったような気がするけど。

「えへへ」

誤魔化すように、赤坂凜花は笑った。

「……何だか、ワケがわかりませんわ。処理は終わっていませんか？」

「え、ええっと、はい！」

処理が終わって、屋上にいたのかと思ったけど、実際は違うらしい。

ということは、何か手違いがあったのだろう。

「わかりましたわ。朱音くん、わたくしは少し、紗希ねえの様子を見えます」

「え、え？」

「何だかトラブルが起こってるような、そんな匂いがしますの。ではその子、よろしく頼みますわね」

唐突すぎる。

ちょっと、あたしとこの子は全然知り合いじゃないんだから、放置しないでほしいんだけどなあ。

「俺が？」

「はい。信頼していますからね」

「わかったよ……」

そこまで言われたら、やるしかない。

信頼しているとまで言われたらなあ。

「では、失礼いたしますわ。また後ほど、部室で」

そして、副生徒総長は去っていった。

その後姿からは、やれやれというような、気苦労のような色が見えた。

「う、うん……」

まあ、こうなれば。

この場に残されたのは、あたしとアイドルさんだけ、なわけだ。

とりあえず、自己紹介しておこう。気まずいし。

「えーっと、青木朱音です。よろしく」

「あかね？ 何だか、女の子っぽい名前ですねー」
ぎく。

確かに、朱音って女の子っぽいよね。

「うう、女の子だからね。」

「う、そ、そうかなあ。えっと、赤坂凜花って名前だっけ？」

でも、その正体を知ってるわけがない。

だから、平静を保ちつつ、問いかけてみる。

「りんりんと呼んでくださいっ！」

「り、りんりん」

何だろう、この笑顔。

明るくて、優しく、包み込むようで、温かくて、輝いているの
に。

あんまり、ぽかぽかとしてこない。

「はい、そう呼んでくださいっ」

「う、うん。よろしくな、りんりん」

これが、作り笑いというやつなんだろう。

愛想笑いができなければ、芸能界じゃ勝ち残れないだろうしなあ。

「はい。よろしくお願いします、朱音センパイ」

「お昼ご飯、食べた？」

「いいえ、まだなんです」

「そうなんだ。じゃあ、一緒に食べよう」

社交辞令みたいなものだけど。

ここで立ち話をするのも何だから、早くベンチに座りたいよね。

「持ってきてないんです、お弁当」

「じゃあ、俺のをあげるよ」

「いいんですか？」

「うん。量はあるし」

「見かけによらず、優しいんですねっ！」

見かけによらずってこの、失礼な娘だなあ。

この笑顔で言われてしまうと、何も言い返せないんだけどさ。とりあえず、ベンチに移動してゆっくりと座る。

「朱音センパイは、副生徒総長と仲良しさんなんですか？」

すると、りんりんも追従し、あたしの隣に座った。

やだなあ、いい匂いがするなあ。さすがアイドルさんだなあ。

「どっちの副生徒総長？」

あんまり気にせず、というか、気にしないようにしながら、あたしは彼女の質問の意図を尋ねてみる。

「えと、紗希センパイのほうですっ！」

「うん。一応、俺が彼氏なんだ」

「え？ え？」

「彼氏といっても、ニセ彼氏だけだね。色んな事情があって、そういうことになってるんだよ」

「難しいんですね、朱音センパイっ」

事情を話す気はない。

事情を話せば、あの事件のことや紗希センパイのバックグラウンド、その他のことを話さなくてはいけなくなるし。それくらいの回答でいいよね。

「はは、そうかもしれないなあ」

「……」

「……」

「……」

沈黙が二人の間に流れる。

うーん。気まずい。そうだ。せっかくだし。

「あのさ、りんりん」

一つだけ、聞いてみよう。

「はいっ」

「アイドルって、大変？」

尋ねると。

「いいえ、そんなことはないですよっ」

明るい笑みを浮かべて、りんりんはそう答えた。

「そうなのか……」

「はいっ」

「……」

でも。

どこかその笑みには、かげりがあったような。
そんな気がした。

第1話第3節 『編入部員!?!』

その後、あたしと紗希センパイ、しおりんの三人はいつものように、英研の部室に集まっていた。

最後に紗希センパイが部室にやってくるやいなや、彼女は何やら重いトーンで話を始めた。

「朱音くん、汐里。大切なお話があります」

「どうしたんですか紗希センパイ、そんな急に改まって」

「何だかお疲れですわね」

何だか、紗希センパイの雰囲気重い。

重いというよりも、疲労に満ちているというか。

その理由はわからないけど、疲れ気味の紗希センパイは言葉を紡いだ。

「色々ありました。えーっと、明日から部員が増えます」

部員が増える。

あたしが非正式部員だったころ、つまり、紗希センパイの居場所を確保するための場所だったときの英研に、人が入ることはなかった。

それは、完全ではないとはいえアルビノである、紗希センパイを忌避する人々が多く、近寄ろうとしてこなかったからだ。

「新入部員ですか？」

今は、そんな空気は薄れつつある。それでも、部員が増えることは現時点ではなかったんだけどなあ。

誰なんだろう。

「そうです。編入部員と呼ぶほうが適切かもしれません」

「まさか」

編入部員？

ピン、ときたのか。

しおりんは、何だか苦い表情を浮かべた。

「しおりん？」

「いいえ、なんでもありませんわ」

真意を尋ねても、首をふるふると横に振られてしまった。

うーん、どうしたんだろう。

まあいいや、ちよつと今度は紗希センパイに聞いてみよう。

「でも、紗希センパイ。なんでこんな何もやってない部活に新入部員が？」

「わたしも、そのように説明したんですけどね」

「なるほど。それでもいいと？」

「そうなんです。とりあえず、人が少なく部活はどこかと聞かれ、それなら英研だと答えたら、すぐに入部したいと」

「へえー」

本当に珍しいなあ。

何もしてない部活を好んで選ぶなんて。

それなら、帰宅部やってればいいのにね。

「ということで、よろしくお願いしますね。仲良くしてあげてください」

「紗希ねえ、それは中三の子ですわよね」

突然、しおりんが苦い表情を浮かべながら言葉を紡ぐ。

中三？ どうして、中学校の生徒が高校の部活に入ろうと思ったんだろう。いや、誰でも入れるんだけど。

「そうですよ、汐里」

「アイドルですわよね」

「ええ。そうですよ」

「はあ……苦労の種が増えますわ」

何だか、話がきな臭い。

もしかして。

「まさか紗希センパイ、編入部員ってりんりんのことですか？」

尋ねてみると、

「赤坂凜花。朱音くんの好きなアイドルさんですよ」

からかうように、紗希センパイの笑い声が部室に響いた。ちよつと誤解を招いてる。それは違う。本当に違う。

「いやいや好きと違いますよ！」

「本当ですか？」

「違います違います」

「そうですか。ええと、そういうことですから、仲良くしてあげてくださいね」

否定してみたけど、何だか否定しきれない気がするなあ。

紗希センパイ、信じてください。本当に。

それはとにかくとして。

「でも、紗希センパイ。りんりんが入部してしまったら、この部活も人が増えるんじゃない？」

アイドルが英研に入部する。

となると、りんりん狙いのファンが入部することだって考えられる。

何だか面倒なことになりそうな気がするなあ。しおりんは、このことを考えて苦い表情を浮かべていたのかもしれない。

「その心配はありませんわ」

「しおりん？」

あれ、違うのかな？

なんで、そんなことを言うんだろう、と思っていたら。

「英研には、学校一のヤンキーがいますから」

「え？ 幽霊部員に？」

そんな人がいるとは思わなかった。

英研に所属しているのは、あたし（女）とあたし（男）と、紗希センパイとしおりん、四人だけのはずなのに。

そんな怖い人がいるのかあ。

「英研に常駐する彼を幽霊と称するのなら、そうかもしれませんわ」
じい、とあたしのことを見つめながら、しおりんは語る。

ぴん、ときた。

「って、俺のことかああ！」

「はい。むしろ、北学のヤンキーと言えば、朱音くんしかいませんわ」

「そうですね、そんな話しか聞きません」

「酷いなあ……」

しおりんも、紗希センパイも酷い。

実際、そんな扱いになってしまってるけど、そんなこと言わないでよう。

「そんなわけで、英研に部員は入りません」

「そんなんでいいんですか、紗希センパイ」

「はい。ここはそういう場所ですから」

「イメージ的には、ヤンキーの根城みたいになってますけど」

以前、どこかで小耳に挟んだ話。

下級生の中では、北宮学院高校の英研はあたしに支配された部活だと、言われているらしい。

本当に不名誉なことだ。むしろ、支配されてるのはあたしなのに。

「むしろ美女と野獣の愛の巣という表現も」

なんて表現をする人なんだ。

自分を美女と言い切る自信、

実際そうなんだけど、そうなんだけど。

「できません。そんな表現ははしたないですよ、紗希センパイ」

「ふふ。赤くなって、可愛いですね。朱音くんは」

からかわれたのか。

くそう。

「あー、もう！　　というか俺は野獣じゃないです！」

「そうですね。そういうことにしておきましょう」

「何だかモヤモヤだなあ」

「仲がよろしくて、良いことですわ」

あたしが弄られている様子を見つめながら、しおりんがため息交じりに語る。

「うーん……」

仲がよろしいというか。

ただ、あたしがからかわれているだけというか。

いつものことなんだけどね。

やがて、そんなぼけつとした空気を変えるように、紗希センパイが口を開く。

「それはとにかくとして、朱音くん」

「はい」

「新しい眼鏡を買おうと思うんですけど、今度一緒に買いに行きませんか？」

「え？　俺ですか？」

紗希センパイは、あまり視力がよくない。というか、これが彼女たちアルビノの特徴らしく、彼女にかけている眼鏡は特注品になっている。

見かけは普通なんだけど、光を遮断するようにできているらしい。凄いいよね。

「はい。汐里の感性だと、時間がかかってしまうんです」

でも、フレームなどのデザインは他の眼鏡と何一つ変わらない。なるほどなあ。

「わたくし、眼鏡よりもコンタクト派ですから。目、悪くありませんが」

「でも、紗希センパイの眼鏡って特注なんですよね？」

「そうですね。特注ですので、少し出かけないといけません。とっても、特注なのはレンズだけなので、フレームだけです。選んでほしいのは」

フレームかあ。

どんなのがいいかなあ。

今の、上ふち無し眼鏡のままで、いいと思うんだけどなあ。

「わかりました。いくらでもお手伝いします。というか、今日でも大丈夫ですよ」

でも、紗希センパイのお願いならいつでも歓迎だ。

野でも海でも、山でも火の中でも、どこにでも行ってやる。

「今日はちょっと、まだ生徒総会の仕事があるので。お気持ちはありがたいですが」

「そうですか。わかりました」

ふられちゃった。

仕方ないから、ちょっと聞いてみよう。

「そういえば、肌クリームとかは買わなくていいんですか？」

「クリームはまだありますから、大丈夫ですわ」

紗希センパイの肌は、メラニン色素が少ない。ということは、太陽の光、紫外線によるダメージをモロに受けてしまうわけだ。

それを防ぐために、黒崎家の会社は肌に塗りこむ、特殊なクリームを開発して、日常生活中に困らないようにした。

それによって、世界中のアルビノの人はクリーム開発以前に比べて、過ごしやすくなったらしい。

「そっか」

黒崎家は、紗希センパイを排除しておきながらも、紗希センパイに対して保護政策を打ち出してはいた。まあ、大事な娘ではあるし

なあ。

そんなことを考えていると、紗希センパイとしおりんが何かを話していた。

「それよりも眉毛、どうしますの？」

「まだ大丈夫」

「そうですの」

「眉毛？」

「少し染めなければ。ちょっと薄くなってますわ」

「どうしようかな、目立つかな」

「目立つ目立たないなら、紗希ねえは以前から目立ちまくってます」

「それもそうだね。じゃあ、また今度行こうかな」

「わかりましたわ」

何だか、意外な事実が判明してしまった。

体毛の色は、全身どこでも同じのはず。

どうして、眉毛だけあんなにクッキリしてるのかなあ、と思ってはいた。

「眉毛、染めてたんですね」

「地毛だと、金色がかった白になってしまっんです」

「あー、なるほど。髪の毛と同じですね」

「でも、黒だと何だか違和感がありますから、髪の毛よりちょっと濃い目に染めてるんです」

「確かに。そうだったんですね」

薄い稲穂色の髪の毛なのに、眉毛だけが黒いと違和感がある。うーん、どうなんだろう。わからないけど、きっとそうなんだろうなあ。

「はい。そうなんです」

「前はなんで眉毛だけ色が濃いのかなあ、って思っていました」

「ふふ。気になったのなら、言ってくれたら良いですよ。気にしませんから」

「はは……」

なかなかデリケートな問題だから、聞きづらんだよね。

でも、紗希センパイは自らがアルビノであることを、以前からあまり気にしていない。悔しいと思ったことはあるだろうけど、恥じてはいない。

もう少し、あたしも前向きに接していてもいいのかもなあ。

頭じゃ、わかってるんだけどね。

でも、今は。

「では、連絡は以上です。りんりん？　には優しくしてあげてくださいね」

「はい」

「わかりましたわ」

新しく入ってくるアイドル編入部員に対して、どうやって接すればいいのか。

それも、考えないといけないようになってしまった。

何だか、お先は荒れ模様だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8870y/>

おとこのおんなのこ

2011年12月9日03時46分発行